47.9.18
43467

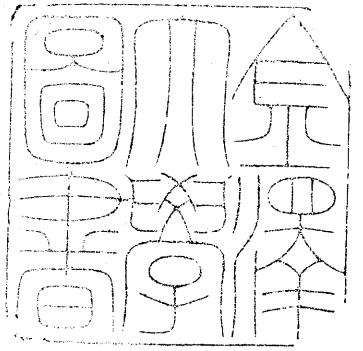
北辰

紀元二千六百年記念號

第四高等學校文化部

NO. 148

P05
H721



北辰

紀元二千六百年記念號

第四高等學校文化部

NO. 148

北辰　第百四拾八號　目次

紀元二千六百年記念號

卷頭言……第四高等學校長　岡上梁……一

南方日本の現況……理學博士・教授　熊澤正夫……二

論文

歴史主義と生の立場……小川常人……一九

農業機械化の一考察……洞庭幸夫……三八

火野葦平論……市川定三……五三

日蓮の靈覺と組織……宿波勇藏……六二

死と再生の辨證法的人生……清光照夫……七〇

歴史的なるもの……安島彌……七七

校内プール及び寮の風呂の水中に於ける細菌數に就いて……中秋田利章夫……九一

科學と宗教（上）（飜譯）……渡邊石宏山宏……九七

短歌……廣瀨治郎　小川常人　安田道夫

由良陽太郎　儀我壯一郎　和田清彦

中村峻　三好廉　神田郁夫

安島彌　小橋靖　山形利一郎

宮川浩　石上晃　池保

仲谷一男　宮地知男　橋正明

立野達郎

俳句……目崎德衛　澤木欣一　儀我壯一郎

市川定三　木下圭紹　泉健三

青園謙三郎　西本長　高畠平

詩……石上晃　高島順吾　儀我壯一郎

倉橋克　市川定三　森口徹彌

滿島俊次　吉友睦彦　水落進

石上晃・山本周三（飜譯）

もう一度（飜譯）……伊東章……一四五

小說　軍港娼妓記……市川定三……一五五

雜記　北辰報國團々則並組織……一七七

文化部報告……一八〇

後記……一九九

紀元二千六百年のあらた代を地もとどろ天もとゞろに
祝ぎ足らはさん

—茂吉—

卷頭言

第四高等學校長　岡上梁

支那事變ノ起ツテ以來急ニ轉回シツヽアル世界ノ狀勢トソノ中ニ於ケル我ガ日本ノ位置トヲ考ヘ一方ニハ我日本ノ使命ト國內ノ將來ノ狀態トヲ顧ミル時、我々國民ハ茲ニ速カニ自己ノ舊キ殼ヲ脫キ棄テ、新タナル體制ヲ整ヘ日本國民ノ眞ノ姿ニ立歸リ一億ノ國民打ツテ一丸トナリ、臣道ヲ實踐シテ行カネバナラナイトイフ事ヲ强ク自覺シテ來タノデアリマス。

今日ハ正ニ明治維新前後ニ似タル時代デ然モ當時ヨリハ更ニ一段ト複雜且ツ規模ノ大ナル革新ト發展ノ時代デアリマス。

此ノ時代ニ則應シテ我ガ四高モ其體制ヲ整ヘテ進ンデ行カウト思フノデ九月以來着々其ノ計畫ヲ進メテ來タノデアリマス。

總テノ準備ガ出來テ、本日菊花薰ル明治節ノ記念スベキ日ニ我ガ北辰報國團ハ茲ニ結團式ヲ擧グルニ至ツタノデアリマス。

サテ、茲ニ報國團ノ形式ハ整ツタノデアリマスガ、形式ガ整ツタ丈デハイカナイ、ソノ運用ト實踐ガ大切デアリマス。若シ徒ラニ舊來ノ慣習ニ囚ハレテ、本團ノ精神ヲ實現スル事ガナカツタナラバ陛下ニ對シ國家ニ對シ申譯ガナイノデアリマス。吾々ハ只今奉讀シマシタ學徒ニ賜ツタ勅語ノ御聖旨ヲ奉戴シテ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健以テ學徒ノ本分ヲ全ウセネバナラナイノデアリマス。總テノ事ガ盡忠報國ノ精神ニ基ク事ト實踐トイフ事ガ最モ大事ナ事デアリマス。此ニ以テ本日ノ訓示ト致シマス。

（明治節ニ於ケル北辰報國團結團式訓示）

南方日本の現況

教授　理學博士　熊澤正夫

前書

一　臺灣の土地と住民
二　蕃人と毒蛇
三　臺灣の稻作
四　小笠原諸島
五　南洋群島の自然
六　南洋群島の邦人と土人
七　南洋群島の資源と開拓
八　南洋群島と蘭印

今年は北緯二十三度半の北回歸線を越して日本領の熱帶圏に二回旅行した。

第一回は三月から四月に亙る約一ヶ月を以て台灣島を一巡した。こちらからは理科生日置辰一朗君が一人同行したが、彼地では台北帝大植物學教室及び動物學教室の各位の世話になり、又行程の一部は同大學の正宗教授が案内され、廣島高校の渡邊教授とも偶然ながら數日を一緒に行動した。兩教授ともに自分の懇意な同學の知友で、色々旅行中に裨益したところが多かつた。殊に此の渡邊博士の研究心の旺盛さに對しては、日本のアカデミツクな植物學者の誰一人尊敬の念を拂はない者がないところで、行を共にして見て今更ながら感激せざるを得なかつた。熱情を以て學問に突き進み、同學者に對してさへ範を示してゐる同博士の態度に、全く薫育されない廣高生徒がゐるなら、學問と大學に進む事とを斷念して、一日も速に體操學校へでも轉校するやう、その生徒に勸告してやりたいとさへ思つた。

第二回の旅行は七月から八月に亙り委任統治領南洋群島の一部に渡つた。門司で船側に日ノ丸を畫いた蘭印行の船

に乘り直航してパラオで下船し、パラオ諸島の一部をなすコロール島・マラカル島・アラカベサン島・パラオ本島を歩き、歸航にはテニアン島・サイパン島に寄港した上、勤勞作業に間に合はせる爲め八月末に横濱へ歸着した。單身で出掛けたのであるが、彼地では南洋廳及び事業會社から豫期以上の好遇を受け、特に廳からは農林技手を一名案内兼援助の爲め幾日も同行させて呉れた。

自分の乘つた四千噸の船が門司を出て全七日の間、島影一つ見る事なしに——汽船一隻と鯨二頭には出會つたが——眞南を指して航海をつゞけ、初めて着いた所が北緯七度の日本領パラオ諸島である。南十字星が輝き、十ノツトと云ふ足の遲い船でも、後四十時間あれば赤道に達する。日本もこれで仲々大したものだと獨り悦に入つた次第である。

二回の旅行は共に勿論植物關係の問題で、主な目的が二つあつた。自分は過古十箇年ばかり、主として或る双子葉植物の比較解剖に從事してゐたが、近年單子葉植物に興味が移り、差當りトウモロコシを材料としてその維管束解剖にいさゝか努力しつゝある。然し更に自分の研究に都合よい特徴を持つた植物の入用を感じた。それには植物の種類の豐富な熱帶の地に求むる必要のあつた事が目的の第一。學校の運動場の雜草は單子葉植物と違ふかと云ふ人があるかも知れない。然しメンデルが豌豆を使はなかつたとしたら、八箇年であれだけ奇麗な法則を見出す事は出來なかつたらう。自然は一滴の水、一片の木の葉の内にも等しくその法則を潜ませてゐる。唯或る場合には比較的見出され易い狀態で隱され、他の場合には見破るのに困難な狀態で隱蔽されてゐるに過ぎない。然し後者を相手に選んで努力し、その結果が白紙に終つたなら、精神の鍛錬になるが、科學とは成らない筈である。

第二の目的は椰子類に對する豫備的知見を得る事にあつた。單子葉植物の維管束の基礎的研究として百年程前に一獨逸人が椰子類に就いて之を行ひ、その結果が今日でも尙一般に廣く内外の書に引用せられてゐる。然し自分の研究

中その業績に疑惑を懷くに至り、之に對して機を見て再檢討の要に迫られたからである。

然しこゝでは自分の植物旅行を語る氣はない。それは身に覺えのないスポーツ精神——此の言葉は舊體制時代のものらしい——を說くよりは、植物學の教官は先づ第一にその學問を通じて、生徒諸君に接する方がいはゆる薰育的効果がある筈との信念を放棄したのではないが、それには又別に適當な機會があらうと思ふからである。それにも拘らず、尙植物に觸れることがあつたら、それは自分達が紙の家に住み、木のシヤツを着、自宅で大豆のコーヒーを飲んでゐるばかりでない。如何に自分が人格圓滿でも植物の古い教員免許狀を持つてゐなかつたら、こゝにペンを取る機會がないと云ふ事を銘記して御許し願ひたい。

一、台灣の土地と住民

台灣は日本領樺太と同面積で、九州より稍狹いが。それでも尙南北大凡百里に近い、そして住民に滿ちてゐる。人口密度樺太が一キロ平方に九人、北海道が三十五人に對し、台灣は百四十五人で內地平均に較べて稍劣る程度である。而も台灣島の半分足らずの面積は山地であり、且蕃地と云ふ特別行政區域で、日本帝國の刑法も民法も實施せられず、比較的少數の蕃人以外は原則として立入りに制限を受けてゐる所なのである。從つて此の區域外に住民の殆どの部分がゐるわけであるから、恐らく一キロ平方の密度二百數十人に及ぶことゝ思はれる。工業の發達の不充分な土地で、これだけの人間が生活出來るのは、北海道・樺太や滿洲等の北地にその比を見ないところで、主として太陽の恩惠で農業に依存出來るからである。地味が肥えてゐるからと云ふ人があるかも知れないが、實際はラテライトと云ふ重い赤土の部分も多く、肥えてゐるどころか、地味は內地に較べて遙に下位にある。從つて矢張り太陽のエネルギーの豐富に歸さねばならない。

住民の九十二乃至九十三％は嘗て對岸の支那から渡つて來た漢族で、內地人は五％に過ぎない。內地人は役人・社

員及びそれを相手として實業に從事する者と見て良い。首都である台北市でさへ三十餘萬の市民中內地人は十萬前後である。こゝに日本の他の外地と根本的に異なる大きな特徵がある。朝鮮に在る內地人は三％位で台灣より率が少いが、他は朝鮮を鄕土とする朝鮮族である。然るに台灣の本島人にとつては對岸は祖先の鄕土であり、親屬が現住する地である。こゝに問題があり、爲政者の苦心がある。漢族は商才に秀いで勤勉である点、世界的名聲を博してゐる種屬で、一般に民度が低い。日本の治下に入つて正に半世紀に近いが、尙本島人兒童の就學率は五十％附近に留まる。台北帝大の一教授は自分に笑つて語つた「宅(ウチ)の子供は小學校へやらずによさうか」と。反問したら台灣では小學校は義務教育でないから、我々も市役所へ就學願を出すのを忘れたらそのまゝだと答へた。但し義務教育は最近の內に實施せられる筈である。

兎に角台灣と云ふところは我々一介の旅行者には支那の一部の樣な錯覺を與へる。然し幸な事に最近は人心が安定し、住み良くなつたと云ふ話を至る所で聞いた。それは支那事變當初、蔣介石側のデマニュースを信じて動かなかつた彼等の內から多數の軍夫が應召して、戰地で日本軍の强さと支那軍の弱さとを直接見較べた結果だと云ふ。尙住民の問題は色々書きたい事が多いが、故意に差控へておく。

二、蕃人と毒蛇

高等學校の生徒の時、自分は台灣へ登山に出掛けようとしたが、生蕃に首を取られるか毒蛇に咬まれるに決つてゐるとて兩親は遂に旅費を呉れなかつた。現在でも此の程度の諸君があるかも知れないと思つて、少し書いて置かう。

蕃人は約十五萬と云はれてゐるが、これは餘り正しいものではなからう。蕃人は現在高砂族と云ふ美名のもとに一括されてゐるが、多くの種屬より成り、それ等は互に習慣・言語が異なり、別々の時代に南方から渡航して來たマライ・インドネシヤ系のものである。現在では是等は二群に區別して考へられる。卽ち一群は大体に固有の風習を持つ

たまゝ又はその風習を失ひ、農業をやり又は勞働者として普通の經濟生活を營む者で、納稅し普通の區域に住み漢族と混じてゐるのもある。他の一群は特別行政區域の所々に蕃社なる部落を形成して居り、官營の交易所で必要品を物々交換し、該區域から無斷で出る事を禁ぜられてゐるもので、眞の蕃人である。從つて特別行政區域卽ち蕃地の山へ行くと、鳥の羽の頭飾、子安貝の首飾、カモシカの皮の胴着、腰に蕃刀と云ふ勇ましい男に出會ふ。砂金で一時に名を賣つたタツキリ溪では、額と口もとに入墨した蕃女が布に包んだ赤坊と荷物とを身體の前後に振り分けに擔いて、有名な絕壁に臨む鋭い岩路を素足で通るのを見掛けて、野生の人間を感歎したのである。我々の靴底の代用革は、傷んでも自然に癒る彼等の生きた眞物の革には到底對抗出來ぬと大笑した。自分は山奧で自由に生活してゐる蕃人と、蕃地から出て普通の經濟生活をしてゐる蕃人とを見較べて見て、一つの發見をなした。前者が非常に瘦せて鋭く見えるに反し、後者は肉附良く何となく鷹揚に見える事である。醫者は前者の瘦せた型を目して營養不良と云ひ、誰かは體位向上に無關心だからとでも解釋するであらう。ところが我々生物學者から見れば、山奧で自由の生活をしてゐる蕃人の瘦せてゐるのは、機敏な運動を要する環境に巧に適應してゐるのであり、平地にゐて肥えてゐるのは家畜化された病的現象と云へないだらうか。これは肥えてゐる人に對して、瘦せてゐる自分が自己を辯護する言葉であり得ない事は、野生のものより家畜の方が遙に價値のある点を考へれば明かである。

少し脫線して恐縮だが、兎に角今日の彼等蕃人は全く溫和な愛すべき人類で、傳說により彼等は日本人と兄弟だと信じて日本人を大いに尊敬し、反對に彼等より進んでゐる本島人を却つて輕蔑してゐると云ふ。戰地から歸つた傷病兵を迎へる際、感激して眞に泣くのは彼等蕃人だと聞いた。台灣の蕃人は全体としてはアイヌと異り、今のところ減少の傾向はない樣である。

然し此の蕃人たるや首狩で名を知られてゐたゞけあつて、今日に至るまでの當路者の理蕃の苦心は大變なものであ

つた。明治四十三年討伐開始以來昭和四年までの二十箇年間に、相當巨大な討伐費を消費し、殉職死傷者一萬餘人、沒收した銃器三萬二千個に及んだと云ふ。比較的近年起つた有名な事件は昭和五年十月末の霧社事件である。官權の使役に對する不滿から、霧社附近の蕃人三百名が反抗し突然來襲して內地人百數十名を殺した事で、飛行機・山砲まで出動して霧社を蕃人の手から奪取、十二月に全く鎭定したのである。日本帝國內で昭和の御代に多人數が火器を持つて右往左往したと云ふ事は、人の知る如く後年にも帝都で一回起きたが、共に誠に想像も及ばぬ不祥事と云はなければならない。

未だ數年前までは百數十名の未歸順蕃がゐて、日本帝國の威令に服さなかつたが、今ではそれも歸順して了ひ、五千餘名の警備警官によつて完全に統禦されてゐる。無論小さい殺傷事件等は起きてはゐるだらうが、その程度の事件は內地の大都會でも時折起きて三面の記事になるから特筆するに及ばない。

次には毒蛇だが台灣名物に數へられる位で、十數種類棲息して居り、台北帝大の前の總長も別莊の庭で咬まれたと云ふ。然し自分が二十日間植物を求めて歩き廻つて、尙不幸にして一回も御目にかゝる機會がなかつた位で噂程のものではない。昭和十年度には約六十名が命を失つたことになつてゐる。實際はそれより何割か多いだらうが、台灣の住民五百餘萬人から見れば、死んだ人には氣の毒だが問題にならない。內地でも蜂に刺されて死ぬ新聞記事を稀に見掛ける。

惡いものゝ序にマラリヤについて一言するが、是だけは少し要心した方が良い。少し統計が古いが昭和二年度には死者五千人で人口千に對して一・三人死んだことになつてゐる。基隆の陸軍將校に聞いたのであるが、あそこでは兵員は年中一日一回キニーネを飲み、年中蚊帳を懸つて豫防してゐると云ふ。然しこれは多人數が宿泊し特に要心する軍隊の話で、台北の如き大都會の中央では、餘程運の惡い人でなければ大丈夫らしい。然し中南部・東部には絕えざ

る流行地があつて、官權の力により全住民に對し常時採血檢査及び强制服藥を實行してゐる。自分達も路順でその樣な地方を通過したが、宿泊を避ける樣に努めた。

三、台灣の稻作

水と炭酸ガスを原料として、人類を初め動物の食糧たる糖類を合成すると云ふ最も重要な工業は、殘念ながら二十世紀の人類社會には存在しない。從つてそれは植物の行ふ炭素同化作用に全然依存してゐるわけであるが、此の作用には太陽のエネルギーが直接必要である。此の意味で熱と光に惠まれた台灣に農業の發展するのは當然で、多數の住民を維持出來るわけである。

米・甘庶（サトウキビ）及び甘藷（サツマイモ）の三者は台灣の農產物の主要なものであり、汽車の窓から見られる耕地は必ず此の三者のいづれかと云つてもよい。過日上京して大學の一教授の前に立つた時、又例によりそちらでは勉强の時間はあるかとでも聞かれるかと思つてゐたのに、最初の一言が「米はどうだね」だつた。日本一流の學者に台所の心配をさせる樣な事では、日本の科學が營養不良になると、相手の判らぬ義憤を覺えた次第である。それでと云ふわけではないが、少しばかり台灣の稻作の話を書いて見よう。云ふまでもなく、日本人は殆ど米を每日食つてゐるばかりでなく、日本の全戸數の極めて大きな部分が米を生產し、それを賣つて經濟生活をしてゐるのであるから直接是程重大な問題はない。從つて米に關連しては各方面の無數の專門家が居り、廣い分野に亙り錯綜した難解な問題を供給する。

稻は植物の一種であるが、米は商品であり又食品である。稻作は植物の一種を生長させることではなく、それ等の商品なり食品なりを獲得する手段であるから農學部の範圍だ。こんな理由かどうかは知らぬが、七箇年間殆ど每日理學部植物學教室に通つた自分が、そこで米とか稻作とかと云ふ言葉を唯の一回も耳にした記憶がない。從つて米とか

稻作の問題には餘り觸れない方が安全である。但し自分も嘗てさうであつた樣に、台灣は米が一年に二回も出來るから百姓は內地の二倍の收入がある等と思つてゐる人があつたら、その蒙を開きたいと思ふ。

台灣の冬は短いし寒いと云つても內地と譯が違ふ。從つて二月乃至三月に植ゑて六月乃至七月（特に早い所では五月末）に收穫が得られ、その後同じ田に再び植ゑて十月乃至十一月に二回目の收穫が得られる。かく第一期作と第二期作とを共に行ふ水田を兩期作田と云ふ。これで一回の收量が內地と同じであり、台灣の水田がすべて常に兩期作田であつたら問題はない。ところが實際は兩期作田ばかりでなく、所により第一期又は第二期作のいづれか一方のみしか行はない、いはゆる單期作田も多い。尙又內地と違ひ同じ所で今年も來年もその次もと、年々稻作ばかり繰り返す事の出來ない事情の所がある。更に又台灣に於ける一回の稻作の收量は內地に較べて遙に劣り、一期作、二期作を合せて尙內地一回の收量と大差ないのである。どの作物でも程度の相違であるが、特に稻作には水が必要で、之が不便であれば話にならない。ところが台灣では一年の總雨量は非常に多いに拘らず、百姓は一般に水に不便をしてゐる。おかしい樣であるが、實は乾期と雨期とがあり、雨期には多量の降雨で河川は一時に汎濫するが、乾期となると干上つて赤土は鍬が深く通らない位固まつて了ふ。從つて水を得られる時期の單期作をしなければならない事になる。然し貯水池を作り灌水路を開く事によつて水の經濟を計る方法がある。これが埤圳（ヒシウ）と呼ばれるもので各所に行はれ、多くは水利組合の經營であるが、私營のものであれば丁度我々の家庭の水道と同じで、給水量に應じて企業者に代償を拂はねばならない。埤圳の最も大仕掛のは嘉義台南附近に灌水する所謂嘉南大圳で、これは十年計畫、五千數百萬圓を投じてダムと灌水路千三百キロを作り、廣大な面積に水の人爲的配給を行ふもので、工事後數年で既に農作物は十割の增收に及んだ。但しその結果兩期作田ばかりになつたかと云ふとさうではない。それ程の多量の水は得られないし、又甘庶や甘藷の栽培の必要もあるから、甲地に對して或る年は充分の水を確實に配給して稻作を行ひ、翌年に

は水の配給を節して甘庶に、その翌年は甘藷その他の雜作に轉向し、その次に水田となし同樣の事を繰り返すのである。その結果從來の樣に天然の降雨に依存して、水田が途中で干上つて收穫を失ふ樣な事がなくなつた。

内地產米の不足は現在朝鮮及び台灣から多量の移入を行つてゐる事は衆知の通りであるが、尙それでも不足し高價を拂ひ外米の格外品を輸入して問題となつてゐる。現在の台灣の米の產出量は領台當時の五倍に及んでゐるが、素よりこれは内地の不足を補ふ目的の奬勵の結果であり、台灣から見れば母國の食糧不足に貢獻する偉大な使命である。ところが内地が豐作であると、安價な台灣產米の内地浸入は内地農家を脅かす事著しい結果となり、此の内外の摩擦の輕減の問題には當事者も手を燒き、その間に色々な法律が作られ、台灣で計畫中の水利事業は米の增產を伴ふからとて中止の運命に至つた場合もあつたのである。米はその性質上伸縮性のない商品であり、國際商品として生產過剩品を輸出に差し向け得ないから、それも止むを得ない事であつたらう。然し今や日本人の主食を米以外に轉向させようとする眞面目な意見さへ散見する時代となつたから、台灣產米に對する依存性は更に深まつて來た。

台灣產米は昔は到底我々の口に合はないものであつたが、今日のは蓬萊米と呼ばれ内地米との區別は普通の人には出來ないまでになつてゐる。台灣の稻は在來種と蓬萊種との二系統あり、前者が我々の口に合はないものであるが、今日產額は非常に少くなつた。

蓬萊米と云ふのは内地で栽培されてゐる系統の稻を、台灣でその土地に適する樣に品種改良したものに對して、大正十五年に命名されたものである。内地人の嗜好に適する内地種の稻を台灣に栽培する試みは、領台後間もなく行はれたのであるが、こんな素人から見て問題にならないやうな事が實際上は容易に成功しなかつた。それの詳細は仲々面白い事であるが書いてゐる暇がない。台灣の多くの技師達が異常な苦心をした上二十年以上かゝつて、やうやく大正十年頃に至つて内地種の台灣に於ける栽培に確信が出來、積極的奬勵に依り普及され初めたのである。特に昭和に

なつてから内地種の人工交配で「台中六十五號」と云ふ品種が末永技師に依り育成されてからは、品質と收量とが著しく向上し、蓬萊米は堂々と内地で幅を利かせ、又沖繩縣までその品種に依り收量が著しく增加する事になつたわけである。

四、小笠原諸島

小笠原諸島は琉球列島と大体同じ緯度に分布する三十餘の小島から成り、主島なる父島に行くのに横濱から三日ばかりかゝるが、行政上は東京府の一部である。一番大きな父島でさへ一里半平方の面積はあるまいし、火山性で斜面が多く、森林は破壞され、台北と同じ亞熱帶的氣溫を示してゐるが、生產的方面では餘り貢獻の餘地がない。然し地圖を見れば判る通り海軍には大切な所である。

住民は明治になつてからの内地人移住者で固有の風習がない。唯父島の一部にはアメリカ・スペイン等の漂着者の子孫が少數ながら歸化人として多少固有の習慣を殘し、ブロクン・イングリツシュを使つてゐるに過ぎない。珊瑚礁が美しく、バナナが實り、固有植物も多い亞熱帶で、ちよつと行つて見るには面白い。自分も嘗て植物旅行を試みたが、最近の事ではないので之で止める。

五、南洋群島の自然

南洋群島は云ふまでもなく委任統治の形で日本の領土の一部に編入された所で、地圖を擴げて見る時、廣大な大平洋の廣い範圍にパラ〳〵と振り散らされてゐる事と、各個が小さい事とで今更ながら一驚せざるを得ない。群島の東西の距離は台灣から南半球のオーストラリアに至る距離に當る。全部が日本領中他に例のない純熱帶で、小形の礁島まで入れゝば島の全數一千五百個と云ふのだから大したものだが、總面積が東京府と同じと聞くと情けなくなる。一番大きな島でも五里四方を越えず、此の程度のものがポナペとパラオ本島等の二三個、一平方里以上のものを入れて數

へても十數個に過ぎない。大多數は波の上に出たり隱れたりしてゐる無人島であり、土人の住んでゐる島でも、何年かに一度の大荒れの時には波が島の上を堂々と横斷し、土人は椰子の木の上に避難しなければならないのである。從つてこんな所を預かつても、統治に一年三百萬圓もかゝつて一利ないから國際聯盟に返上せよと云ふ意見が嘗て眞面目に語られたのも無理はないが、今となつては取りに來ても經濟上からだけでも返せない所になつた。

氣候は純熱帶的で夏冬の別は全くなく、七月でも一月でも同じく月平均氣溫は二十七度位で、三十度を越す日は少く絶えず微風があつて、東京市內の盛夏より身體に樂だ。行つて見て扇子や扇風器は一回も見掛けなかつた。毒蛇はゐないし、鰐のゐる所はあるが、捕獲を禁止されてゐて、一目見たいと思つた自分もその目的を達しなかつた位に少い。南洋廳前の大通の街路樹は見上げるばかりの椰子の木である。渴した下級邦人がツカ〳〵とそれに登り、實を落して水を飲んでゐるのを自動車の內から見掛けた。通行人はそれを見返しもしない氣樂な所である。どんな植物でも地球上にあるものなら溫度の不足で成長しないと云ふ心配はない。一年の雨量は二千から三千ミリ以上で乾期と雨期とがあるが、大海中の孤島で沙漠にはならない。たゞ困つた事は良い地下水が得られないから、各戶は屋根に降り注ぐ天水をタンクに貯へて年中常用せねばならない。從つてタンクの四個ある家は高等官の官舍、それ以下のは判任官や屬官の官舍と判る。

東の方のマーシャル群島の海岸は珊瑚の破片で白く、そこに亭々と椰子が生えてゐる。北の方のマリアナ群島や西の方の西カロリン群島の多くは、火山性の基盤より成り數百米の標高を示す島もあるが、是等の海岸は陵起石灰岩の岩壁をなしたり、紅樹林（マングローブ）で取り圍まれてゐて船着は困難である。

熱帶の一特徵たるマングローブとは海水に根を洗はれる場所に好んで生育する性質の樹木類の總稱で、台灣では極めて局部にその見本を見るに過ぎない。パラオ諸島では之が陸地と海面との境界に厚い密林の層を形成してゐる所が

多い。滿潮時にはマングローブの生育地は水深一米以上の海となり、幹のみ海面から出てゐるから、カヌー一隻の通過を許さない。干潮時には泥地の密林となり呼吸根を多く現はすので、文字通り盤根錯綜して人間一匹の通過も容易でない。從つて是等の海岸に上陸する爲めには、マングローブを伐り拂つて作つた狹い水路を往復する以外に途がない。而も數キロ離れた島へ通ふ二三十人乘の小さな定期船さへ、每日一定時に發着する事が出來ないのである。即ち滿潮時に先方の船着場に入り直に引返すか、又は翌日の滿潮時まで歸航を待たねばならない。小さい島だからどちらを向いて歩いても間もなく海濱に出る筈なのに、實は仲々海に寄りつけない。マングローブは溫帶の植物學者には珍しいものだが、現地では人泣かせの存在で、從つてそれ等の島では暑いからとて海水浴などと云ふ眞似は思ひも及ばぬ。

六　南洋群島の邦人と土人

南洋群島には現在日本人が七萬餘、土人が五萬ばかりゐて一平方キロ五十餘人の密度になる。彼地では日本人を邦人、土人を島民と呼ぶ。邦人の內には勿論半島人も入るが、島民は日本人ではなく、國籍を持たぬおかしな身分である。從つて朝鮮の半島人や台灣の本島人と異なり、彼等と邦人との正式の結婚も有り得ぬわけである。

七萬餘の邦人の壓倒的部分が、最大な島ではないところのサイパン及びテニアンの兩島に住んでゐるが、これは此の兩島が產業的に群島中拔群の成功をしてゐる結果である。主として糖業に關聯した農業勞働者としての沖繩縣からの移民で、邦人の實に七割を占めるのは意外であつた。沖繩縣は土地の生產力弱く民度が低く、人口密度が極端に大きいため遠くへの出稼の風習があるから、移民として壓し出てゐるのは群島に限るわけではないが、民度の低い点で群島の處女地の開拓にも沖繩縣人の力を借りるのが適當だつたからであらう。尙現在でも事業會社は勞働者を半島から移入しつゝあるし、南洋廳自身も開拓移民を入れる計畫を實行中である。

島民は多くの島に散在し、且小さい個々の部落を作つて居住してゐる。唯テニアン島には邦人が二萬近く居りなが

ら島民は一名も現住しない。昔は此の島を中心として多數の土人がゐたらしいが、疫病の爲め全滅したと云はれてゐる。一説にはスペイン領であつた時に、彼等からの抵抗を恐れて白人が故意に全滅させたとも云はれ、日本の開拓の頃から既に殆ど無人に近かかつた。他の多くの未開拓の島では無論邦人より壓倒的に島民の方が多い。

土人はインドネシヤ系その他の混血したものゝ樣で、我々素人の目にも髮が細かく縮れ鼻の低いのや、體格が著しく大きく、鼻條通り顏の長いの等、明かに異なる型のを見る。昔は矢張り仲々頑强で良く殺傷し白人を惱ませたものらしいが、キリスト教の感化で今では昔日の面影は消え失せ溫和そのものである。自分も渴した場合椰子の實を幾個も取らせてその水を飲んだが、代償に八錢のバツト（群島では內地產のバツトは八錢である）一個與へたら、ゲーリークーパーに似たところのある一見甚だ立派な土人がペコ〳〵頭を下げて敬意を表した。

彼等は自然に生育したパンの木の實やバナナ等を食ひ、渴すれば年中實つてゐる椰子の實の水を飲む。住は椰子の葉で雨露を凌げば足り、衣は無くても差支へない。魚は珊瑚礁の間の奴を木を尖らせた槍で突けば良いから、生活の爲めの努力は全く不要である。病氣になれば死ぬものと信じ敢て長生の爲めに思ひ惱まない。從つて勞働は彼等の最も好まないところだ。金に魅力のない人間に對しては文明人も如何とも術がない。官は强さうな男を集めて離島に連れ出し、正當な賃金を與へて勞働させてゐるが、彼等から見れば一向嬉しくもない賃金をもらつて、その代りに留守中に妻君を他人に横取られ潛かに怨を飲む事になる。土人の勞働力を利用出來ない事は、未開の熱帶地方の企業家の共通の惱みである。

ヤップ島の女は今日でも腰に椰子の葉を下げてゐる以外は全裸であり、ヤルート島では椰子の葉の屋根は直に地面に接し、床がないところに住んでゐると云ふ。然しかういふ狀態は次第に少くなりつゝある。文明人に接すると女の子は硝子のブローチに氣を惹かれ、男は白いパンツが欲しくなる。かくて程度の低い經濟生活に少しづゝ近かづきつ

つある。或者はポン〳〵蒸氣の運轉手になる。他の者は仲仕になる。家族は椰子の實からコプラを作る。裸足を止めて草履をはく。かくて今日はヤップ島を除いては、女はすべて內地で夏によく見る簡單服を着てゐる。マルキヨクと呼ぶ土人部落へ入つたら數個の土人の住居の間に、そこに似つかはしくない幅の廣い道路が一直線に走り、人の餘り通らない路上には自然に落ちた椰子の實がゴロ〳〵してゐた。日本語の判る土人に尋ねたら前の酋長が日本の銀座を見て來て作つた路だと答へた。これに至ればいさゝか行き過ぎた話で思はず苦笑した。

土人はカナカ族とチヤモロ族とに大別される。後者は數少く白人の血が混つてゐるとかで、概して生活程度高く、生活樣式も歐風の傾向があつてサイパン島に多く住んでゐる。その中の一二の者はピアノを持つてゐると云ふ。彼等は邦人に地所を貸し、家を貸して生活してゐる。それはそれで良い。然し邦人の或る階級は彼等の現住してゐる家の床下に常住させてもらつてゐる實例がある。こゝまで來ると貸借關係の一組の住民の問題として片つけられない深刻な問題を供給する。

七、南洋群島の資源と開拓

群島は財政的に既に自立するに至つた。日本の外地の內、樺太と朝鮮が財政的自立の域に至らないのに、台灣と群島とが既にそれが出來たと云ふ事は、何と云つても偉大な太陽のエネルギーの恩澤である。こゝにも南進論の叫ばれる一根據がある。

群島の農產物としては砂糖が斷然群を拔き之に肉薄出來る何物もない。パインアツプル・キヤツサバ・コーヒーその他各種の熱帶作物が植付けられて居り、林產物としてはコプラがある。從來はコプラとパインアツプル位が產物と呼び得る程度であつたが、コプラも近頃餘り面白からず、パインアツプルも鑵の不足で、葉を切つて纖維を取つた方が得だと云ふ。土地が狹く地味が著しく瘦せて居り表土が薄い。その上に大きな島程概して傾斜地が多く、僅かの表土

がスコールで流され勝であつて栽培者を惱ませてゐるが、何分土地は惡く狹くとも、日本唯一の純熱帶であると云ふ理由から、彼地の人達は異常な熱情を以て努力してゐるが、小なりと雖も尙事業として成立するものがない。その內ではキヤツサバの栽培が有望ではないかと思つた。これは栽培の歷史は新しいが、餘程惡い土地でも反當り數千貫得られる澱粉料で、平時は澱粉として又はアルコール原料として廣く有用であり、戰時には食糧となり得る。實際群島に於ける邦人の食糧は水產物を除いては全部內地依存であり。稻作は殆ど行はれてゐないし、その餘地もないからである。

マーシヤル群島は珊瑚礁である爲め土がない。遠くの島から土を運び置土をして僅かに在住官吏に見本の樣な僅少の野菜を供給してゐるに過ぎない。從つてこんな所では特別だが、パラオあたりでは不充分ながら野菜は自給されるし、熱帶果實は容易に得られるし、鰹・マグロは澤山獲れるに拘らず、內地から來た汁氣のない林檎を數十錢出して求め、馬鈴薯や塩鮭を賞味したがる邦人の態度はどうかと思ふ。それも一種のホームシツクと見れば同情の餘地はあるが……。

水產は廣い大洋が舞台である爲め最も有望である。先づ第一が鰹であつて鰹節として年產五百萬圓に上り內地に多量に送られ、內地の消費の大凡半分は南洋製品である。マグロ類は生肉として江戶兒に食はせるには餘り遠過ぎるので、罐詰として外國に出され臟腑はハリバ等の原料として肉より高價であるが、現在は大企業の域に至つてゐない。

鑛產としては燐鑛石とボーキサイトだけである。前者はアンガウルその他數個の島から年產七百萬圓が內地へ送られ、後者は最近になつて重視され出したアルミニユームの原鑛で、專門家に直接聞くと前者より格段有望だと云ふ。

こゝで群島中最も開發され、且群島がその爲めに經濟的に自立し得たと云ふサイパン・テニアン兩島について少し述べて見よう。此の二つは面積十二方里と七方里と云ふ小島ながら、一年に二千萬圓に近い砂糖が內地に供給されて

ゐる位で、遠望すれば平地は一面綠の牧場の樣に見える。近づいて見れば全部甘蔗畑であり、自分も役所の人に案內されて甘蔗畑の間の熱帶特有の赤土の路を數十分間ドライブした。

然し自分は畑よりも原始林の方に興味を持つのでそちらへ案內を賴むと、さてとその役人も首を傾けて了つた。現在そんな所であるが、日本領になつた當初の大正八年には、全くの密林で歩く事さへ容易でなかつたらしい。サイパンは大正十一年から南洋興發會社が大規模に開拓し初めたのであるが、その頃でも長さ四尺もある大蜥蜴が開拓者の庭へ來て一年も住んでゐたり、羽を擴げると三尺にも達する大蝙蝠が木の枝に鈴の樣に下つて居たと云ふ。今でもそれ等は野生してゐるが仲々目に著かない。テニアン島の密林には數百年前の住民の家畜から野生化した牛・豚・鷄が無數にゐて、大正十五年には或る企業家が工場を建て機械と米國仕込の技師を連れて來て、野生豚でハムの製造に着手し、その頃だけで野生豚數千頭・野生牛百頭を殺した事が確實な書に出てゐる。これが僅か十五年前の狀態であるから驚かざるを得ない。

かういふ所を開拓し企業的に成功せしめることは容易な事ではない。口で云へば原始林の內に入り込んで先づ調査し、勞働者を連れて來て樹木を切り倒し、火を放つて燒き、後に適當な作物を栽培するだけの話であるが、開拓者自身は想像を越えた努力と忍耐と勇氣と汗とで自然を相手に戰つたのである。

自分の見た範圍でも、現在パラオ本島で掘立の假小屋に住んで、原始林を燒き拂ひつゝある開拓者達をあちこちに見掛けた。その後にはやがて意外な實を結ぶであらう。

八、南洋群島と蘭印

南洋群島の重要性は經濟上よりは日本の南進基地としての意味の方が數倍大きい。アメリカには氣の毒だが、太平洋は群島の爲めに半分に切斷されて了つてゐる。パラオから一番近いのは蘭印のニューギネアで、遲い船でも四

十時間に過ぎない。パラオの御土產物屋の店頭の品物を指して、これはどこのものだと聞くと「矢張り表から來たのです」と事もなく答へる。表とは蘭領印度の事で、彼地と群島とは一軒の家の裏表位にしか考へてゐない。機會があれば出掛けて一商賣して來ようと焦心つてゐる。ニューギネアとボルネオは共に日本帝國の全領土より廣く、蘭領だけでもそれぞれ本州の二倍前後である。そして一キロ面積に前者は一名以下、後者は數名の人間しか住んでゐない。常識的には無人島に近く、棄てゝある寶の樣なものだ。

汽車の窓から機敏に座席に帽子が投げ入れられただけで座り手が現はれなければ、その帽子を叮嚀に置き變へて自分が着席するのは萬人の常識だ。他の人が何とか云つて來るかも知れぬからその積りでと判つきり云ひ聞かされれば、吾々は却つて安堵し同時に覺悟を新にするであらう。

Kの字形のセレベスでさへ台灣の五倍ある位の蘭印はさすが桁が大きく、その全面積は日本全土と滿洲國とを加へた廣さで、それが全部無限の太陽エネルギーの降り注ぐ熱帶である。そこにゐる六千數百萬のアジア人が二十萬足らずのオランダ人に壓さへられてゐる。是等のアジア人の大部分は日本をアジアの盟主だとほんとに信じてゐると云ふ。氣の早いのがゐて、いよ〳〵日本が我等を助けに來て呉れると早合点して少しばかり動いた結果、直に四千人程が捕へられた。今頃彼等は牢の中で、日本はアジアの盟主だと云ふ言葉を、誰から聞かされたのだつたかと改めて思ひ出してゐる事と思ふ。

蘭領印度に身體檢査されずに上陸して、早く植物旅行をして見たい。

註　數字は主として臺灣總督府、南洋廳發行の各種報告書統計書及び理科年表(昭和十五年度)、蘭印統計年鑑(一九三九年度)等より引用した。(十一月十日記)

論文

歷史主義と生の立場

——歷史の神話的性格に關する一考察——

小川常人

「それが本來如何であつたか、を單に示すといふことだけが私の意圖するところである。」ランケ Leopold von Ranke の處女作にして而も出世作である「ロマン民族及びゲルマン民族の歷史」の冒頭を飾つた此の有名な一句は、實に十八世紀の啓蒙主義的歷史觀に對してコペルニクス的な轉回を意味するものであつた。此のランケ史學に端を發する歷史主義——更に廣く言へば「歷史の世紀」を現出した十九世紀人の歷史に對する過度の信奉——に對して、所謂「狂人」的な「譫言」を以て反逆したニイチェ Nietzsche の歷史觀は、その完全な姿に於てではなくして、むしろその先見に於て、現代に於てもなほ新らしい意義を有することが見出されようとしてゐる。

一、運命

原初的な、歷史の自覺を、或はむしろ過去の事實に對する意識を、ニイチェは記憶の裡に認めたのであつた。「草を喰ひつゝ」歩み過ぎてゆく家畜の群とは異り人間は「忘却」を學び得ない。彼が「どんなに遠く、どんなに速く走つても」鎖となつて一緒について來る過去が「突然、彼の懷ろに舞戻つて」來た時、人間は「私は想出す」と言ふ。斯くして過去と現在との結びつき方を、表象ならぬ過去そのものゝ再生として記憶と呼んだのである。然し、斯かる

原始的な過去再生の自覺の擴大がそのまゝ人間の歴史意識であるとすれば、かの墮落した歴史主義者の主張と何ら變り無く、ニイチェが「墓地再掘」に譬へた如き、唯過去のみの歴史が主張される所以に外ならない。「歴史は歴史に參加する人々にとつてのみ、即ち未來に情熱を抱く人々のためにのみ歴史である」と言ふヴァレリー Valéry の言葉は「彼等の時代を墓場に運び行くことではない。新たなる時代の基礎を置くこと、それが歴史を不斷に前進させる。」と言ふニイチェの叫びと共に常に正しい。歴史主義の標榜してゐる「過去へ」の逆行――「歴史が過去の生に仕へて、もつて今からの生を、そしてまさに、より高き生を破壞する」ことから轉じて、歴史は現在より未來への順路――「かく在るものに膠着すること愈々少くして、かく在るべきものに愈々明るく誇らかに從ひ行く」ことに置き代へられねばならない。斯くして過去をのみ信奉する歴史主義者の深き迷夢はその根底から搖り覺まされたのであり、偷安の搖籃に過去はその息の根を止められたのであつた。現在の優位は歴史の分野に於ても主張されねばならなかつた。扨て過去に對する現在の優越は「歴史は現在から書かれる」と言ふ句の中にも現れてゐる。「歴史は書き更へられる」と言ふあの平凡な言葉でさへ、クローチェ Benedetto Croce の「この過去の事實は、それが現在の生の關心と一致結合されてゐる限りに於て、過去の關心にではなく、現在の關心に答へるのである。」と言ふ言葉と共に、「書き加へてゆく」のではなくして「書き更へられてゆく」歴史の本質を明示してゐる。若し、歴史叙述の端初を過去に有するならば、歴史は「書き加へらる」とも決して「書き更へられる」筈はない。歴史叙述の端初はむしろ常に現在である。又過去の出來事の全部を叙述することは當然不可能であり、よしんば出來たとしても無意味である故、歴史叙述に於て歴史的中心と歴史的周邊とを區別撰擇するのは、マイヤー Eduard Meyer の言へる如く「こゝでもまた現在のみが答を與へ得る」のである。凡て歴史叙述は現在の撰擇構成を俟つて初めて叙述され得る、さもなくば、どうして政治史と言ひ、宗教史と言ひ、經濟・文學史等々と言ふ事が出來ようか。（こゝで過去の事實と、その歴史叙述との間に乖

離の生ずることを一應注意に止めて置かう。）次に、歴史叙述は單なる混沌の叙述でもなければ、亦、生起する事件の中途的な報道・記錄でもなくして、個々の事件も、その歴史的全体との關聯を有するが如き一種の全体が與へられてゐることが考慮されねばならない。ニイチェが「この人を見よ」を書き、ゲーテが「詩と眞實」を書いたのも、實に晩年に到つて一應自己發展の大体の完結を見てからであつたことは「ミネルバの梟は日暮れて後翔び始める」と言ふヘーゲルの言葉と共に深くその根據を有する、即ち歴史は「丁度時を得て」何らかの意味で不斷の過程に完結が與へられた時――斯かる絶對点は現在を措いて存しない――叙述せられるのである。

而も歴史の端初を現在に有してこそ歴史の完結が與へられ、而して歴史の全体が把捉せられるのである。斯くて歴史叙述――叙述された歴史には現在がその基礎をなしてゐることは疑ふべくもなく、而も現在とは「今爲し遂げられてゐる行爲」そのものを措いて外にあらうか。先に注意して置いた「過去の事實」に對する現在の優越は、アウグステイヌスの「時間」に依るまでもなく、哲學はこの問題に明確な解答を與へてゐる筈である。而して、歴史として叙述された歴史と過去の事實――それは歴史的意識内に入つてのみ我々と關係がある――とは單に無關係でなくして、後者は歴史の素材としてその役目を果すのである。この事柄を理解しない人々は歴史以前の史料を以て眞實の歴史と考へ誤つてゐる。歴史の出發点は外ならぬこの現在であることを理解してのみ眞に歴史考察の第一歩を踏み出し得るのである。而して勿論、この出發点はニイチェの場合にも、歴史主義がその歸着点とした歴史事實そのものではなくして、矢張り、やがて來るべき現在に外ならなかつた。我々はむしろ、ニイチェの歸着点は未來に在ることを思はねばならない。即ちニイチェの場合には梨倶吠陀の「未だ明け渡らぬ斯くも多くの黎明」として、「未だ發見されない過去の本質」は、假令へ、時間的には、直線的に考へられた過去・現在・未來の順序の儘に過ぎ去つて了つてゐても、歴史的には矢張り「未だ發見せられぬもの」であり、「明け渡らぬ多くの黎明」に外ならなかつたのである。

未來は單なる過去と現在よりの類推によつて生ずるものではなくして、現在さへも未來なくしては考へ得られない。未來は現在に結び付いて、現在の裡に働いてゐて、斯くて未だないものが現在を規定し、現在は未來よりかくあらしむべく限定されてゐるのである。然し、現在は獨り未來からのみ決定されたものでなくして、更に一層鞏固に過去から決定され限定されてゐることは言ふ迄もない。「どんなに遠くどんなに速く走つても鎖が一緒について來て、」「眼に見えない暗い負擔となつて人間の行進を困難にする。」現在に再歸してゐる過去が意志的反抗としてその生命をさへ掛けて生きて行かうとする人間の「希望」をむしろ幻想に近い空漠に化せしめるのである。斯くて此の限りない「希望」を以て迎へられる未來の實現の可能性は何かに逆比例して、その最も悲しい場合——而も、最もあり得べき場合——には、その可能性は最小限度に到り「あるひは」と冒頭されねばならなくなるであらう。而も人間は斯の怖ろしい「あるひは」の拷問に掛けられても、未來への「希望」を斷念するわけにはゆかないのである。未來よりの呼聲に「あこがれ」が生れて、或は「あこがれ」が未來の幻像を描出して、人間は自己の一切を此の「あるひは」に託する。斯くして「暗い負擔」となつて襲ひかゝる過去を全然逃れ得ぬ人間が此の「あこがれ」を抱かざるを得ないところに、絶對絶命の運命的な人間の悲劇が——ニイチェの悲劇も——ある。ニイチェが「歴史」なる言葉の代りに屢々「運命」と言ふ言葉を用ひるのを見ても、ニイチェの生命ある主体としての生きた歴史は、「死んでゐる歴史學の對象としての歴史」や「道樂者」のそれと判然區別して理解しなければならないこと勿論である。常にニイチェの歴史觀を注意してゐたハイデッガー Martin Heidegger が「本來の歴史」の基礎に運命としての歴史を考へてゐたことを想ひ合せても「運命」に就いては充分考察される要がある。「作るもの」でありながら而も「作られたもの」であるところに人間の本來的な歴史性を認めることが出來る。「作られたもの」は既に「過去」に入つたもので「過去」に入つたものは主体の自由意志で以て如何ともし難い「必然」の領域に屬し、これに對して「作るもの」は「自由」の

領域に屬し、「自由」の領域に屬するものは「未來」に生きてゐる。若し知識で以て考察した時には凡ては「過去」の領域に屬し、全き「必然」の左右するところであつて、血の通はぬ同一律や理由律が創造を否定することゝならう。

——學問の世界では、何事も因果的に、或は目的的に決定せられてゐると考へるのである。

少時く眼を轉じて、凡て自然主義であると言はれるヘレニズムの世界を見るならば、先づ第一に、運命的必然を脱し得なかつたギリシャ神話の主神ゼウスが追憶されるであらう。ヘロドトスの描いた歴史は矢張り運命的必然の歴史に外ならなかつた。自然に對して敬虔であり忠實であつたギリシャ人は自然に對抗して文化を築かうとするのではなくして、自然と調和し、自然を文化へと淨化したとも言へよう。德とは調和に外ならなかつた。プラトンのイデヤはそれ自らに於て完成してをり、人間はその美に動かされても、イデヤはたゞ永遠に美しく流轉しないのである——プラトンのイデヤは外ならぬ實在そのものであつた。イデヤには如何なる歴史性も無いのである。人間の努力に依つて、良くもなれば、惡しくもなると考へられた近代的な歴史的社會的存在とは、それは何と相異する事であらうか。然り、眞の意味で、ギリシャは歴史的意識を有してはゐなかつた。

次いで、中世を考へるに際して「ギリシャの建築は石でもつて造られ、ゴシックの建築は石にさからつて造られてゐる。」と言ふ美術史家ヴォリンガー Worringer の言葉を想起しよう。凡ては自然への調和と淨化とであつたヘレニズムに反して、中世の「天なる神」への翹望と歸依とを讀み取ることが出來るではないか。實に「歴史的過程はそれが唯一回的なる時にのみ價値を有する。」と說くヴインデルバント Wilhelm windelband は、教父學に於てキリスト教哲學がギリシャ哲學に對して捷を制する所以を物語る。確かにギリシャ的な永劫回歸に換つて、神の一回的な歴史の創造があり、世界も一回的な歴史として把握せられた事は、中世を特質づけるものではあつた。然し、神の一回的な歴史の創造を、又、一回的な歴史として把捉せられた世界を考へる時、我々はアダムの概念の裡にさへ、世界歴史の全

体が、最後の審判に到るまで、既に含まれてゐたと言ふライプニッツ Leibniz の言ふ如く、中世の歴史は未來の無い歴史であり完結した歴史であり、要するに本質的な歴史ではなかつた事に思ひ到るであらう。ところが、ルネッサンスは實在の中心をば、ヘレニズムの如く自然に、又中世の如く神に置いたのではなくて、實に此の人間の中に置いたのであつた。人間の世界が現出した。而も人間は「作られたもの」で又同時に「作るもの」に外ならない。「作られたもの」が飽く迄、過去的必然性の領域に屬するに反して「作るもの」は未來性の領域に立つてゐる。——未來的とは自由といふことであらねばならない。この過去的必然性と未來的自由性との「絶對矛盾的自己同一」に人間は「作られて同時に作るもの」として「行爲」するのである。然し、不幸にも途を誤つて「作られたもの」が「作るもの」を支配する時には、それはチャップリン Chaplin の「モダーン、タイムス」であつて、現代文明の巨大な機械が自らの爲に、それを作つた人間を却つて支配する「行詰り」を「沒落」を暗示する。而して斯かる「行詰り」を「沒落」を克服して自主性を喪つた大衆の主体性を回復せんとしたものこそ、時にイブセン Ibsen の「民衆の敵」であり、時にニイチェの「超人」ではなかつたらうか。要するに、同時に必然と自由との矛盾的自己同一に成立してゐる人間は、矢張りその本來性として悲劇性を有してゐる。少くとも創造的行爲者は自己の存在の根據たる「傳統」を否定せんとする所に、自己の存在の基礎を失はねばならない悲劇性が含まれてゐるのである。「運命」とは過去的必然に與へられた名稱ではなくして、實に歴史的創造的行爲者が「いかに遠く、いかに速く走つても」越え出で脱れ去れない過去的必然と、而も「作るもの」としての未來的自由との絶對的矛盾を背負ふところに主体的歴史としての「運命」を考へることが出來るのである。實に現在は過去の所産たるのみでもなく、而も單に未來よりの規定に成立つものでもなくて、互に背反する二者の相互限定に現在が置かれてゐることが、一方「あこがれ」として「起るべきもの、起るにちがひないもの」と、他方全く離脱することの出來ない鎖である「獨裁的な過去」との間に人間を眞二つに引裂い

て了ふのではなかつたか。然し「勇敢こそ善である」と言ひ「私は運命である」と言ふニイチェは、いみじくも「偉大なる不可能なる事に當つてくだける以上の、生き甲斐ある人生の目的」を知らなかつたのである。歴史を最も生々たる面に於て即ち「運命」として把捉したニイチェはジャコモ・レオパルディと共に「我等の存在は苦と倦怠となり」とつぶやいて拱手してはゐなかつた。

二、歴史の三種類

彼は餘りにも力強い「讃言」を以て、「子守歌」を奏でてゐる時代の寵兒・歴史主義者に眞向から挑戰したのであつた。即ち「歴史が生に仕へる限りに於てのみ我々はそれに仕へよう」と考へたのである。「我々が歴史を必要とするのは生と行爲のためである」時に、ニイチェは「歴史病」に罹つて「存在や生成としての歴史」を解釋することを止め、「行爲としての歴史」に浸入したのであつた。在來の「墓地再掘」から「歴史をつくること」に、「歴史を克服すること」に轉ずることに依つて今世紀、歴史哲學への蒙を啓いたのであつた。客体としての「認識現象へ溶かされて了つた」死んだ歴史から去つて、生きてゐる「行動としての歴史」へ入つたことは「矢張り地球は動いてゐる」と言ふコペルニクス的な轉回を印したのである。こゝに於て、今一度、過去・現在・未來が問題とされる。過去と未來との間に引裂かれる現在でなくて、すでに言及した如く、記憶や豫測を成立せしめる如き現在を考へるのである。記憶や豫測も現在に於てある如き現在を考へねばならないのである。斯くてこそ、初めて「生と行爲」のために歴史を要することが考へられ「人生滅びんとも眞理生きよ」fiat veritas pereat vita に對するニイチェの反問が意義づけられるのである。歴史とは「理念」の所産でもなく、死せる對象の認識でもなくて「現在の最高なる力を通じてのみ、諸君は過去を解釋し得る。諸君が認識と保存とに値ひする偉大なものを過去の中に忖度し得るのは、たゞ諸君が持つてゐる最も高貴なる性質を最も力強く緊張せしむることに於てのみ可能である。」と言ふニイチェの言葉に包含されてゐ

る「生命ある歴史の現實」の謂ひに外ならない。「生命」と云ふ一般概念は飽く迄考へられた生命であつて、歴史的現實としての生命とは「行爲」に外ならない。而も、此の行爲するものが事實であつて、そこでは行爲と物とが對立した二つでないところから「事實」と言はれるものである。ディルタイ Dilthey は「張りつめられた主觀性の大いなるニイチェ的慘めさ」で以て「彼もまた歴史の意義を把へ得なかつた。」と言ふ如く、成程、ニイチェは客觀的歴史の意義を充分に把へ得なかつたとしても、歴史的現實のより高き透視無き客觀的歴史は、自ら氣の付かぬ矛盾の上に立つ「歴史觀察者」の恣なる死体解剖たることを直觀してゐたのであつた。此の生命ある歴史的現實そのものが、むしろ客觀的歴史に先在して、此の歴史的世界の活動因子となつてゐることに氣付かなければならない。生こそ歴史的基体として歴史的世界の觀念的空轉をさまたげてゐるのである。斯くて客觀的歴史の如く、單なる歴史學の認識對象として、此の歴史的現實を把へんとすることは、即ち「純粋に完全に認識されて認識現象に解きほぐされて了つた歴史現象は、それを認識した人間にとつては死んでゐる」ことが了解される。事實即ち歴史的現實は「行爲」として主体の實踐なる生に於てのみ生き得る歴史であらねばならない。斯かる歴史を歴史學で把へんとすることは實踐の行動性を、又歴史性としての前歴史を否定——少くとも廢棄せしむることに外ならない。「純粋學問として考へられた、そして獨裁的となつた歴史は人類にとつて一種の生活終止にして、且つ、生活決算であらう」と言ふニイチェの言葉はいみじくもこの間の消息を物語つて而も餘すところが無い。學問としての獨裁者としての歴史は人間を窒息せしめるより外に途を有しない。唯「力强い新らしい生活潮流への」從屬に於てのみ歴史は歴史自身の瓦解をも免がれることになるのである——この事は吳々も注意せられねばならない。何となれば「或る一定の歴史の過剩と共に、生活が瓦解し退種するから、そして遂には又此の退種によつて歴史自身もさうなるから。」と言ふ一句の裏には從來の主客の轉倒を建て直し、「政治」と「文化」——少くとも學問或は歴史學——との對立鬪爭に對する何らかの暗示を讀み取ること

が出來るであらう。

扨て生と歴史との關係は、生が歴史の奉仕を必要とする場合と、別に生が歴史の過剩の爲に害せられる場合との、兩方の場合に於て充分考察檢討されねばならない。かのベルンハイム Bernheim は歴史學の概念の歴史的發展を次の三段階に分つてゐるがそれは最も模範的と認められたものである。即ち、第一物語的（報告的）歴史、第二教訓的（實用的）歴史、第三發展的（發生的）歴史である。又ヘーゲルに從へば、歴史の考察の仕方には原始的歴史、反省的歴史、哲學的歴史の三つの種類が區別されるのである。先のベルンハイムの三段階は順次直線的な發達の次第を物語るものではなくして、發生的歴史の見方が成立すると共に「それ以前の諸段階の見方が克服されたもの、廢棄されたものと云はれることは出來ぬ。かの諸段階を支配する諸々の關心は、普遍人間的な常住のものであるから、それを滿足させるといふこともまたどこまでも普遍的な持續的な要求であらう」として、叙事詩や物語、或は政治論や道德論の普遍的な持續的な存在を說明する。而して發生的歴史の場合には「獨自な性質の材料の純粋な認識を目的とする」として、發生的歴史は、他の二種類の歴史が非歴史的と見做されるに對して特に科學の名に値ひするものとして、又眞の意味に於ける唯一の歴史であるかの如き考察が施されてゐる。然し「人の共同体生活の原動力や目標を取扱ふ學問では、」知識の爲に知識が云々されてゐるのではないことも勿論であつて、凡ての歴史は現在即ち事實の立場から書かれる以上、即ち何らかの史觀を含むからには、主体的事實との關係に於て、ベルンハイムの發生的歴史が規定されることも明白である。斯くして、こゝに此の主体的事實との關聯を離れては歴史的なものも歴史的として受取られなくなる所以が存する。故に、歴史的な知識に何らかの區別がなさるべきだとすれば、ベルンハイムの如くロゴスの形態に基くのではなくして、一層根本的に主体的事實としての生との關聯に於てなさるべきであらう。即ちニイチェは歴史の種類を、記念碑的、好古的・批判的の三種に分つた。それは生との關聯に於て「活動者、努力者」、「保

存する者、尊敬する者」、「苦惱する者、解放を要する者」としての各々に必要であるとしたのであつた。

「歴史は何よりも先づ活動的な者、強力な者に必要である。一つの偉大なる戰を闘ふ所の手本を、敎師を、慰め手を必要として、しかもそれを彼の仲間の間に、現在の裡に見出し得ない所の」人達が「諦めから飛び退き、そして諦めへの對抗法」として使用せんが爲に歴史が必要なのである。例へば、ニイチェ自身を見れば、彼が「おそらくは過去の本質は未だ發見されぬものである、」として歴史上の未來を發見し得たあの古代ギリシヤの悲劇的時代こそは、歴史の中に在り乍ら、最早どの様な歴史的原因、歴史的結果を以てしても解消し變形し盡すことの出來ない生命を有する個性として、それ自ら完成した獨自の世界として、ニイチェの眼前に毅然と聳ゆる歴史の記念碑に外ならなかつたのである。「偉大な瞬間が一つの鎖を形成するといふことが、それらのうちに人類の山脈が千古を貫いて結成されるといふことが、その様な昔の瞬間の高峰も」生々として個性的な生命を有するものであり、偉大なものであるといふことが、「人間性への信仰に於ける根本思想である限り」は。然し、斯かる記念碑的考察が他の考察方法、即ち好古的のそれと、批判的のそれとを支配するならば、何時も若干位置をずらされ、より立派なものに解釋し直され、原因を犠牲にして飾り立てられた「効果そのもの」として、過去そのものは損傷を蒙る。即ち過去そのものゝ大部分が忘却されて「例へばピタゴラスの弟子達が彼等の師匠に認めたと主張した金の臀の如く」非自然、不可思議なものが歴史を獨占しようとする。斯くては「無鐵砲」と「熱狂」とが過去そのものゝ損傷のみならず「生そのもの」までも損傷に驅り立てることを注意しなければならない。又、力無き者、活動的ならざる者が、記念碑的歴史を「占領」し「利用」する時には、「見よ、偉大なものは既に此處にある」と叫んで、「死せるものをして生けるものを葬ら」しめようとさへするに到る。

第二に、「歴史は保存する者、尊敬する者に必要である。」即ち、自己の現存を在らしめてゐる過去への「感謝の償却」を爲し、而して自己の現存にまで、自己が「育つた條件」を後から來る者の爲に保護し、さうすることに由つて「生活に奉仕する。」今、日常的な生活の多くがその流れの上に營まれてゐる所の「傳統」を考察することに依つて好古的實用的歴史と生との關係を見るに、傳統に依つて支へられてゐるが故に、人間の日々の生活は氣安きものがある。即ち生活せんとするまでもなく、傳統が人間を含んで生活してゆく。蓋し、人間は、自らの主体性を放棄して傳統に主体性を附與することに依つて、代りに生活と保護と、品位と不可侵性とが與へられるのである。傳統とは斯くして自己の存在の根であり、歴史の運動の崇高な指導原理たる機能を有することになる。然し乍ら、斯様に此の傳統にのみ從ふことに於て、「新らしいもの、生成するものが敵視され、拒絶される」のを見なければならない。好古的實用的歴史が、例へば傳統の姿に於て生が根を下し得る土臺となり得るとしても、なほ「生の保存」を知るだけであつて「生むこと」を知らないが故に、更に新らしいものへの「力強い決意」さへも阻まれるに到るであらう。こゝに於ても、「古きものが新らしいものに置き換へ」られてゐる。生々する「生」への拒否が「敬虔と尊敬と」更に人間を歴史的ならしめる周邊としての日常性の世界への否定と獨立とからもたらせる保護の消滅に對する「懸念」との故に、「——そして終ひに根自身も亦諸共に滅亡する」ことに氣づかれずに、無謀にも提示されてゐるではないか。歴史が過去の生に仕へて、もつて今からの生を、そして正により高き生を破壞せんとするのである。歴史の感覺が最早生を保存せず却つて「木伊乃」にしようとさへするのである。

こゝに到つて「第三の方法を必須とすることが明らか」となる、即ち、歴史の生による批判的方法これである。而して此の場合の批判的とは、批判の肯定の場合を含まずして、專ら否定の場合を意味してゐる。若し、此の批判に肯定の場合を含めるならば先述の記念碑的、好古的のそれを混入し、又合流することになり、少くとも前二者と區別して此の方法を標榜する眞意は「過去を破碎し、解消せしむる」力を有つて過去を否定することの意味に外ならない。

大凡そ、記念碑的歴史は過去の中に自己の師表像を仰立し、好古的のそれは過去の中に自己の現存在の根據を確立して、假令、それが如何樣な結果を招くにしても、少くとも「生のために」過去を肯定せんとしたのであつた。然し、今やその過去を「法廷に曳き出し、嚴しく審問し、そして遂に有罪に判決」して、生は自己を生々しなければならないのである。而も公正や慈悲が判決を下すのではなくして、「あの暗い、突進む、飽くことなく自分自身を欲求する」生獨りである。なほ、こゝに注意すべきは、過去を否定せんが爲に過去を否定せんとする、要するに、どうでも良いことではなくして、內面的逼迫と內面的必然に基くが故に、「何時も無慈悲であり、何時も不公正である」ことが、生の無限生長の可能の爲に、正當に許さるべきものとなるのである。げに「生は歴史を審く」と結論せざるを得ないではないか。

されば過去が現在として把握せられた時には、その歴史は記念物的歴史であり、過去が過去として把捉せられた場合には、古物的歴史に外ならない。而して、過去が未來の見地から把捉せられた場合こそ、歴史は批判的歴史に外ならないのである。斯く言ふことに於て、生の歴史性の最も根本的な時間性の下に、ニイチェの三種類の歴史を見ることに依り、その分類を更に本質的ならしめたと言ふことが言へるであらう。生が歴史を審き、過去が未來の見地から把握せられると言ふことは果して如何なることであるか。外でもなく、「唯現在の最高の力」からして過去を解釋するの意味であつた。それは、單に一切の過去を貶價して、未來の創造にのみ價値を認めようとする未來主義・破壞主義・進化主義の權化ではない。がまた、過去を尊重し、過去に浸頭する傳統主義・復古主義・古典主義の變裝でもなかつた。前者の如き過去無き未來でもなければ、後者の如き未來を缺く過去でもない、矢張り我々は vivo, ergo sum の立場に立つことによつて、運命なる歴史の公道を歩むことが出來るであらう。

三、生

ニイチェ自身は、人も言ふ如く、歴史をその完き客觀性に於て把握することは出來なかつた。否彼は敢て木伊乃取りの列には加はらなかつた。トライチュケ Treitschke から「氣狂ひのお喋り」の惡罵を浴び乍らも、ニイチェは「生」をしてその主体的歴史性を回復せしめることによつて、歴史的世界への新らしい出發点を示したのであつた。今世紀の初め、トレルチ Troeltsch が「現代の歴史主義の危殆と自覺とは大部分をニイチェに負うてゐる」と言つたのも、實に相對主義の客觀的歴史に安閑としてゐた「墓掘人」と「內的教養の便覽書」的な人とに對する、主体的歴史の主張の点に於てであつた。ヴアレリーの言葉を繰返すまでもなく、歴史は認識に終止せずして行爲に結びつかねばならない。歴史主義者の續けて來た如き「歴史の保存」と、唯歴史を考へることゝは、要するに結果なき知識の奢侈的な集積に外ならず、grundlos に歴史を考察することは、普遍的な性格を覺知した如くで、而も創造と實踐との面を喪失して、自らを殺戮する次第である。「自然主義と歴史主義とは近代科學のもたらした二つの成果であつた。」とトレルチはほこらしげに聲を高くするが、「歴史のための歴史」とは「學問の組合制度」の殘滓に過ぎないのではなからうか。客觀的な「歴史を考へる」ことは、主体的な「歴史する」ことと關聯を有しなければならない。主体的な歴史を離れて、客觀的な歴史が保存されることは、飽く迄も「過去の獨裁」であつて「健康を害ひ」「退種を招き」「生活の造形力を破壞する。」——科學性と客觀性との名の下に過去は保存されたが、現在は一層危機に瀕する。極言すれば、過去の模寫と再現の爲に、現在の殺戮が、而も公然と行はれてゐる。fiat veritas pereat vita が「限界標」を引倒し「遠近法」を無視して「——そして終ひに根自身も亦諸共に滅亡する」ことを忘れて、横行してゐるのではないか。歴史は過去への「仰天」と「鄕愁」とではなくて「未來」への「創造」への「決意」でなくてはならない。

十八世紀啓蒙主義の歴史觀は、過去の誤謬を審くものは歴史であつて、歴史に依つて、理性的な現在を正當化することであつた。斯かる歴史觀に對して「ロマン民族及びゲルマン民族の歴史」は確かに新らしい歴史學の誕生ではあ

つた。個別の探究は理由なしに價値あるものであり、具体的な事實はその一つ宛が絶對なものであつた。まことに「それだけで知るに値ひするもの」で「それ以上の目的無し」に「それが如何であつたか」は全く神の神聖に屬し、現在、未來に何らの關聯を有することなく、たゞ「斯のやうなもの」として識られるべきものが、それ自体絶對性を有し、自己目的であるとはランケの歴史觀であつた。此のランケ史學の立場こそ純粋認識の立場であり、認識を至上とする歴史主義を代表するものであつて、能動的な創造の面ではなく、變動的な理解の面に位置するものであつた。斯くてはニイチェの飽く迄拒否した歴史主義の相對主義が問題とならざるを得ない。即ち、歴史の客觀性とは相對的客觀性——方法的客觀性を意味するもので「すべてを理解することは、すべてを許すことである。」と云ふフランスの諺の通り、ベルンハイムの發生的歴史と共に「事實を愛して、事實に溺れ」なければならなくなる。斯かる時、相對的客觀性に基く歴史學の純粋認識の立場と「純粋に認識せられたものは死んでゐる」と言ふニイチェの主張とは果して無關係であらうか。「かく在るものに膠着すること愈々少くして、かく在るべきものに愈々明るく誇らかに從ひ行くこと」を主張するニイチェの立場と、「學の進歩」のために「歴史のための歴史」を標榜した歴史主義とは、先にも述べた如く、主体性の政治と、客觀性の學との對立を象徴するものではなからうか。こゝにこそ、現代の歴史學が——むしろ今世紀が直面してゐる世紀の惱みを見るであらう。假令ランケが「生」と呼んだにしても、歴史の對象たる民族國家等は過去として、現在者に對し直に意義あるものとして迫つては來ないのである。斯かる矛盾の克服を試みたものはデイルタイその人と云はねばならない。デイルタイは歴史を過去の生の体驗の客觀化と見なし、現在者は自己の体驗によつて、生と過去の生との間に通路を見出し得た。生の客觀化されたものが歴史の世界であつてデイルタイの客觀的精神とは、即ち此の意味で歴史的現實そのものであり、ランケには無かつた通路が、ランケの神秘思想に對して、生の立場に於て見出されもしたのであつた。斯く生の立場に立脚する時、在來の歴史主義で以て滿足し切つて

居れない強い欲求が沸騰して來る。

ニイチェの歴史觀からローゼンベルクは「決して反駁出來ない新らしい未來を欲求する新らしい時代の告白」としての神話を引出し、又ニイチェが「未來の神話」でツアラトウストラをして「もしなほ人性にその目標が缺けてゐるならば、そこには更に缺けてゐるであらう——人性そのものまでが」と叫ばしめてゐるのを見る時、歴史哲學が單なる方法論と認識論の抽象性を脱して、直ちに政治哲學との密接な交渉に入ることによつて具体的な内容を得んとする樣が判然とするではないか。

ニイチェの主張は一見非歴史的、超歴史的立場と見做されたに相違ない——彼も「毒藥」の名を以て告げた如くに。然し、其の立場は、なほ又彼も言ふ樣に、歴史性を否定するわけにはゆかないのである。こゝに「生」の神秘が有り、「運命」の不可思議が存する。「運命を以て我々は何を爲さんとするのか。政治こそ運命である。」とは、ゲーテがナポレオンに謁した時ナポレオン自らの放つた言葉である。我々は更に深く「生」を考察することによつて神秘の扉から洩れる光を見よう。即ち、飽く迄、過去に膠着してゐる歴史とは判然と區別して、歴史を區別して歴史を審判すると共に、未來に向つて、生の自由な展開を促進するものとしての歴史を構成する生の二重性である。而も再びツアラトウストラをして、先の言葉を叫ばしめるならば、先述した如き生の有する絶對矛盾性は確かに相互否定を契機として成立した性格に相違なかつたが、然し、我々は絶對矛盾性の肯定面をも確乎と把握しなければならないのではないか。絶對矛盾でありながら、而も自己同一性であるところに神秘な生の二重性格をまざ〳〵を見せつけられるのではなからうか。「私は運命である」時に、又「運命は政治である」時に、悲劇と共に在りながら、而も雄々しく過去と未來とを見下ろしてゐる「生」の姿を賴もしくも眺めるのである。

本來の歴史は所謂歴史學の對象としての歴史には盛り切れない運命としての歴史であつて、行動的な生命を有する

主体の實踐に外ならなかつた。過去とは一方的分析を以て法則的に構成される所與としての過去ではなくして、過去は過去獨自の生命を以て現在の裡に生き、現實をして常に現實として促す潜在的な現在の力に外ならない。未來も又、過去の知識や現在から推論的に割り出された單なる可能性ではなくして、未來それ自身が現在の創造的意志として生命を有する現在の力である。ニイチェが自ら「運命」と稱さざるを得なかつた歴史とは、過去の有する必然性と、未來の含む自由性との矛盾であり乍ら、而も力强ふ自己統一として生きるもの、それを措いて他ではなかつた。歴史病に對して解毒劑の名で呼ばれた非歴史的及超歴史的なものを更に深く考察する時には、矢張り矛盾的に歴史的である「生」の有する神秘性が窺はれるであらう。「生」は單に眞暗な惡魔的地靈的な盲目の力ではなくして、ランケも言ふ如く「神の手が上に置かれてゐる」永劫に明け切らぬ黎明に外ならない。げに、歴史は、永劫に明け切らぬ黎明として「神話」の名がふさはしいのではあるまいか。而も運命としての歴史として、外ならぬそれは「現代の神話」である。「歴史とは現代の神話である」と結論されて然るべきであらう。

最後に我々は、今一度「政治と歴史」とに對して幾分哲學的な說明を試みて「生」の立場を考察して見たい。蓋し、ニイチェの歴史に對する考察が政治への展開を暗示した樣に「人間は歴史的動物」であり乍ら、又「人間は政治的動物」なのである。此の背反すると考へられる歴史と政治との間に何らかの本質的聯關ありとすれば、その「動物」と言ふ言葉がいみじくも强く暗示してゐる如く「生」の立場である。むしろ換言すれば「生」の考察の分野が時に政治に於てなされ、時に歴史に於てなされる場合に、夫々政治哲學と歴史哲學の發展を來してゐるのではなからうか。先述の如く、歴史はその本來に於て運命に外ならなかつた。而も「政治は運命」であつた。而して「私は運命である」と言ふ時「生」の立場の二者に對する位置を密かに指示してゐるではないか。蓋し政治は知識の爲し得るところではなく、カント Kant も言へる如く、普遍的な法則を有しない判斷力の能く爲すところである。然し斯かる全くの恣

意に、或は盲目的な人の手に委ねられるに終るであらうか。我々は政治は現實的であるが故にかへつて原理的な秩序の中に行はれるものであることを注意しなければならない。而も斯かる秩序こそ、政治的決斷に依つて構成され發見されるものであつて、構想的な創造的な構想力の働きが存するものと言はねばならない。而して、凡ての判斷力と同樣に「政治的判斷力も構想力を圖式として含む」のである。即ち歴史の實現は政治に依つて可能であり、政治の圖式は實に歴史を措いて外に有り得ないのである。歴史が眞に力を有する爲には政治が缺けてはならず、政治が盲目をまぬがれん爲には又歴史を要するのである。而も「生」は飽く迄歴史的現實であれば、同樣に政治的現實に外ならない。まことに歴史と政治とは「生」の立場に於て一致し、世界は常に生々するのである。明け渡らぬ黎明として、神性と獸性と、理性と本能と、攝理と意欲との「生」の性格が幾分判然するであらう。而も之等の背反的二者こそ「生」そのものゝ絶對矛盾する自己同一に外ならない。

更に國家と文化とを考察して、悲劇的な現代の問題を今一度見直して見る必要があらう。勿論、直ちに解決を得ることは一應斷念しなければならない、何となれば、能くこの小論の爲すところでなく、この問題こそ、永劫に完全解決の鍵を失ふたものと思はれる。少くとも歴史的世界の動力としてそれらを考へる時には、我々はそれらの對立の裡に歴史的世界の鼓動を聞くのではなからうか。ブルクハルト Jakob Burckhardt は歴史的世界の動因として、國家と文化と、更に宗教の三つを擧げた。然し、彼はそれら三者の相互作用を說明しつゝも、それら三者の內面的統一には言及し得なかつたのである。國家と文化との統一を斷念して而もブルクハルトは「權力を欲するものと、文化を欲するもの」が第三の未知なるものに對して「盲目の道具」であることを告げてゐる。この未知なるものがランケの言ふ如く「道德的精力」であるか否かは別としても、國家と文化との矛盾が、此の歴史的世界の動力であることは何人も肯定するであらう。例へば、エドワード・マイヤーは「國家系」と「文化圈」との不一致を强調し、トライチケは「文

化の問題と權力の問題」を鋭く區別すべきものとしたのを見ても。而も斯く對立矛盾する筈のものが、互ひに互ひを豫想し合ひ、而して互ひに互ひを含み合ふことをも考へせしめられる。――卽ち文化無き國家はやがて、法も正義も無き國家と墮して亡ぶべく、國家的權力の背景なき文化は、やがて地盤なきたゞ花として萎むであらう。然らば自主的に閉鎖的な國家と、自發的に開放的な文化とは、何らか世界史的な立場を要求してゐるのではなからうか。民族の生命を以て世界史の肉体とし、世界史を動かす限りの民族史を、民族史に具体化された限りの世界史を考へてゐたニイチェの思想の裡には勿論「國民に於て人類が現れてゐる」と言ひ、民族と民族との相互連關から世界史は出發すべきことを主張した世界史家ランケの理想の中にも、現代の課題が幾分なりとも解かれ得べき通路が見出されるのではなからうか。

西歐の沒落（Untergang des Abendlandes）は科學に基く技術的文化の「生」に對する優位から端を發してゐる。「生」が當然支配すべきものが逆に「生」を支配してゐるのである。人間が機械化されてゐるところにも、技術的文化がかへつて人間の「生」を支配する桎梏となつてゐることを認めねばならない。シュペングラー Spengler の「西歐の沒落」に對して「歐洲の復興」を目指すナチス主義を見る時、その豫言者であり代言者であつたのは宛もニイチェの如き感が無いでも無い。ニイチェの「生」の主張は「氣狂ひのお喋り」としてよりも、なほ「先見」として、むき出しの現實を直視してゐたのではなかつたらうか。

跋

「歷史主義の危機」と稱して、歷史は認識に終止するものではなくして、歷史は直接實踐に連らねばならないとされ、創造を妨害するやうな懷古は克服さるべきであるとして、現代の歷史學に種々な懷疑や要求が提示されてゐる。

而も歷史學者は尨大な過去の重荷を抱いて其の去就に迷ふ有樣である。「過去への豫言者」として「墓地再掘」に從事するか、然らずんば、現代の事態を過去の歷史の中に類型化することに依つて、其の任了れりとする向が無いでも無い。例へば日本精神の自發であり、生の飛躍であるかの明治維新を目して「形式は復古にして、內容は維新たるの……」と、人間歷史の達し得た最高峯を掘りくづして、平地に復せんとする饒舌と、無責任と非良心な歷史家の鋏と糊とを斥けなければならない。ニイチェも「形式と內容との、內面性とコンヴェンチオーンとの對立を滅却した後の獨逸の精神と生活との統一」を願望したのではなかつたか。轉變する明日への好奇心を動かしてゐる主知主義と懷疑主義との史家をして「歷史的認識は時代の徒らな反映」ではなくして、冥々として流れ、而も類ひ稀なる精神から湧き出した所以を信ぜしめねばならない。こゝでも觀念科學が根强い破壞の力を有してゐる。歷史的世界の構造を、その時間的順序に於てゞはなくして、空間的構造に於て理解する事が肝要である――明け切らぬ黎明としての「生」の神秘性がよろしく了解されねばならない。成程ニイチェの史觀が、直ちに歷史學を建設することは不可能であらう。卽ち、飽く迄主体的歷史の主張に努めたニイチェには客觀的歷史を仇敵視するのみであつて、充分な把握を爲し遂げなかつたことは被ふべくもない。然しアカデミツクな理論の泥沼にめり込んだ歷史學は、精神の中の精神の結晶として歷史を考へるニイチェにとつては、むしろ輕蔑な念を生ぜしめたに止まるかも知れない。ゲーテが歷史の俗化と混雜とを恐れた如く、ニイチェも亦、歷史を「卓越者」と「經驗者」との手に委ねようとしたのであつた。

「生」の立場を考察して、若いニイチェの歷史觀を檢討しつゝも、ニイチェに及ばず、又屢々ニイチェを外れて來た。然し要するに「私を失へ、そして諸君自身を發見せよ。」と言ふツアラトウストラの言葉に力を得て非ニイチェ的なニイチェを書いて來たのかも知れない。「處女作の運命は無限に訂正さるべきものとす。」と言ふドストイエフスキイ Dostievskii の言葉の示す如く、亦此の小論文も常に、根本的にさへ改作訂正すべきものであつて運命として永遠に試論の名を負はねばならないであらう。

（二六〇〇・八・七）榛名山にて

農業機械化の一考察

洞庭幸夫

人の云ふ如く、現代文明の大なる特色の一つは、科學的機械的發明と、並に之に基く處の各種の變動であらう。人間とは道具をつくる動物（Tool-making animal）であり、更に亦道具を使ふ動物（Tool-using animal）である。道具をつくり、道具を用ふることに依つて、他の動物を制馭し、或る意味に於て自然征服の第一歩を踏み出した人類は、新しき動力、進歩せる機械の利用に依つて、益々自然征服の道程を進んだ。若し人類が自然の物質、及びエネルギーを自己の利便に使用する程度を以て、文明發達の尺度とするならば、此の機械的發明、科學的進歩はそれ自身に於て正に近世文明を一大飛躍せしめたものと云つても良いであらう。然しながら、之等の機械的發明の重要なる意義は、單にそれが技術的の發展を意味するに止まらずして、社會の凡ゆる方面に著しき變動を齎しつゝある点にある。今此處に歐洲産業革命以後の歴史を説述する迄もなく、吾明治維新以後に於ける狀況は、充分之を證するに足るであらう。經濟的、道德的、政治的、其の他各般の社會的變化は、主として機械的發明、交通及び生産機關の發達に伴ふ處の必然的結果として生じたのである。今後此の方面に於ける機械的進歩發明の著しきものあらば、以上の社會的變化は、益々その急激の度を加へるに違ひない。

偖て、然らば此の科學的、機械的の發明發達が農村に對して如何なる影響を齎したか。上述各種の社會的變遷が凡て農村に影響を及ぼしてゐることは言ふ迄もない。殊に交通機關の發達が、農産物を高度に商品化し、世界的競爭を

可能ならしめて、舊來の農業經營法、延いては農村の社會的生活に大なる變動を及ぼしたといふ事は説明する迄もなからう。此處にはそれ等の事は暫く措き、直接に現在、夫等機械的發明が如何に農業經營中に消化せられ、又せられんとしてゐるか、即ち農業の機械化問題を、私見の範圍に於て、述べんとするものである。

支那事變が農村に及ぼした影響は數多いが直接明瞭なのは壯丁の應召、軍需工業への轉向と、軍用の爲にする徵發、及び供出に依る畜力の減少とであらう。爲に農村に於ける勞働力の不足には相當深刻な狀態が現出されてゐる。而も農業生産を從來通り維持せんとするならば、否、戰時下特にその增産を期しなければならぬに於ては當然之が對策に急でなければならぬ。されば當局に於ては、一方に於て勤勞奉仕の勸奬等を行ひ、他方では各種の作業及び經營の共同化を企圖しつゝあるのである。而してこの共同化には農業の機械化を圖り、農業機械の共同化を必要とするのである。勿論生産行程には筋力に依る共同作業に依つて効果を擧げ得る部分もあるが、出來るだけ機械化に依る共同化の實現が望ましいのである。果して、嘗て第一次歐洲大戰後に於けるそれの如く、農業機械化の問題は又もや華々しく論壇に登場してゐるのである。然しながら此の問題の過去に於ける顚末を考へ、徒らに世の風潮に乘ぜられず、吾國農業の事情下に於て可能なる範圍を明確に認識して愼重考究しなければならないと思ふ。

元來所謂自給自足的經濟社會に於ては、一切の生産行程は云ふ迄もなく「全体としての農業生産」と稱せられるものゝ範圍に於て營まれた。時代の進歩に伴ひ、生産技術の發達、資本の蓄積につれ夫等の生産行程中の或るものはその部分行程中に分業化と機械化とが漸次可能、且つ有利となりその程度が一定限界を越えるとそれ等の部分行程が、全体としての生産行程中より離脱して、各種の加工業と稱せられる獨立産業となつて、事實上に於ても、農業から、農村から離脱するに至つた。而して現在なほ此の形勢は進行中なのである。此の進行過程には既に全く農業生産行程より離脱し得て獨立の一産業を形成せるもの、例へば機業、色染業、製粉業等の存すると同時に、分業及び機械の利用

は可能となつたが、而もなほ未だ農業から全く離脱した獨立の一産業たるを得ず、過渡的階程として農業内部に殘存せる生産行程部分、即ち脱穀、脱稃等の調製行程、製繩製莚等の農産物加工行程部分が當然存する。されば此の過渡的階程に止る生産行程部分のみが、之まで農業に行はれた機械化の總量であるとするのは大なる誤謬である。この過渡的階程にある生産行程部分は、未だ分離獨立し得ずして農業内部に殘留する極く最近の一段階を示す部分量たるに過ぎぬものである。而して斯かる農業の機械化は今後も進行し、それと共にそれ等の獨立化も進行するであらう。

農業生産行程を分つて無機技術的生産行程と有機技術的生産行程とするならば、上來述べ來つた如き機械化の行はれ得る部分が前者に屬するもので、生産行程の機械化が進行しても、農業が農業として土地に拘束せられて止る限り農業内部に殘留するであらうと考へられる勞働行程部分、即ち農業の本質的生産行程部分が後者に屬するものである。後者は更に生ける生物体に直接加勞せられる行程部分と、植物生育の母体たる大地への直接的加勞行程部分との二種に分け得る。從つて同じく農業の機械化を論ずるに當つても之等の區別を明に認識した上でなされねばならないと思ふ。

私は此の問題を「河北潟の漣々たる、白山、立山の巍々たる近觀遠望甚だ佳なりと雖も、嚴冬風雪の猛威は畏縮に値」するものありといふ氣候地勢の支配制約下に農業を營みつゝある一村の實狀に依據しつゝ解明して行かうと思ふ。先づ便宜上最近の「村治一覽」を見れば次の如くである。

本籍人口	二、〇一三
現住人口	一、六二五
現住戸數	二九八
農家戸數	二八〇（自作一六五、自作兼小作一一五、小作六四）
耕地面積	三一〇・三七町反
内 田	三〇〇・五八（自作一〇五・二、小作一九五・四）
内 畑	九・七七（自作四・二、小作五・六）

即ち本村は養蠶は全然行はず、畑作は自家消費量を生産するに過ぎず、水田耕作が農業經營の絶對主軸をなしてゐるのを知る。農家戸數二八〇戸に對する自作、自作兼小作、小作の百分比をみると夫々二三％、五四％、二三％となり、全國の三〇％、四二％、二七％（昭十、農事統計表）に比較すると自小作兼營が斷然多い。（自作兼小作なる範疇は自作が主で小作が從か、自作が從で小作が主かは統計上明示されてゐない。）次に一戸當り耕地面積をみると田畑合せて一・一一町歩で全國平均と殆んど等しく、自作地、小作地の全耕地面積との比率は前者三四％、後者六六％で、全國平均五四％、五六％に比較してその差が稍大となつてゐる。粗雜ではあるが他の生活程度から推測して、全体的にみて、吾國農村中まづ中位に屬する農村と考へても良いであらう。之れ私が研究の一手段として本村を選んだ一つの理由である。更に、吾國農業の主軸は水田耕作であり、從つて農業の機械化も主として之に關しての機械化であり、本村が水田專業村であることは說明を便宜にする。之れ本村を選んだ今一つの理由である。

偖て、次に本村の實際の機械化に就て調査せる處に依り別掲の二表を得た。（別に昭和十年現在全國農業動力作業機械普及臺數表を掲げたから適宜參照され度い。）この二表に依つて通常の統計に見えざる所謂吾國農業機械化に於ける最小の單位細胞の實体を見得ると思ふ。此の意味に於て、斯かる研究も强ち無意味ではないだらう。以下之を說明しよう。第一表は村産業組合（以下産組と略稱す）經營のものである。此の産組は明治卅八年創立で現在、信用・販

賣・購買・利用の四部門を兼營してゐることは一般の産組と同様である。註(1)現在組合員は二八九戸（農二八〇、商三、工二、其他四）で殆んど村全戸數に近い。此の組合の機械設備が現在の如く整へるは昭和十一年である。籾摺機はそれ以前既に産組に先じて同村農事實行組合の經營にあつたものが、その解散と同時に移管擴張されたものだといふ。從つてそれ以前には産組の施設たるや洵に寥々たるものだつたのである。而もいまだに脱穀機の設備が無い。産組の籾摺機を利用するには、自家にて脱穀して然る後でなければならぬわけである。農家は（以下に述べる電力利用の脱穀機を有する農家も凡て）各戸に足踏式の脱穀機を有するのである。「利用狀況」項中の％は産組取扱量を全村産量で除したる百分比で、例へば「精米機」の二〇・七％は全村飯米の總消費量の二〇・七％が産組の精米機に依つて精白されるを示すものだが、之等の利用者は主として如何なる人々なるかといふに、それは舊農事實行組合加入者並に次に述べる十人組を、人數の都合等で結成し得なかつた人々である。とも角も以上に依つて産組の機械設備が占める重要性は未だ極めて微々たるを知り得ると思ふ。これを裏書するものは第二表である。

産組經營機械設備　（第一表）

項目＼機械	籾摺機	精米機	繩仕上機	大豆粕粉碎機
臺數	1	1	2	1
一日使用時間	20	不定	不定	不定
使用月數	2	12	10	2
購入價格	250	50	252	25
利用狀況	17％	20.7％	90％	100％

備考　1.別ニ電動機1馬力(47圓15錢)2馬力(81圓45錢)各1臺ヲ備フ
2.中古品多キタメ價格ハ市價ヨリ低廉ナリ

第二表は産組經營以外の（而も産組々合員たる、生産的農民に依つて設けられた）機械設備の狀況を示すものである。早きは昭和七年、遲くも昭和十年には設けられ、從來の石油發動機に代つて、何れも電力を使用するものである。

農業用機具機械普及狀況　昭和十年十一月末現在 農林省農務局發表

機械種類	脱穀機	籾摺機	麥摺機	精米機	精麥機	製粉機	製麵機	藁加工用機
臺數	91.735	104.498	13.749	51.116	10.329	8.866	1.340	20.290

機械種類	耕耘機	園藝用機	肥料用機	穀物乾燥室火力	揚排水用機	電動機	石油發動機
臺數	.222	.636	5.903	27.912	32.613	47.138	96.353

水力機	畜力機
49.938	23.192

機械購入の方法は如何と云ふに、それは近隣十農家が所謂十人組なる小組合を結成（何故十人と限つたかといへば電燈會社がそれ以上加はることを許さぬからといふ）し、各自の耕地面積に比例して出資、購入するもので、維持費の負擔も亦同様な方法に依る。購入資金の一部は産組で融通してゐるのもある。（償還期限は大体十年）蓋し、此の十人組なる小組合は舊來の相互扶助的連帶思想に基く所謂農村の隣組であつて、部落内の農業事情、社會事情を熟知せる者のみより成る集團であるから、斯かる場合にも一致した歩調を取るに最も適してゐるのである。機械は産組經營のものゝ如く、固定式ではなく、各自の家に引いた動力線を使用する小型移動式であるから特設の作業場の如き設備は無いのである。即ち機械の購入と、使用の共同化のみであつて、作業そのものゝ共同化に迄は至らぬことは注意すべきであらう。表中脱穀機、籾摺機と共に精米機の施設もあるのは、使用期間、即ち九月中旬より十一月中旬迄の電力費は、使用の多寡に關せず定額であるからその間に於て電力を（農民側にとつて）最も有効に使用せんが爲に特に精米機も併せ購入したものであるといふが、米糠をふんだんに自家消費すること、精白度を任意にし得ること等のために多少の經濟的損失を顧みず、機械購入と

なつたものと思ふ。諸機械の使用は前記期間中に數回に亙つて順次當該組合員各戸を巡回して使用せられる。所謂「電氣番」に當らぬ時の脱穀作業は、各戸私有の足踏式機械に依ることは前述した通りである。

十人組機械設備の一例　（第二表）

項目＼機械	脱穀機	籾摺機附唐箕	精米機	電動機（中古一馬力）
臺數	1	1	1	1
使用時間	270	180	180	630
使用日數	27	15	15	57
購入價格（昭和七年）	45	100	35	35

備考　1.本村ニハ之ト全ク同形式ノ十人組22アリ
2.以上ノ外籾摺機附屬品トシテ米穀機 2臺（25圓）萬石1臺（15圓）ヲ備フ
3.繩仕上機個人經營ニテ1臺アリ（第一表參照）

以上各戸の機械設備に依る經濟的負擔は、産組の設備を利用する場合註(2)よりも大なるにも拘らず、而もかゝる小組合（十人組）の發達せるは如何なる理由に基くか？　東畑博士は「之等が産業組合其の他の既存の團体に依て行はれる所が少くて、生産的農民自らの直接の生産團体（所謂部落組合）を背景として成立し來つたのは極めて興味深い。新しき此の小組合は云はゞ既存團体の一つの有力なる批判者ででもある。」と述べられてゐる。蓋し種々の意味を含むものであらうが、主として、之は産組といふ農業團体が農業自身に積極的に接觸してゐる程度が極めて薄弱であるからである。農業團体の名は必ずしもその實を示してゐないともいへる。その餘りにも政治面にエネルギーを消耗し、且つ不耕作地主的性格と、官僚的性格のために實際的事業活潑を欠き、此の方面に於ける産組の無能さ加減が、直接生産的農民（彼等は一方では産組々合員ではあるが）を驅つて彼等の小組合結成を促進せしめたものとみ得るであらう。然しながら當村の場合を考へて、私は産組と生産的農民たる組合員との間は極めて望ましき感情に依つて結ばれ、密接不離な狀態なのをみて、最下部産組を非難する聲は當らず、寧ろ、それは中央部へ轉ぜらる可きものと思ふ。事實それら小組合結成に際しても、産業組合が資金を融通し、諸種の便宜を與へてゐるのである。村産組が過去に於ける自己の態度を反省し、

進んで既存の小組合を統制してゆくといふ方法も考へられるが、彼等小組合員は亦産組經營の施設擴充を切に望み、將來産組の設備增加に逆比例して小組合が解散してゆかんとする勢にあるのである。農民は感情に於ても、事實に於ても、最早や飽迄も産組中心主義なのである。産組當局の言に依ると、既に相當以前から大擴張を企圖しつゝあるが種々の社會的拘束に禍されて未だに實現をみざるは遺憾であるといふ。當分の間は資材、その他の關係上急速には實現を見ないであらうが、何れ一村の農家凡てが、一樣に産業組合經營の作業場を利用する日が到來するであらう。

附記　(1)本村には完備せる用水灌漑設備がある。(2)農産物加工用機械の説明は省く。

註　(1)産業組合は主に流通部面に就て働き信用販賣購買利用の四種の事業を營む樣に法定されてをり、政府は之が兼營を極力奬勵してゐるが昭和七年度中に信用組合の二％は貸付を行はず、二・八％は組合員の貯金を取扱はず購買組合の一九・八％は購買事業を行はず、販賣及び利用の兩組合事業では夫々四一・六％四三％が所謂睡眠組合である。最近かゝる傾向は漸減せられたが産組の認識に一考を要するものがあらう。

(2)イ、産業組合經營の機械利用者は左記の手數料を支拂はねばならぬ。

精米機	當該米糠（組合がこの米糠を販賣するときは正味一貫四十錢）
籾摺機	一石に付三十五錢
大豆粕粉碎機	一枚に付　五錢
繩仕上機	十貫に付四十錢但し組合の手を經て販賣する時は無料

右手數料一年間の合計は九九六・一七圓（繩仕上機を除く）は機械並に作業場維持費一〇六〇・二六圓に六四・〇九圓（一）となつて現れるが再製繩その他の賣却により結局五〇八・六二圓の（十）となる。

ロ、第二表中の購入價格は夫々の十人組に依り若干の異同の存するは勿論であるが、表に示した十人組では機械の破損に依る使用不可能のため昭和十一年籾摺機萬石を夫々四〇圓、八圓にて賣却し二一〇圓、二五圓にて購入取替をしてゐる。かゝる現象は何れの組にも存するであらう。その維持費は次の如くである。

維持費年額　六四圓

一五　ゴムロール代
五　諸油代
五　諸雜費

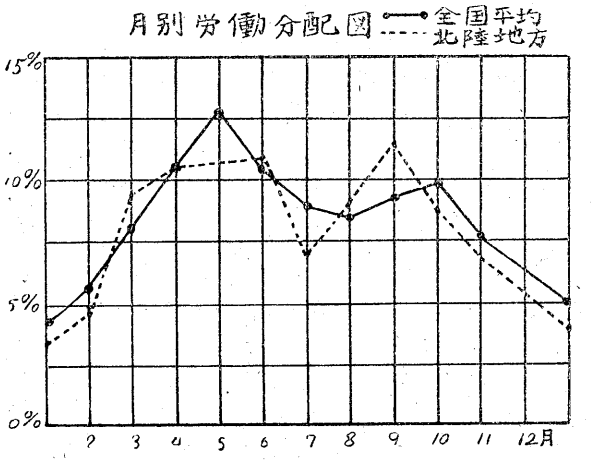
この十人組の總生產高を二五〇石とみて一石に付き產組と同額の三十五錢を手數料として取るとすると八七・五圓となる。之は右の維持費を償うて餘有る如くみゆるが、他の條件を考へて結局十人組は產組利用の場合より經濟的負擔は大となつてゐる。

とに角、本村に於ける農業機械化の進行は大体以上の程度である、即ち、現存の農業生產行程中機械化せられてゐるのは脫穀、脫稃及び農產物加工等の所謂無機技術的生產行程部分の機械化であつて、一面からいふと、執行に關して季節的拘束性を有せざる農閑期の勞働の機械化である。唯、當地方に於ては、所謂早場米地方なる故生產農民は從來端境期に於ける高米價の利潤を收得せんがために、賣急ぎ、勢ひ調製期間を短縮せんと企て、從つてその機械化に敏速であつた点も存するが、一般的にみて、之等の行程の機械化は何等吾國農業を根本的に變革するものではない。——此の点に關しては後述す——否、益々農閑期の餘剩勞力を增大するに貢献するのみであるとも云ひ得る。節約せられた勞力が他に何等の捌け口をも見出さぬとすれば、それは一種の失業を意味する。勞働能率の增進と共に、農民の失業が增加し、而も技術的にも、社會的にも、その使用が不可能ならば、農村に於ける勞働報酬の標準は一般的に遞下してくる。然らば、少からぬ經濟的負擔を負ひ、勞働を機械に依つて代替する必要も起らなく、農業機械化阻止のブレーキが自動的に働くといふ結果になる。此處に於て、農村の斯かる餘剩勞力の利用方法指導が極めて重要性を有つのを知る。農村の餘剩勞力は連續的に存するのではなく、絕對的に季節天候に拘束せらるゝものなることを認識し、有機的な指導が望ましいのである。特に最近時局產業の勞力要求切なるに於ては一層その感を深くする。

此處で本村に於ける餘剩勞力の利用狀態を瞥見してみよう。本村は所謂多角的經營といふ点では未だ充分なる成果を擧げてゐない。先づ時局產業への勞力供給狀態は本村に於ては未だ重要な部分を占めてゐない。否、占め得ないと云つた方がより適切であるかもしれない。一家の主人が軍需工業の職工となる時は卽ちその一家が耕作を廢止、又は大減作する時である。此處に農民の保守性が働いて、從來の耕作を斷然全廢して純然たる職工に成りきつてしまふといふのは未だ一軒も無い。たゞ自宅よりの通勤可能な小工場に働く少年工が若干數へられるに過ぎない。本來、農村では次男坊以下の男子は小學校を終へれば直ちに都會に出るのが一般的である（本籍人口と現住人口を比較すれば明瞭となる）から、此處に云ふ「少年工」も將來當然農業を本業とするであらう處の者である。一般男子は一日、二日と不連續的に附近の都市土木事業に、或は他村の田植收穫時に出向くものもある。夏季、冬季には相當長期に亘つて、京阪地方に出稼するものもあるが、最も重要なのは製繩であらう。之は年額一萬二千圓を算へる。其の他養雞（一、五〇〇羽）養豚、養兎が漸次普及されてゐる。女子の餘剩勞力利用は漁網製造が第一である。之の年額は二萬—一萬五千圓に達するといふ。之等が農家の現金收入に極めて重大な役割を演じ、之れあるが爲にその收支相償ふのであるが、未だ全体に組織的指導無く尙ほ農閑期の失業が多い狀態である。

以上述べ來つた農業の機械化は、前述の如く何等吾國農業を根本的に變革する力を有するものではない。それは有機技術的生產過程の機械化、就中耕耘行程の機械化に俟たねばならぬ。蓋し耕耘行程の機械化は吾國農業の勞働所要の最緊要期をなす挿秧期の勞働を大に節約し、此の頂点季節の勞働所要量と農家家族の勞働供給量との關係に於て、その規模が決せられる家族勞作經營たる吾國農業規模擴大への拍車を內包してゐるからである。今、此の事實を別揭グラフ（日本農業論（那須博士）より）に依り、少しく詳細に述べようと思ふ。

卽ち、このグラフは吾國農家一ケ年の月別勞働分配狀況を示すものであり、此處には北陸地方と全國平均のみを揭げた。之に依れば、全國平均は十二月及び、一月が最も閑散で、この二ケ月を合して年內勞働總日數の約一〇％を占めるに過ぎず、之に反して、四・五・六の三ケ月は最も繁忙で各月が夫々年內勞働總日數の一〇％以上を占め、七月より徐々に下り坂となり、九・十月と再び少しく上昇し、十一月より又下つて、十二月或は、一月に於て最低に達してゐ



◎右のグラフの描き方

北陸	一月 四・三	二月 五・九	三月 九・二	四月 一〇・六	五月 一一・〇	六月 一〇・八	七月 七・一	八月 九・一	九月 一一・四	十月 九・一	十一月 六・七	十二月 四・九
全國	一月 四・六	二月 六・〇	三月 七・六	四月 一〇・四	五月 一三・六	六月 一〇・五	七月 八・九	八月 八・五	九月 八・八	十月 九・七	十一月 七・四	十二月 五・〇

る。即ち春夏が多忙にして、秋冬は比較的閑散なるを認めるのであるが、農繁期は二つの山を描くのであつて、地方的には遲速の差があるとしても全國的にみれば最高の山は五月に來、次の山は十月に來る。五月は水田の耕地、其他稻作準備と春蠶とが重なる時であり、十月は稻の收穫を中心とする忙しさである。北陸地方の曲線は全國平均の曲線と多少相異るが、之は早期出荷を競ふ早場米地方なるため、收穫期が極度に濃密化すること、比較的單純な米作地方であること等、地方的特殊事情がその原因をなすものと思ふ。とに角、此のグラフの示す如く注意すべき事は、農繁期の所要勞働は農閑期のそれに三倍するといふ事實である。之は工場に於て、毎年定期的に或る時季は百人の勞働者を要するに止まり、或る時季には三百人の勞働者が絶對的に必要であるといふに匹敵すると云ひ得る。吾々は斯かる工場經營の困難さ幾何なる可きやを想像することに依つて、現在吾國の農業經營が味ひつゝある困難の一端を察知出來ると思ふ。

さて、此のグラフ上、九・十月の山は除去せられつゝある。無機技術的生產行程部分の機械化として、今や極めて順調な（殆んど飽和点に達したかとも思はれる樣な）普及を續けてゐるからである。而も、他方季節的束縛性の最も顯著な四・五・六月の、より一層大なる山が尙ほ嚴存してゐるのである。故にこの山の除去せらるゝと、否とは、農業經營上極めて重要な意義を有するものである。

然らば此の三ヶ月間に於ける有機技術的生產行程中最大量を占める耕耘行程の機械化は、現在如何なる程度に進行してゐるであらうか。歐洲諸國、就中北米合衆國の西部諸洲に於ては、今日一般に實用化してゐるとの事であるが、吾國に於ては、之が機械化は從來再三企圖せられたにも拘らず悉く失敗に歸した。然るに近時富山縣、福岡縣、就中岡山縣に於て、所謂日本型トラクターなる小型トラクターが、何等官廳の補助、奬勵無しに、自然發生的に出現し、その普及臺數は既に岡山縣のみで千數百臺に及び、同地では確實に實用化されてゐるといふことである。以上の如き統計をみれば、一見如何にも昭和五・六年頃の農業恐慌打開のための農業經營合理化的努力、經營費節約的努力に依る、いとも順調な普及狀態の如く思はれ、間も無く全國的に普及するものゝ如く考へられ易いが、實は然らず、其處にはその地方々々の特殊的事情が働いてゐるのである。岡山縣兒島郡興除村は普及臺數では日本一で、昭和十三年調で六五五臺の多數に上り、斯界の注目の的となり、種々の視察記が發表せられてゐるが、大槻博士はその視察記の結論の一節に、次の如く書かれてゐる。「興除村のトラクターは、冬期の小麥作地の中耕勞働に代替することを主要目的として、本來導入せられたものであり、稻作の挿秧期前後の勞働所要頂点時の勞働を代替することは、副次的——兼用的——のものであることである。此の限りに於ては、トラクターの使用が此の地域の乾燥期に當り、且つ月餘に亙るゆとりを有する期間であるだけに、使用に關しては土壤のよく乾燥せる晴天の日を撰ぶことが許容せられ、技術的に障碍となる問題が起らない。」と。

トラクターの全國的普及が無條件に許されぬといふことを裏書するものとして、私は本村に於て次の如き事實を確め得た。昨年のことである。當時、一家の支柱たる男子勞働者を事變の爲め出した人々や、戰傷を得て歸農した人々が

相寄り、相謀つて合計一八名が共同出資して價格七七〇圓（機械五六〇圓、發動機二一〇圓）の耕耘機を購入した。勿論官廳その他の補助は無く農民自身の自發的購入であつたが、機械製造元の宣傳に眩惑せられた点が尠くなかつた模様である。その購入目的は、云ふ迄も無く稲作の挿秧期前後の勞働所要頂点期の勞働を代替せんが爲であり、此の目的はトラクター購入に際して、全國農家一般の場合にも當てはまるのである。問題のトラクターが到着して、空高く晴れ渡つた一日、村民環視の中に初公開が行はれた。發賣元から技師がやつて來て宣傳に大童だつたといふ。機械は石油發動機の固定されたもので、大きさは荷物用オートバイより少し小型な程度。長さ五—七寸位の釘狀の鐵棒が十數本回轉軸の周圍に固定せられてあつて、此の回轉軸が連鎖に依つて毎分二〇〇——四〇〇回の速さで回轉せしめられつゝ、その機体が腹帶の付いた車輪で前進することに依り、土表が三——五寸の深さに掻き立てられて細破せられるのである。即ち中耕機式な碎土裝置のものであつて、截土耕起裝置のものではないのである。とに角、快い爆音が半日田園に響き渡り、普通人に依つては一日を要する耕地を、約一時間半で完成し終へるといふ成績で、相當威力を發揮して無事引渡を終り、爾後直接農民の手に依つて使用せられることになつた。處が日ならずして極めて不評を捲き起した。その原因は果して奈邊にあつたのか。農民の操作の不熟練に依る所もあらうが、先づ次の点がその主なものであらう。機械の裝置が前述の如くであるから土壤が乾燥してゐる時は論外として降雨のため濕潤となつた時の操作は極めて困難であり、良く能率を擧げ得ない。さればと云つて土地の乾燥する迄待つてをれば、その時季を失ふことになり、一年間土地を遊ばせて置かねばならぬ。當地方の如く土地の乾燥する日少き處にあつては、先づ第一に、以上の如き技術的障碍にぶつかる。次に故障の續出に伴ふ修理費の高額に上ることである。之に就いては、云ふも愚なりといふのが農民の言分だといふ。更に農民の耕地は一定の所に集合して在るのではない。廣い地域に亙つて散在してゐるのであるから、一ケ所の耕作を終へれば川一つ向ふの田に移ると云ふ具合に、時には一粁も二粁も機械を移動

せしめなければならぬ。その際の機械の移動に發動機を運轉すれば石油の無駄消費が莫大な量に上る。從て之を筋力で運搬することを餘儀なくせしめられる。處がその機械の重量、嵩では運搬は到底容易ではない。機械を運搬してゐる間に日が暮れるといふのは當時農民の笑へぬ告白だつたといふ。而も現今農村に於ては社會生活の被拘束性が強く、更に農民の土地耕作權が生活權化してゐて寸分の土地と雖も移動困難な爲に、又强ひて土地を一ケ所に集中するとしても、屢々云はれる樣に、吾國の耕地價格、及び小作料は經濟的收益の觀点を遙かに超越した樣な場合が多く、凡そ斯かる耕耘機を必要とする程の農民は、かゝる經濟的には「高き」地價に直面しては、その機械化を斷念するを必然ならしめられこそすれ、事實上現在の過少土地區域の整理擴大は不可能に近いのである。尙當村では認められないが、山間方面の傾斜地や土質の砂利を含む地方も當然機械の使用は困難であらう。——年を越えずして此のセンセイショナルな耕耘機が、當村から放逐せしめられたといふ事は、蓋し當然といはねばならぬであらう。

以上、簡單なる一例を以て吾國農業生產過程に於ける耕耘機の現狀を述べたが、その將來は果して如何なるであらうか。恐らく豫想せられ得る戰後の吾國重工業の發展は、種々の技術的改良を完成し、より完全な日本型トラクターを、より低廉に供給する方向に進むであらう。さうなれば日本型トラクターは一般的に實用化し、經濟的に利用普及せられるに至るであらう。然しながらトラクターを晴雨乾濕に關せず使用出來る如く改良することは、實際に於ては、技術上極めて困難なのではなからうか。故に機材、並に石油の極度に不足してゐる現戰時下は勿論、戰後に於ても耕耘行程の機械化が特殊地域を除いては、吾國に於て急速に一般化するであらうとは到底考へられない。克服されるべき幾多の問題を擔つてゐる。されば、極く限られた特殊地域を除いては、なほ相當の期間耕耘動力としては畜力が支配的のものとして殘ることは明であらう。本文に於ては畜力に關して言及する處無かつたが、本村に於ても事變前は零であつた耕牛が事變後十數頭を數へる。牛の歩みはのろい。だが堅實である。銃後の勞力不足は牛に依つて最も合

理的に補はれてゐるのかも知れぬ。とまれ、宣傳的な風潮に眩惑せられて、徒に耕耘機の能力を過信し、淺慮、その普及を企圖指導するは、さらでだに混迷の度深き吾國農村をして、益々その度を深からしむる以外の何物をも齎らさざることを銘記すべきであらう。

吾國農業の現機械化の現狀と將來は右に述べた處に依つてほゞ推測し得ると思ふ。彼の農業技術の貧困を說き之が改善進歩を熱望する論者、その意、現下食糧問題に關しての生産力增大にあるものならば、かゝる機械化を論ずるよりも、寧ろ、肥料の配給に就て論ずべきであらう。

結論として。——吾國農業經營の過少零細性は今更、喋々するを要しない。他産業部門に於ては世界的な水準に迄達した發展がなされたにも拘らず、內地農業は依然として前資本主義的な階程に止つてゐる。土地集積は相當行はれたが地代高率のために經營の集中は行はれず、適正規模經營の代りに、寄生地主の存續となつたのである。然し乍らかゝる狀態は、所謂「新体制」下、國家的立場からも、又個々の農家生活の安定のためにも、何等かの改革が行はれねばならぬ。實に吾國農業問題にして解決せらる可きものは極めて多い。農業機械化の問題の如き、その根本的な面を占めるものではない。耕耘機の問題は既に土地制度の解決を要求してゐるではないか。土地制度、小作制度、農業團体の問題、人口給源地としての農村問題、戰後に於ける內地農業の行方等々社會的に、經濟的に、更に又政治的に解決を求めてひし〳〵と現實に迫り來る農村問題は、複雜微妙、今や須臾もそれが對策の遷延を許さない。「新体制」は、斯かる混迷渦中にある諸々の問題を徹底的に解決することでなければならぬ。而して之が解決を擔當すべきもの、果して何人なるべきや。

私が殊更に、農業機械化の問題を取り上げて論じたのは、機械化そのものゝ爲によりも寧ろ、農業問題の複雜性の一例を示し、且つ將來、國家的重要性の益々大となるべき吾國農業に對する關心を喚起せんが爲に外ならぬ。

附記　本稿を記述するに際し由良陽太郎君に負ふ處甚だ多い。此處に深く謝意を表します。

火野葦平論

市川定三

顏淵喟然嘆曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前忽焉在後。これは論語子罕篇の中の顏淵が孔子を評した句だが、この句はそつくりその儘火野葦平にもぴつたりと當て嵌る。彼の友人が彼を評して「何をしても意外な上達を遂げる化物だ。」と言つてゐるが正にその通りだ。かう言つた線の太い飄逸な茫洋たる人間は誰もが等しく好む人間の一タイプである。漠としてゐ乍らその實しつかりとした核心があつてその核心に向つてぐん〳〵人を近づかせて行かうとする丈の牽引力のある、かう言つた彼の風格は彼の作品にもその儘表はれ、彼と言ふ人格への魅力がその意味から彼の作品への魅力となつて居り、又彼の作品への魅力が彼火野葦平への魅力となつてゐる。彼の場合作品は彼の全人格の縮圖である。そして又彼の文學觀は彼の人格に確乎と根ざしてゐる。「文學と生活との間に隙がない。」と言ふ言葉は作家を褒める言葉として言ひ古されてゐるが、この語は彼に於いて最も適切であらうと思ふ。そして文學と生活との間に隙を持たぬ彼は又彼の人格と作品との間にも寸分の隙を持つてゐない。彼の作品を讀んでゐるとその作品から、いや一言一句から彼の强くたくましい生命力が盛り上つて來るのを覺える。

今彼並びに彼の作品に就いて考察するに當り便宜上彼を出征前、出征中、歸還後の三時期に分けるならば出征前に於ける彼の作品に一貫して底流するものは傳統主義である。彼は傳統をその儘肯定し更に傳統的宿命觀をも肯定した。それは川端康成の「淺草紅團」に於けるが如き傳統懷古から來る復古意志ではなかつた。在るが儘を率直に受け入れ

現實の狀態に於いてその現實の奥に在るものをつきつめようとした。即ち現實直視であつた。而もその態度はインテリ的な冷い頭による批判よりも先づ宿命に依つて動く弱い者への同情だつた。「帝釋峽記」の藝術的村長「修驗道」の總圓「山芋」の西口甚吉と鈴木大助「河豚」の源十と由太郎「糞尿譚」の彦太郎、是等の人物に共通する個性は即ち彼のさうした態度を反映するものだつた。彼の作品を讀んで讀者が暗澹たる氣持に襲はれるのはかうした所に起因するものである。彼は宿命を肯定しつゝもその宿命に依つて動く弱者へは同情した。それは丁度「社會的に如何に存在價値の小さい人間でも、その人間としての強い生活意識と生活力とを持つことに依つてその人間を救はうとした」点に於いて新田潤・高見順・武田麟太郎等と多分の類似点を持つ。然し乍ら是等の者も知性人としての知性の閃きを全く捨て得なかつた事に依つて火野葦平とは根本的な差異を見出し得る。尾崎士郎も彼と多分に人間的性格と作品的性格とを共有してゐる。だが尾崎士郎は矢張觀念的書齋派的、知性的な「筆の人間」だつた。足は知性人の層を脱却はしてゐても頭は知性人の層から拔け出ることは出來なかつた。「人生劇場」四篇や「俠客」に見る彼の倫理觀は飽く迄知性の色眼鏡を掛けた儘あらゆる社會を見ようとした点に於いて失敗であり作者自身單純であると言つてゐる倫理そのものが即ち作者のかうした單純過程から來る單純なものに過ぎなかつた。

ともあれ出征前の彼は傳統を振りかざしつゝ知性に依らず、知性の奥の全人間性を以つて現實を肯定し直視した膽の大さとそれから來る規模の大さに依つて完全に讀者を魅了し去つたのである。そしてその最たるものが芥川賞授賞作品「糞尿譚」であつたのだ。授賞委員會で一應認められ乍らも題の汚さ材料の汚さは「お座敷へ出せる品物だらうか、」と作家批評家連を躊躇させはしたものゝ中川省三郎の所謂「手法健在で割合に味が細く一脈の哀感を藏し整然たる描寫の立派さ、身についたものをしつかりと持つ作者の技量」に依つて彼が「徒の才能、徒の小說家ではない。」ことを明白に表示した。彼の巧さは「ともすれば大衆文學的に取扱はれさうな素材を全く文學的に處理した」点に於いて

窺はれる。この期に於ける彼を文學的生活的倦怠期であると或る人は言ふ。成程さうかも知れぬ。この期の作品に共通して出て來るやくざ者や風來坊の如き人生の敗北者は當時の作者の氣持でもあつたらう。然しそれ等は單なる敗北者ではなくてどれも大きな夢即ち生活意欲を持つ敗北者であることに依つて又彼の生活打開の懊惱を察知し得る。その懊惱が先づ形式自壞に表はれた。「新酒は新囊に盛らなければならぬ。」東京時代一旦整然と整つた彼の文學形式は最早彼の文學的思想內容を盛ることが出來なくなつた。「糞尿譚」及びそれ以前の作品の亂れたスタイルはこの間の事情を物語るものである。だがそれは單なる亂れではなく「統一ある亂れ」であることに依つて志賀直哉の如き「統一ある統一」のスタイルと同等の力强さを持つてゐる。生活打開は召集令に依つて齎らされた。倦怠感は吹き飛ばされた。「强く生き拔くんだ。」この新らしい光明の下に糞尿譚は完成され彼は初期から次期へと移つた。「貴樣たち、貴樣たち、負けはしないぞ、もう負けはしないぞ、誰でも彼でも恐しいことはないぞ、俺は今までどうしてあんなに弱虫で卑屈だつたのか、誰でも來い、誰でも來い。」彼はこの糞尿譚の最後の句を繰り返し乍ら玄海灘を渡つたことであると思ふ。

「糞尿譚」の執筆中に召集令が來た。そして糞尿譚を脫稿した翌日彼はペンを捨て銃を執つて大陸の野に走つた。だが全くペンを捨てたのではなかつた。戰火の中にあつて彈丸を擊つ合間々々に彼はポケットからそつと手帳を出してペンを走らせた。是が即ち「土と兵隊」「花と兵隊」「麥と兵隊」の三部から成る彼の所謂「我が戰記」であり又「煙草と兵隊」「海と兵隊」「海南嶋記」「東莞行」及び「怪談宋公館」「或る手紙」「盲妹の話」等々である。この出征中の期を出征前を初期としてそれに次ぐ第二期とするならばこの第二期は根本的には初期と同じく現實を肯定せる現實直視の態度だつた。そしてその上に立つ傳統主義は最早好むと好まざるとによらず捨てなければならなかつた。然し傳統主義を捨てる事は彼にとつては何ら苦痛でもなければ大した變哲でもなかつた。と言ふのは根本的な態度に於いて

は同一でありそのおかれた立場によつて或ひは傳統主義を採り或ひは戰爭に眞向から取組んで行つたからである。それは飽く迄無意識から來る對象からの反映にすぎなかつた。あるものは唯純粹眞摯な寫實主義的意欲だけだつた。

近代日本文壇に於ける戰爭文學は實にこの火野葦平事玉井勝則軍曹に依つて確立されたと言つて過言でない。何故なら明治以後幾多の戰爭があつた都度櫻井忠溫の「肉彈」の如く多くは軍人に依つて書かれた多くの戰記が出たとは言へ、眞の意味での戰爭文學は火野葦平以前に是を求める事は殆んど不可能である。單に支那事變丈に就いて考へて見ても「今次事變勃發以來洪水の如く戰爭に關する多くの文章が發表されました。又優れた人達が澤山戰場にやつて來て勝れた文章を澤山書きました。又感動的な言葉を以て綴られた戰場に於ける血湧き肉躍る壯烈な武勇傳や忠勇鬼神を哭かしむる美談や面白い物語や雄渾な構想を持つた事變小說が次から次へと書かれ今も尙絕間なく世に送り出されて居ります。それらは悉く有意義であり立派なもの許りでありました。」と彼が「麥と兵隊」の前書に於いて言つてゐる如く事變始つて以來多くの文章が澤山出た事は出た。だがそれ等は恰も支那事變以前に於ける多くの戰記がカーキ色の眼鏡を通して書かれたものであるのと同樣何色かの眼鏡を通じて書かれたものだつた。實にこの時に當つて火野葦平が平家物語・太平記等近古の戰記文學に對する近代日本の戰爭文學を確立したのだつた。「麥と兵隊」以來の戰爭に關する文學作品は總て彼と同じ行き方をしたものゝみ高く評價されてゐる。上田廣の「建設戰記」もその一つである。榊山潤の「戰場」、別院一郎の「督戰隊」、丹羽文雄の「還らぬ中隊」、德永直の「先遣隊」等と火野葦平の「麥と兵隊」や上田廣の「建設隊記」とを讀んだ者はそこに明白な二つの相違を見出し得る。實際に戰火の中に在つて銃を片手に執り乍ら書いた作品と一寸煙硝の臭を嗅いだ丈で後は頭の中で作り上げた作品とは當然違ふべくして違ふものを一見して見得る。そして正しい意味の戰爭文學は前者のみであつて決して後者ではなく後者は唯便宜上題材を戰爭に取つた丈でそこには戰爭から來る切實なものが缺けて居り、而もその缺けてゐる切實なものが戰爭文學の作品と

しての生命である事を銘記しなければならない。淺見淵が「現代作家三十人論」の中で「戰爭に行つてゐない作家の書いた戰爭の作品はどうも信用出來ない。本當らしく書けば書く程嘘が見える。」と言ひ榊山潤が「戰爭に行つて居りもせぬのに戰爭のことを書くのは良心的に氣が引ける。」と言つてゐる如く戰爭に行つた者にして初めて書き得るものであるが又、唯戰爭に參加してゐると言ふ丈では不充分である。「太田伍長の陣中日記」外多くの日記、手記があるが、それ等は單なる戰爭批判であるか、日常のメモであるか、或ひは又戰爭に甘えて煙硝や彈丸の音に浮かされた悲鳴の記錄にすぎない。それにはどうしても戰場に於ける適當なる立場とその立場におかれた人間の才能が必要である。その何れをも滿足せる條件の下に火野葦平の戰爭物は出來上つたのである。それは「ルーマニヤ日記」が、科學的冷徹さを持つた詩人カロツサが軍醫として戰爭を客觀的に見得る立場におかれたことに依つて始めて出來上つたのと全く同一である。卽ち彼は軍報道部員だつたのである。

世上往々にして「麥と兵隊」の方がいゝとか、いや「土と兵隊」の方がいゝとかと言ふ語を聞く。然し作者自身も「我が戰記」として三つを一つに纏めて居る通り根本的態度も對象も全く同じこの三つの作をどうと言つて優劣をつけようとするのは饅頭を二つに割つてどつちが美味いかと言ふのと同じである。確かに形式的には「麥と兵隊」は日記であり「土と兵隊」は弟への手紙であり「花と兵隊」は日記でなく手紙でもない所の稍々小說的な敍述であると言ふ差異丈はあるがそれは三者の文學的價値を云々する際には何等關與する所ではない。我々はもう一度「麥と兵隊」が世に出た當時のことを考へて見よう。忽ちの中に四十萬部賣れたと言ふ。買つた者の中には戰爭に就いて「讀みたい」「聞きたい」の意識が多分にあつたにせよ、然しそれは國民がさうした感情の裡にある時に幸か不幸か偶然「麥と兵隊」が出た迄のことであつて「麥と兵隊」が出て二年何ケ月の今尙讀み返して見て强い迫力を持ち戰爭文學氾濫の中にあつて群星を拔いて獨り輝いてゐるのは單にさうした國民の意識や感情丈ではないことを裏書するものであると思

ふ。では「麥と兵隊」その他の彼の兵隊物が如何なる点で讀者に訴へるかと言ふならば「戰爭」と言ふ偉大なる民族鬪爭の姿を我々の日常生活を通して見得る所に迄接近させたことである。言ひ換へれば戰場の生活を我々の日常生活の延長上においたことである。「出發。果しもなく續く麥畑の中の進軍である。陽が上つて來ると次第に暑くなつて來る。雨が降れば泥濘と化する道は天氣になると乾いて灰のやうになる。」「進軍する道は又も茫漠たる麥畑ばかりである。何處まで行つても變化のない同じ風景ばかりである。……ぎり〳〵と照りつける太陽は麥畑の上にえん〳〵と陽炎をあげてゐる。」これは「麥と兵隊」の中の一節であるがこれが本當の戰爭の姿なのである。壯烈な戰鬪や襲擊は戰爭の極く特殊な一面に過ぎない。又さうした特殊な一局面は戰爭の持つ日常生活性を通じて始めて讀者にその實感を訴へ得るのである。實に『レマルクの「西部戰線異常なし」でも塹壕の中の生活の描寫が一番强い印象を與へてゐる。塹壕の生活を通して、或ひはその人間らしい日常と對照して壯絶な激戰の實感がわれ〳〵に傳はつて來る。』と言つてゐる青柳優の論は肯綮に價するものである。

兵隊物に就いて非常に長く書いたが出征中の作品として兵隊物以外の作品に就いて少し述べよう。「怪談宋公館」は中山省三郎が「虛無の間を縫うていさゝかも間然する所なき彼の作品は讀者の悉くがファクトの上に立つてゐるかの樣な錯覺を起させる」と評してゐる如く寸分の假借もせぬ讀者への壓迫は現實と非現實との境を徹して讀者を幽幻界に運び去る觀を呈する。私はこの樣な構想を見て近松門左衞門の藝術論として有名な「虛實皮膜の論」を思ひ出し、面白く感じた。「盲妹の話」と「ある手紙」とは支那の女を中心とした小品であるがこの作品に對する彼の態度は依然として出征前の儘であり戰爭の衝擊は全く影を止めてゐる。見樣に依ればこれを二期に於ける倦怠期の作品とも言へよう。然し歸還直前の彼がこれだけの物を高見順の所謂「ゲロ」的存在價値を持つものとして戰場へおいて來ることがどうしても必要だつたのであるのかも知れない。

かくして彼は昭和十四年十一月内地へ歸還した。來て見ると出征前九州の地方文壇の一同人だつた彼は最早押しも押されぬ確乎たる現代一流作家の一人に入つてゐた。戰線生活は彼の心に大きな波紋を投ぜずにはおかなかつた。彼は嘗ての傳統主義を再考し、現實を新らしい眼で見、新らしい頭で考へ直した。地方文壇から日本文壇の大きな舞台に登場した責任と、大陸の兵火の下を潛つて切實に日本を考へ世界を考へた彼にははつきりと民族意識・國家意識は出征前の傳統主義との間に激しい相剋と葛藤とを生じた。歸還後を三期とするならば三期の彼の姿は正に否定と肯定との十字路に立つて「朽つる路傍の道標」を眺めてゐるその姿である。一期から二期へ移る時は現實直視なる共通要素を以て傳統主義を弊履の如く棄てた彼が歸還して鄕土の匂ひを嗅いだ時根底的態度は搖ぎ乍らも尙一期の因習に低回してゐる姿である。

三期の彼の作品を通觀するならば先づ「南京」は二期の兵隊物の餘燼であり、「山芋日記」は一期の「山芋」の續篇であつて「船」、「雨」はその姉妹篇である。又「傳說」、「白き旗」、「魚眠記」は共に河童を題材としてゐる点に於いて又一群の姉妹篇とも言へる。「山芋日記」、「船」、「雨」の前者を「山芋群」、後者を「河童群」とするならば山芋群は「南京」と共にその終りに申し譯的に見える建設的意向の故に救はれ、河童群は題材の珍奇な点に於いて救はれてゐる。彼がどうして河童に就いてかく三つも四つも書いてゐるかと言ふと、それは「麥と兵隊」でこの命うづむる覺悟出でゝゆく河童の道の燦然として」と歌ひ「河童といふのは、私が河童が好きで、河童に關するものをいろ〳〵集めたり、時々河童の繪を畫いたりするので親友達が私をさう呼ぶのである」と言つてゐるのを以て領ける。然し山芋群も河童群も彼の作品として決して成功作であるとは言へない。寧ろ讀者には又かと言つた嫌味すらも與へてゐる。この間にあつて何らかの轉換を意圖して書かれたのが次に出る「幻燈部屋」の豫告篇ともなるべき「三福湯」である。だが「三福湯」も「糞尿譚」と山芋群の中間的存在意義しかなく、そこには何ら辯證法の合的意味を見出し得ない

のである。さうして更に「よしっもう一歩」と言つた意氣込みで書かれたのが卽ち改造十一月號の「幻燈部屋」である。幻燈は卽ち傳統である。三人兄弟の長子は時代に眼覺めた新らしき人間であり次子は傳統的保守的な人間でありその中に末子を配して藝術家の考へを述べてゐる。前二人は卽ち作者の二分された心の象徵であり、又文壇人としての彼を末子に托したのである。長子、末子の新らしい意識の、次子への能動も次子を傳統の中から一歩も拔き出し得ない所が卽ち作者自身例へ二年の間大陸で戰火を潛つて來たとは言へいざ內地へ落ち着いて見た時、傳統を單なる傳統として葬り去り得ない彼の氣持であり、と同時にそれは又火野葦平一個人のみならず亦一般現代人の氣持に他ならない。戰線の皇軍將士が如何に苦しいかと言ふことは分る。それを思へばスフでも南京米でも問題ではない筈だ。だが矢張り純綿を着たい白米を食べたいと言つた氣持は時代と國境とを超越した本然の人間性である。「幻燈部屋」はかうした意味に於て日本の新舊兩思想對立や時局と藝術とに大きな問題を提示し同時に新時代建設に一つの暗示を與へてゐる。作者は「續幻燈部屋」を書くことを約束してゐる。「續」がないならばこれ丈では散漫、構成の不均衡の譏りは免れない、然し單に小說の續篇としてゞはなく作者の理念が如何に表はれるかといふ点に於いて「續」は括目すべきものである。そしてその理念が恐らく今後の作者を支配して行くものになるべきものと思つてゐる。

私はこゝで「續幻燈部屋」に就いて一つの豫測を下す。豫測を公人に發表するのは非常に偉大な人間か或ひは非常に馬鹿な人間のすることであると聞いてゐる。私は何れか知らぬが若しこゝで私の豫測を擅にすることを許されるならば次子は長子に依つて動かされることは必然である。だが動かされた長子は決して今迄の傳統の杭を全く離れて動くのではなく杭と次子とを繫ぐ紐を長くしたに過ぎず、紐の一端は依然としてしつかりと杭に結びついてゐる。而して「續」に於けるこの次子の氣持が卽ち作者の氣持である。こゝに於いてこれ以後の火野葦平は生涯心の中に「新舊兩思想對立の問題」を抱いて不斷に惱み續けるべき運命を持つと信じる。然し乍ら島木健作の「第一義の道」的な低

いレベルに於ける妥協や、悟りも亦決して彼の潔しとする所ではない。そしてこの作者の眞摯なる惱みが卽ち現代インテリ層の惱みであり眞の意味に於て現代日本の陣痛の姿である。

現代の日本は靑白いインテリを欲しない。逞しい底力を持つ意志の人を求めてゐる。その意味で火野葦平こそは時代の最尖端を行く社會人であり文壇人である。彼の動向が世人から注目されてゐるのも亦當然である。

最後に私は彼に苦言を呈する。以上の如く彼に就いて考へ、又將來に於ける彼の作家態度に關して私の豫測に誤りないとするならば彼の今後の轉換は對象の世界に求められることゝなる。彼が何時迄も九州の一地方小說や河童物に終始するならばやがては和田傳その他の農民文學と同じ轍を踏むことになり「糞尿譚」さへも一地方作家の偶然的奇蹟的な一作品たるに留ることになるのではないかと思ふ。私は「自分の世界の隅から隅迄隈なく探求し、これを指で觸れ眼を徹し描いてゆくのが作家の仕事である。」と言ふ彼が又「自分の世界を殘る隈なく踏査した揚句、もう自分の筆にするものが何もなくなつたと言つてペンを擱くことこそ作家の本懷であらうと思つてゐる。そんな時がいつ來るか見當も持たないが」と言つてゐるのにも不拘案外早く「筆にするものがなくなつた。」と言つて再び(昭和二年の如く)ペンを擱くことを恐れてゐる。

〔跋〕「文藝部員で書評を書かう」と言ふことになり私は「幻燈部屋」に就いて書く積りでゐた。それが段々大きくなり遂に「火野葦平論」に迄なつて了つた。淺學菲才、不備の点が大きいのを恥ぢてゐます。大方の叱正を乞ふ。

日蓮に於ける靈覺と組織

宿波勇藏

「日蓮ニヨリテ日本國ノ有無ハアルベシ」これは單なる日蓮の大言壯語であらうか。前文を擧げれば「去年(文永八年)ノ十一月ヨリ勘ヘタル開目鈔ト申ス文二卷造リタリ、此文ノ心ハ日蓮ニヨリテ日本國ノ有無ハアルベシ」となつてゐる。卽ち日蓮一代の懸命作たる開目鈔を自ら評した冷靜なる一言である。旣にしてこれが掛流しの大言壯語でないとするならば、少くとも我々日本人たるものはこれに對して決して無關心ではあり得ない。然らば「日蓮ニヨリテ日本國ノ有無ハアルベシ」とは一体何を意味するのであらうか。私は要するにこれに對する見解の一端を披瀝せんとするのである。

陪臣三上皇を遷流し一天皇を廢立しまゐらせたといふ前後未曾有の國體破壞事たる承久の亂のあつた翌年、外に於ては大蒙古將に全世界を席卷せんとし、「十字軍」また屢々西方に崛起したといふ所謂佛讖第五の五百歲鬪諍堅固白法隱沒の正中に、日蓮は日本國東夷東條安房の國海邊の旃陀羅(海人)が子として生れた。その海人の子日蓮は十二歲にして淸澄山に上り虛空藏菩薩の御寶前に於て「日本第一ノ智者トナシ給ヘ」と祈つた。それは何の爲であつたらう。

人皇八十一代ヲバ安德天皇ト申ス、此ノ王ハ源ノ賴朝將軍ニセメラレテ海中ノイロクズノ食トナリ給フ、人皇八十二代ハ隱岐ノ法皇ト申ス、八十三代ニハ阿波ノ院、八十四代ニハ佐渡ノ院、此ノ二三四ノ三王ハ父子ナリ、鎌倉ノ右大將ノ家人義時ニセメラレサセ給ヘルナリ。神ト申スハ又國王國人ノタメノ父母ナリ主君ナリ師匠ナリ、片時モ

背カバ國安穩ナルベカラズ、然ルニ我ガ日本國ハ一閻浮提ノ内、月氏漢土ニモ勝レ八萬ノ國ニモ超エタル國ゾカシ、其ノ上天照大神ハ内侍所ト申ス明鏡ニ影ヲ浮ベ内大裏ニ崇メラレ給ヒ、八幡大菩薩ハ寶殿ヲ捨テテ主上ノ頂ヲ栖トナシ給フト申ス、如何ナレバ彼ノ安德ト隱岐阿波佐渡等ノ王ハ相傳ノ所從等ニ攻メラレテ或ハ殺サレ或ハ島ニ放タレ給ヒシゾ。日蓮此ノ事ヲ疑ヒシ故ニ幼少ノ比ヨリ隨分ニ顯密二道竝ビニ諸宗ノ一切ノ經ヲ或ハ人ニ習ヒ、或ハ我ト開キ見、勘ヘ見テ候ヘバ、故ノ候ヒケルゾ、我ガ面ヲ見ル事ハ明鏡ニヨルベシ、國土ノ盛衰ヲ計ルコトハ佛鏡ニハ過グベカラズ。

彼がこの解決を佛敎に求めたのは當時として餘りにも當然の事であつた。然るにその佛鏡はどうであつたらうか。

世間ヲ見ルニ各々我モ我モトイヘドモ國主ハ但一人ナリ、二人トナレバ國土オダヤカナラズ、家ニ二ノ主アレバ其家必ズヤブル、一切經モ又カクノ如クヤアルラン、何レノ經ニテモヲハセ、一經コソ一切經ノ大王ニテハヲハスラメ、而ルニ十宗七宗マデ各々諍論シテ隨ハズバ國ニ七人十人ノ大王アリテ萬民オダヤカナラジ、イカンガセント疑フトコロニ一ノ願ヲ立ツ。諸宗何レノ宗ナリトモ偏黨執心アルベカラズ、何レモ佛說ニ證據分明ニ、道理、現前(現實的證明)ナランヲ用フベシ、論師譯者人師等ニハヨルベカラズ、專ラ經文ヲ詮トセン。

斯くして彼は猛然と佛敎の研究に踏入つたのであるが、その發心動機の立志立敎は實に彼の一生を支配したのであつた。

淸澄山に在る事四年孜々として彼は經論釋疏の研究に勵んだが、思想は愈々多岐に彷徨ひ疑は益々深まるばかりである。遂に決心して大虛空藏菩薩に「日本第一ノ智者トナシ給ヘ」と三七二十一日斷食祈願を凝し滿願の日靈驗あるかと覺えて血を吐いたといふ。斯くて勇躍「遠國ナル上修學ノ人ナキ」淸澄を捨てゝ新興武家社會の勢力中心地たる鎌倉に赴き、一面は當時新に勃興して一國を動かすほど流行した新宗敎の念佛と禪とを研究し、一面は國本を傾けん

とした時代惡の策源地たる鎌倉を研究して活きた學問にその基礎を据ゑ、二十一歳にして歸鄕した。その著 戒體卽身成佛義によれば、當時旣に彼は法華經中心主義でなければならぬといふ大体の思想を略々形作つてゐたらしいが、それにも拘らず、決して獨斷に墮することなく、尙一層その研究を深める爲に京畿遊學へと旅立つた。佛學の淵叢たる當代の最高學府叡山に於ては、三塔の總學頭俊範法印に就て修學し、早くも傳敎の正統を失つた慈覺・智證の雜亂敎學を見破り、東塔の圓頓房蓮長（日蓮の前名）として名聲嘖々たるものがあつた。かくて彼は二十五歳の時より三井・京都・南都・高野・天王寺等にすべての高僧碩德を歷訪して八宗十宗の奧義を究め、兼て神道・儒道・國學・書法の末にまで及んで博宏の識を蓄へ、更に政治に世相に鋭い批判のメスを振つた。修學以來十有餘年の研鑽は鬱然たる大蓄積となり彼の三十一歳頃までには略々一定の形となつたのであつた。然るに彼はあくまで愼重であつて、なほ三十二歳の春まで一年有餘を最後の考究の爲に叡山に引籠つて沈思默考し、唱へ出さんとする正義のみでなく、その正義と現在の世間思想との關係、その兩者の衝突、それより起る迫害艱難、それに對する捨身忍難の覺悟、救國濟世の不朽の誓願等を十分に周到に詮量し、心中に幾十百回となき智と情との衝突の大激動を起しつゝも斷乎之を克服し、非常な決意の後始めてその確信を世に發表したのである。これ全く彼が普遍妥當の眞理への忠實公正といふのみではなく、國に對して從つて同時代に對して熱烈なる慈愛の心を持つてゐたからに外ならぬ。

彼の自覺は「信」にあつた。唯々久遠の佛陀を深く信じ日本を深く信ずる事によつて得た自覺なのであつた。その學は全く「信」の中に包含されたる一便法に過ぎなかつたのだ。卽ち法華經の學解より進んで信解に入り眞日本人として本佛の存在を深く信ずる事によつて自己が本化上行（法華經中に末法に現はるべしと豫言せられたる覺道の聖者で本佛の自我擴大、時間空間を絕したる自己客觀化を意味する＝天なる父の子イエス・キリストと比較せられたし）たるべきの靈覺に到達したのであつた。曾て山田博士は「自覺は力の源なり」といはれた。誠に日蓮に於ける自覺と

そは力の源であつた。彼の自覺は誓となり誓は志となり、その志は事業となつて蜿蜒長蛇の如き願業系を造り出し、力强い活動を生み出した。然しこの靈覺が唯單に二十年の研學と宗敎的信念感得とによつて得たものであるとするならば、假令それが日蓮に於ては如何に客觀的考察をなされたにせよ、吾々に於てはそれは單なる日蓮に於ける主觀としか見えない。それは頗る獨斷的であり、惡くいへば寧ろ宗敎的氣狂にしか過ぎない。然し日蓮の自覺はさうではなかつた。二十年の研鑽信仰により三十二歳に於て本化上行たるべきの靈覺に到達したにせよ、それは飽くまで主觀的のものとして自己の胸中に深くしまつて置いた。而して自らの覺りを豫言せる經文のまゝに弘通を試み、その如く全く一切の事實が着々自らの本化上行なるを客觀的に現證し始めた。こゝに於て度重なる法難と共に年を追ひ次第を追うて順次に高まつて來たその自覺は龍口法難佐渡流罪と同時（五十歳）卽ち現證完了と同時に、更にいへば主觀と客觀との合一に於て始めて公表されたのである。この事は日蓮自ら開目鈔に、

日蓮トイヒシ者ハ去年九月十二日子丑ノ時ニ頸刎ネラレヌ（龍口法難）、此ハ魂魄佐渡ノ國ニイタリテ、返年ノ二月雪中ニ書シテ有緣ノ弟子ヘ贈ル。

と述べてゐる。

人間日蓮を超越した本覺の日蓮卽ち本化上行としての日蓮は、こゝに於て絕大なる權威を以て新なる組織に着手した。それは敎（哲學的）機（心理學的）時（社會學的）國（國家民族學的）序（進化學的）なる所謂五義を以て一切宗敎を批判し同時に自らの宗敎が如何にして可能なるべきかを批判した。斯くて相對を絕した絕對の妙法を詮じ出し、更に之を本門（法華經に本門と迹門とあり、依據を示す）の本尊、本門の戒壇、本門の題目てふ三大秘法に創造的に開展組織した。この組織は彼の靈覺よりする必然的發展に外ならなかつたのだ。三秘を一應解釋すれば、本尊は我れ彼れにあり宇宙彼れにありの彼であり。題目は彼れ我れにあり宇宙我れにありの我であり、戒壇はこの彼我が冥合一

如して宗教の根本理想を實現する所であるが、更にいへば本尊に於て全と個、主体と客体との調和統一を述べ、戒壇に於て國家と宗教との冥合、神人一貫を說き、題目に於て名義と實体との融卽と人間の究境的生活の原理を示して我我の精神肉体の兩生活と社會事業的生活との一致融卽を表はしたのである。而してこれらは何れも相依相助の相照關係にあつて一大体系をなし渾然たる一妙道となつてゐるのであるが、今その本尊と題目とは暫く措き本門の戒壇を中心として日蓮の思想を窺つてみる。

戒壇解釋の簡明なる直接依據は

戒壇トハ、王法佛法ニ冥シ佛法王法ニ合シテ、王臣一同ニ本門ノ三大秘密ノ法ヲ持チテ、有德王覺德比丘（涅槃經ニ出ヅル正法護持ノ治者ト覺者）ノ其乃往（ムカシ）ヲ末法濁惡ノ未來ニ移サン時、勅宣並ニ御教書ヲ申下シテ、靈山淨土ニ似タラン最勝ノ地ヲ尋ネテ戒壇ヲ建立スベキ者カ、時ヲ待ツベキノミ、事ノ戒法ト申スハ是レ也。三國並ニ一閻浮提ノ人懺悔滅罪ノ戒法ノミナラズ、大梵天王、帝釋等も來下シテ蹋（フ）ミ給フベキ戒壇也。

であるが、其他諸書を參照して之を圖示せば次の如くである。

本戒門壇
- 理壇
- 事壇
  - (一)卽是道場正法護持者の住處
  - (二)王佛冥合の社會實体の實現
  - (三)宗教的建築物(狹義本門戒壇)

この中吾々の最大關心事は第二の王佛冥合の社會實体の實現にあらねばならぬ。先に私は日蓮は眞日本人として本化上行たるの靈覺を得たといつたが、日蓮の人格乃至この三大秘法、特に本尊・題目を背景としたこの戒壇論は、日蓮の日本觀國体觀を知らずしては到底理解し得ず從つてその實体も實現し得ないのである。

日蓮の國体觀は國体論として纏つた文獻は發見出來ないが、その法華教學の哲理に基いた深刻なる日本國体觀は諸

書に滲み出てゐる。彼の國体論の中心思想は、唯有一乘法無二亦無三の法華教學の必然としての絕對的大義名分の思想と、日本を神國となしそれは法華經の所謂本國土妙娑婆世界たる先天的の存在で、八萬の國にも超えたる最高の道義國家の本質を有するとの考である。更にいへば、日本國は天照大神が常住の授國擁護の神（久遠實成無始無終の唯一本佛、一切衆生の主師親）として、その心たる道（妙法）を三種の神器（三大秘法）に示し、天壤無窮の皇位を建設して皇統を垂れ給ひ、天孫隨從の八百萬の神々以來・大神の御心なる惟神道をおのが心とする臣民（本佛の所化）を以て天壤無窮の皇運を扶翼する無窮國家の純良臣民とし、その君と民との住する處の日本國を天業繼紹の地（本佛本化が住して常寂光の自受法樂をうくる本國土）とし、やがて天業を恢弘して世界の國家を悉くわが國を模範とせる天壤無窮の聖國化してしまふといふのが、この大日本國の使命であるとするもので、これ全く法華經の眞理によつてわが國体を開顯（本体を顯發する）したのである。この深遠なる國体を意識して始めて「我國ノ王トナル人ハ天照大神の神（タマシヒ）ノ宿ラセ給フ人也」の認識が出て來、「孝子、慈父ノ、王敵トナレバ、父ヲ捨テ王ニ參ルハ孝ノ至リ也」「世ヲ安ンジ國ヲ安ンズルヲ忠トナシ孝トナス」「就中日蓮生ヲ此土ニ得タリ、豈吾國ヲ思ハザランヤ」の徹底せる忠孝觀報恩觀が生れ「世界トハ（その中心に約すれば）日本國ナリ」「本有（ホンヌ）ノ靈山トハ此ノ娑婆世界ナリ、中ニモ日本國ナリ」「月ハ西ヨリ出テ東ヲ照シ日ハ東ヨリ出テ西ヲ照ス、佛法必ズ東土ノ日本ヨリ出ヅベキナリ」の確信抱負が生じて來たのである。

然しながら本質的には理想的典型的國家として彼に映じた日本も現實的には實に何ともいはれない程損はれた日本であつた。「佛法ハ体ノ如ク世間ハ影ノ如シ、体曲レバ影斜ナリ」との精神史觀によつた彼には、法と國との關係論から、かゝる本質を有する日本も諸の邪法を存在せしめ、殊に一國土に二佛を認め現證利益の祈禱を許す眞言宗の如きものを指導原理とするが故に、天皇政治の外に院政を認むるが如き一國二王の政治現象を呈したり、下剋上の思想

を生起せしむるものであると考へた。損はれた日本を眺むる時、彼天來の大慈悲心は矢も楯もたまらなくなつた。實に現實的日本は「ワヅカノ小島」であり「善神捨テ、相去リ聖人辭シテ歸ラザル國」であつた。從つてその國の神も又相對的には「ワヅカノ天照大神、正八幡」であり、「一切ノ大事ノ中ニ國ノ亡ブルガ第一ノ大事ニテ候也」と叫んだ彼でありながら「國ハ亡ブトモ謗法ハウスクナリナン」とまで考へた。その國に對する愛を盲目的愛に墮せしめず、その感情を理性によつて道に違背せぬやう制御して人類の團体生活の理性化たる國家の永久性と合理性とを守らんとしては彼は大慈大悲の折伏啓蒙運動をせずにはゐられなかつた。

斯の如く現實的には痛ましくも損はれた日本なる故、永遠に亙つて常に發生し來る外部矛盾の克服を敢行して行くべき人類の外界矛盾への適應法則たる本門戒壇を示し、その建立に於て社會的實踐行動を命じたのである。その所謂「王法佛法ニ冥シ佛法王法ニ合スル」時とは、日本國家がそのあらゆる社會組織を通じて天皇中心の人格的共存共榮態にまで止揚せられ、社會の指導原理としての生々發展的佛法が、宗教的にも思想的にも最早單なる指導觀念の域を脱して國家社會のあらゆる機構の中に体制的に浸透してしまつた時の事をいふのである。即ち日蓮にすればその背景と共にあらざる個は意味をなさず、從つて個人成佛（成佛とは絶對平和の相なり）は國家成佛を前提とせざる限り成立し得ないのである。その國家も更に世界へと發展するのであるが、正義を實行すべき實力形態の中心を國家に置くのである。

天地の生命と冥合一如せる覺道の聖者日蓮はこれに對する直觀を次の如く披瀝してゐる。

當ニ知ルベシ、コノ四菩薩（上行始メ本化ノ四導師）折伏ヲ現ズル時ハ賢王トナツテ愚王ヲ誡責シ、攝受ヲ行ズル時ハ僧トナツテ正法ヲ弘持ス。（日蓮の折伏行は法難攝受といひて尚且つ攝受に屬するものなり）

已ニ地湧ノ大菩薩上行出デサセ給ヒ、又、結要ノ（法華經ノ要ヲ取リ魂ヲコメタ）大法弘マラセ給フベシ、日本漢

土萬國ノ一切衆生、金輪聖王（世界ノ道義統一ヲ誓願シ、服ハヌ者ヲ事向ケ和ス治道ノ聖者）ノ出現ノ先兆ノ優曇華ニ値ヘルナルベシ。

日蓮ハ其御使ニハアラザレドモ其ノ時刻當ル上存外ニ此法門ヲサトリヌレバ、聖人ノ出デサセ給フマデマヅ序分ニアラアラ申スナリ。

右の文中賢王、金輪聖王、聖人とはいふまでもなく乃神乃聖の日本天皇をさし奉るものであつて、本門戒壇の實体を建立するにはどうしても治道の聖者によらねばならぬ事を豫言したものである。即ち日蓮は自らは覺道の聖者として、教化の方法によつて人類を眞理に一如さすべき道を踏み行はせんとしたのであり、成程これも一つの方法ではあるが實際には迂遠な方法であつて、これはどうしても治道の聖者によらねばならぬと考へたのである。之等の思想はあれ程法華經主義を標榜した彼が「或ハ法華眞實ノ妙文ヲ崇ムレドモ」「法華經ヲ我ト書キ奉リテモ無間地獄ノ底ニ墮ツベシ」等と明らかに文字の法華經を否定してゐるのでも知れる。要するに彼は一切の空理空文を否定し去り、眞理の實体はこの現實界にこそ打立てらるべきものであるとしてあの大忍難の實踐行動を起したのである。

然しながらその實踐行動は必然的にその實踐場所たる國土の理解を前提とされねばならぬ。こゝに於て彼は猛然「日本」の宗教的表現にある開顯に着手し、法華經は日本國体の內容なりと切論してその教理を「正」の一字（客觀的妥當性が吾人の悟性判斷の對象となつた時は眞と呼ばれ、實踐理性即ち意欲の對象となつた時は正と稱へられ、更にそれは善・美へも可能的に發展する）を以て代表せしめ、立正安國論を著はして執權を諫め、「我レ日本ノ柱トナラン、我レ日本ノ眼目トナラン、我レ日本ノ大船トナラン」と立誓して命がけで「法華經の行者」たるの本質を實踐した。正に日蓮に於ては普遍妥當の國体を有する「日本」こそすべての解決の鍵であり、また目的そのものでもあつたのだ。

附記

私は狀勢の急激なるにより巧遲よりも拙速を選んだ。ここには私に領解された範圍内に於ける日蓮のごく一小部分を披瀝したのであるが、實際は日蓮の事に就てなどどうでもよい。唯々私は私の意圖する所を眞劍に汲取られん事を切望するのみである。因みに若し日蓮研究に志さんとする者は先づ傳記よりし次に遺文錄に進まれたがよからうと思ふ。參考書としては「學生と先哲」中の倉田百三氏「予言僧日蓮」に就て參照せられん事を希望する。

死と再生の辨證法的人生

清光照夫

荒凉たる靜寂を孕んだ秋夜の暗黑の天界には無數の金鈷が、樣々なる光彩を放ちつゝ、神祕的に明滅する。人間は、此の啓示に依つて、星の子としての數奇なる運命を擔ひ乍ら、華々しく誕生した。それは悲劇の出生であり、喜悅と憂愁、涙と微笑、苦惱と歡喜、一切の生きんとするものゝ地上的意志の生命を含む、壯大なる Oper の序曲である。星の子の誕生は世界より產み出されたものである。宇宙開闢來、否、其の生成前より、能產と所產の創造を營む、辨證法的世界の一契起として生まれたのである。我々の進むべき一歩々々は靑白い運命と云ふ星影に照らし出されて居る。人生は嚴肅であらねばならない。私の見る眼に於ては Optimist の世界觀は尙淺薄である。而し人生の悲哀は意識的

自己の形而上學的思索から眞に齎らされ得ない。かの「Die Welt ist meine Vorstellung」と叫んで、意志を物自爾とし、意志の客觀たる、現識の世界を意志爭鬪の場と觀したショーペンハウエルは勿論、其の深刻なる世界觀と幽遠の理想に於て、我々は大哲の前に深く頭を垂れるものであるが、世界人生を全て盲目的意志より眺め、主觀主義的なる意識的自己に依つて世界を一元的に構成せる厭世觀は尙現實的人生の眞の世界觀とは云ひ得ない。世界人生は所謂認識論的主客分裂の場所でない。認識論的立場に立つならば、如何にしても、主觀から客觀は出でず、客觀は主觀となり得ない。人生の眞の Pessimismus は主觀主義的意志形而上學の中より生ずるものでない。人生は內部 知覺的に考想せられる獨斷的世界觀の上に形成せられない。智的自己の立場から見られる世界は何處迄も主觀的たるを免れない。デカルトの「Cogito, ergo sum」も、スピノーザの「Causa. sui」も何等かの意味に於て自己を媒介として實在界を考へるならば、畢竟、それは意識の立場を脫却し得ないであらう。我々が自己自身を媒介とする立場に立つて實在を考へるならば、眞の客觀的世界は決して考へられない。ショーペンハウエルの Vorstellung の世界なるものは、單なる意識的自己に抽象せられた世界構造に過ぎない。斯樣な獨斷的意志界はホッブスの如く「人は人に對して狼である」の恐怖すべき個人主義的鬪爭界に墮落するであらう。我々の存在は、我が其處に於て存在する現實的生產的世界の前提をなして初めてダー・ザインとなる。我々の考想は、現實的世界の中より考へられねばならない。即ち歷史的辨證法的世界から考へられねばならない。我々が自己自身を媒介として自己を限定する時、自己は一つの世界となる。それは何處迄も主觀的世界であつて、ヘラクレイトスの如き流動の現實界に於ける働きの個物とはなり得ない。個物は尙他の個物を措定する事に依つて個物である。即ち我々の世界は一面に何所迄も自己限定的なる個物を媒介する、個物の內的媒介者であると云ふ点に於て、即ち主觀的世界であると云ふ点に於て、それ自身が自己自身を限定し媒介する一つの個物と考へられる。而しそれと共にそれは自己限定的な個物の外的媒介者である。即ち自己自身を否定す

る個物の媒介者であると云ふ点に於て、それは何處迄も自己自身の内的統一を有たない單なる一般と考へられる。故にそれは一卽多、多卽一、肯定すると共に否定するものである。我等の歴史的實在は個物的限定卽一般的限定の矛盾的自己同一の世界である。換言すれば矛盾的自己同一界とは行爲の世界であり表現の世界である。所謂行爲的直觀的に創造する世界である。私は辨證法的世界の論理的構造を示す餘裕を持たない。私の義務は斯かる辨證法的世界に於ける人間の矛盾的同一の創造的人生に就て歩を進むる事である。辨證法的世界の論理的解明を求められる讀者は西田幾太郎博士の「哲學の根本問題」或は「哲學論文集一・二・三卷」を讀んで戴きたい。

歴史的現實は多と一の矛盾的自己同一の世界である。我々の主体的行爲は勿論其の具体的、抽象的思惟ですら、斯かる歴史的世界の自己限定に依るものである。「私の表象としての世界」が主觀的限定の立場から考へられる限り、眞の客觀實在界の解明とはならない。矛盾的自己同一として多から一へ一から多へと考へられる世界は、何處迄も主体と環境とが相對立し、相互に限定しあふ主客相互補足的創造の世界である。我々の人生は主体と環境の相互限定的な斯かる矛盾的自己同一の現實から考察されねばならない。現實の創造的發展は絶えず我々を動かし、我々を繼續的に脅かし、唆かす、矛盾的自己同一としての世界の自己形成である。

辨證法的に創造的に投影しつゝある運命の星影が我々の足場から消失して行く時、内に無限の動を孕み、自由と必然との矛盾的存在である我々は現實界からの永劫の遁走、卽ち死あるのみである。我々が矛盾的自己同一の現實に生命を得る限り、無限の努力があり、無限の勞苦がある。我々の實踐的當爲は此處に歸因すると云ひ得るであらう。矛盾は人生の事實である。それは我々の生か死かの問題である。歴史的現實は悲愁を含む世界である。眞のペスイミイステイシエ、ヴェルトアンシヤウング（Die wahre pessimistische Weltanschauung）は、ショーペンハウエルの如く意志形而上學的世界構造に基調せられずして、不斷に死の陰影を漂ふ、我々の現實の嚴然たるクート・ザツヘ

（Tatsache）に基くのであり、現實の悲愁の上に掲げられるのである。我々は今や矛盾的自己同一の世界より、人間の存在相の觀察に向はねばならない。我々が人間とは何であるかの問に、答へんとすれば、先づ精神と肉体、死と生の矛盾的性格を擔ふ者として自己の現實的存在の考察から初まらねばならない。我々の精神と肉体とは、全く結合し得ない反對的、矛盾的存在である。二者の間には何等の共通点もあり得ない。肉体と精神とは其の働きに於て無限の距離を保つて居る。全的に切斷せられた二個の絶對に結合し得ざるものである。古代ギリシヤ哲學は、卽ちソクラテスを發祥とするKynikos. Kyrene學派の如きは、此の無限切斷の肉体、精神の思索に初まると云ひ得よう。然し、我々の主体としての我は此の絶對不結合なる兩極の矛盾的自己同一である。卽ち絶對無に媒介されたものである。人間はキエルケゴールの言ふが如く、無限と有限、時間と永遠、自由と必然の兩極が無に於て綜合されたる主体である。

斯かる兩極の絶對無の無底の深淵に綜合さるゝ人間は無限の不安に陷らねばならない。キエルケゴールの所謂永遠の不安である。卽ち自己を極度に稀薄にし、空想に溺れて自己を喪失するか、或は感性の底に沈んで自己を硬化させて死滅するかのEntweder-oderの絶對の斷崖に立つ無淵の不安である。生か死か、勝利か沒落かの悲劇的十字路に直面するのである。我々の拭ひ得る事の出來ぬ、生の慟哭、生きんとする者の堪へ難い悲痛、絶望は矛盾的自己同一の無底の無（絶對の無である）より起ると言ひ得るであらう。それは救ふ事の出來ぬ絶望である。人間の運命である。悲哀である。

我々の生は絶對の死を含む切斷の結合である。人生とは無限の不安に包まれた斷絶の連續である。それは無の深淵に立つ絶望と不滿の現在である。現在は常に動搖的であり、未だ來たらざる未來に對して絶えず不滿に包まるゝものである。現在をして過去として現前の姿を不滿を以て見せしめるものは實に未來でなければならない。現在の本質は過去と未來を同時存在的に見るものとして飽く事なき不滿の自己超刻性、自己否定性である。無底の深淵に於て

Entweder-odeer の十字路に立つ我々は、滿たされるべき距離が、滿たされないディレンマを包懷して居る。それ故ディレンマは Angst を必然に伴はねばならない。他面我々の現實は其の否定面的方向に於て、無明の暗黑界であり、無限の可能性を孕んだ動搖性の世界である。それは悲愁に充ち溢れた世界である。其處に於ては一点の光明すら輝かず、惡と惡魔の舞踏場と化する地獄である。無に立つものゝ孤獨は、人間の絶望を驅つて死をも失はしめる自己喪失へ轉落せしめる。孤獨の悲哀は、荒凉たる人生への限りない哀訴となる。我々はひとり生れ來て、獨り死に行く者の運命をひし〳〵と体感するであらう。ベートーベンの悲哀は周邊的なる一切の束縛から自己自身を切斷する事に依つて、無の深淵に投げ出された、ひとり生きる者の堪へ難い諦觀である。人生の否定面は暗黑の世界である。生きる者の惱みの世界である。此處に於て人間は世界から完全に切斷せられ、彼の眼には氷の樣に鋭くとぎすまされた否定の世界が映ずるのみである。而し我々は斯かる時に於て初めて自己の本來的なる原像を眺め得るであらう。無の深淵に投ぜられた生命の自己悲痛は勿論自己自身の消滅を見る事であるが、しかも斯かる自己自身の消滅を見るものは既に自己自身の發展を見るものより大なるものでなければならない。即ち自己自身の悲を見る限定面は、自己自身の喜を見る限定面より廣いものでなければならない。その悲哀の限定面に自己が從ふ事は、自己自身をより深く見ると云ふ事に外ならない。故に人間は得意である時よりも失意に惱む時に於て、より深く人間的である。されば斯かる否定的方向に見出される自己は、より人間的なる自己の像を投影して居ると云ひ得よう。我々の歩一歩は青白い運命に照らし出された無淵の斷崖を行くものでなければならない。一歩々々が無の上に立つて居ると云はれねばならない。而し矛盾的自己同一の創造的世界に於ては絶對の否定は即肯定でなければならない。否定面に於ける人生の動搖と失意の暗黑界は、絶對の肯定として世界の價値轉換に向はねばならない。

即ち個体は死する事に依つて生きるのである。ヘーゲルの云ふ如く「制限とか缺如とかは唯々同時にそれが超えら

れて居る事に依つてのみ意識される。」とは實に、我々が一度絶對の無に歸して無から生れる事である。死して生きる事である。人間の矛盾的深淵的性格が、形成的パトス的性格になる事である。それは無の底から衝撃する Drang である。絶望の Angst が、表現的擊動的な Drang となる事である。それは我々を包む歴史的表現的世界の底から湧き上る悲劇的パトスを含む Dämon である。死と再生の辨證法的創造の世界より形成し來る情熱でなければならない。人生は包機と不安の Entweder-oder の斷崖を無の深淵に立ち乍ら、深く暗い非合理的なる衝動に從つて、創造して行く絶對斷絶の連續である。一瞬々々絶對の斷絶の連續として創造的に表れ來るものでなければならない。我々の行爲を、主觀主義的なる先驗的理性的道德の規範に律せんとする時人間の創造的形成はない。其處には平面化された世界があるのみである。

即ち形成作用的に動き行く世界は抽象論理的に考へられる如き、單に内的外的に媒介せられる世界でない。我々は世界の表現的自己形成たる現實世界の底から湧き出づる強い神の呼聲とも云ふべきデーモンに依つて individuell に人生を創造して行かねばならない。デモーニッシュに創造し行く事は表現的に内即外的に所謂ポイエシス的に形成して行くのである。アングストとドランングの絶對の綜合たる人生は無限の追求である。

それは又無限の創造である。過去を止揚しつゝ未來へ向つて創造的に發展する「永遠の今」の現在的限定の非連續の連續として人生は無限に創造的段階的である。我々は完成の未完成として永遠の現在に生きて行くのである。それは現在から現在へとゲーテのファウストの如く、高きイデーを無限に追窮して生き行く事である。ヘラクレイトスが水の流るゝ如く永遠に流動すると云ふ無常なる現實の底に不動的なる絶對者の息吹を感じて行く事である。

人生は矛盾的自己同一の不斷の産出である。死と再生の創造的なる斷絶の連續である。死から超越する生の飛躍である。死して生きる事である。矛盾がある處其處には無限の勞苦と努力があり、生みの苦しみがある。不斷の陣痛の

切ない呻きがある。而し、其の切ない呻吟の底には生み出づる歡喜があり、觸れ得ざる絶對の神に觸れて居るのではあるまいか。死と再生の辨證法的人生は絶對の現在の極限に於て、宗教に通ずるものがあらう。それは時間に無限の流れを與へる、それ自身移ろひを知らない流れを超えた永劫の現在でなからうか。我々が絶對の斷絶として現在から現在へと不動の動として永遠の現在の中から人生を超剋し、創造し行く限りに於て、觸れ得ざる絶對者に包まれて居ると信じ得るのである。

「附　記」

此の論文を書くに當つて特に中心となつた書物を掲げる。

一、意志と現識の世界　（ショーペンハウエル著　姉崎譯）
一、ショーペンハウエル哲學提要　（松本三郎）
一、ショーペンハウエル　（西哲叢書）
一、表現と論理　（務臺理作）
一、社會存在論　（〃　）
一、西田哲學　（柳田謙十郎）
一、辨證法的世界の倫理　（〃　）
一、無の自覺的限定　（西田幾多郎）
一、哲學の根本問題　（〃　）
一、哲學論文集（一、二、三卷）　（〃　）
一、表現愛　（木村素衛）
一、不安の概念　（キエルケゴール）

「歴史的なるもの」

安嶋彌

古き時代の雰圍氣と理念との崩壞が豫感されつゝも新らしき未來を構成し指導すべき理念は模糊として容易に把握し難い。我々の直面してゐる現在は從來の如き偶然的現實の危機に對處するが如き意味に於けるそれではなく、我々の存在の時間的根柢たる時代構造そのものゝ動搖であり戰慄である。餘りにも强烈な現實の激流に翻弄されて今や絶對的障壁に直面し徘徊し摸索してゐる。

極度にまで可能性と幻想を奪はれた二十世紀人はその恢復のため新らしい世紀の神話の探究に食指を動かし、健康な生活の餘地を渇望する。新らしき神話は死せるオリュムポスの神々に關する物話では勿論ないが、可能性と幻想の國である事は變りがない。神話の國は歡喜と舞踏との陶醉境である。神々に啓示するものは、デーモンであり、內なる健康な血液の叫びである。「より高きもの」に對する憧憬と感激たるエロスは極端に白熱化されてデーモンとなる。白熱化したエロス卽ちデーモンは此岸より彼岸への紐帶であるから、甚々しく神的であり一面人間的である。卽ち惡魔的なのである。デーモンとは又健康な一面陶醉的な暗き內面性の奔流である。摸索する神話の世界とは斯かる幻想の世界であると思ふ。そしてこの世界への沒入と陶醉とは「健かさ」を喪失した現代人の救濟を意味するであらう。しかしながら存在の虛無性は至る所に穽陷を開いてゐる。神話の國に住む人達も又デーモンの滲透し得ざる絶對の障壁に直面して誇らかに凱歌して滅び、自己滿足の瘡痍を全身に受けつゝ虛無の深淵へ吸收されてゆく。現代人はデーモ

ンの信仰に陶醉するには餘りにも冷靜であり自己を知り過ぎてゐる。過度の懷疑のため弱々しく憔悴してゐる。デーモンは强烈なる君主道德の象徵であり弱者の幻惑を生ぜしめるものである。弱者がデーモンを用ふれば自己欺瞞の麻醉劑としてであり、自棄の結果に他ならない。やゝ病的冷靜さをもつ現代人は自己の限界と魂の孤獨に戰き日常性の背後の虛無の深淵に臨んでゐる。彼は懷疑に耽り小市民的生活を形成し微かなる內心の滿足のため生活する。しかしその運命は現代の如き現實の激浪の前には保證されてゐない。我々はかゝるアポロン的理念とデイオニュソス的理念の對立に直面してゐる。かゝる Entweder-oder の瞬間こそ存在の危機であり、時代の轉換の象徵である。而して歷史の中で最も歷史的なる將來のあらゆる問題が犇きあふ最も神の微光の顯なる象徵的瞬間である。そしてこのアポリヤは理念の同時に歷史哲學的なそれなのである。

叙述されざる歷史、素材としての Geschichte…… 卽ち Geschehen したもの……は生々しい人間苦鬪の歷史であり無限の虛無的存在の深淵を意味する。かゝる歷史は尊嚴なる事實として全面的に積極的に受容さるべきであつて、單純な偏狹な道德的批判を遙かに越えたものである。人の子の贖罪のためキリストは十字架上に死し、生產有機体としての社會を維持するために連帶の苦患を一身に擔ひつゝも過去の闇に葬られた人の數々、反面享樂に夢死した人間も多數あつたに相違ないが、遙かなる距離を隔てゝ見れば共に苦惱する人間に外ならない。彼等の幸福は瞬間的な自己陶醉、忘却の境以外には無かつたであらう。歷史の潮流は永遠に虛無の不安に動搖してきたのであるが、かゝる次代への轉換を行はんとする現代にこそ就中甚しいものがあらう。この不安に講壇哲學までがその無風帶を誇り得なくなつてハイデッガーの如きは「我々は不安の中に動搖してゐる。一層明瞭に言へば不安が我々を動搖させてゐる。それは不安が現存在を全体として滑らせつゝあるからだ。」と語り、この「不安の根本氣分」より彼の全人間學を基礎づけたのである。同じくマックス・シェラーも「知識の諸形態と教育」の中で、音も立てず不安の中に吸收され溺死

せんとする全文化について語つてゐる。時代の黃昏の薄暮を待つて飛ぶミネルバの梟たる哲學が不安について語つてゐるのは、果して不安が前世紀のものたるを示すものであらうか。否、世紀の終末は發端でもあり得る。これは更に明瞭な形態をとつてこの世紀の自覺に登りつゝある。かゝる狀態は市民的なるものゝ沒落が齎す不安ででもあらうか。

「時代構造の波が絕對的障壁に遭遇して奔騰する瞬間は深き動搖の中に不安を醸成するが、同時に過去への挽歌を奏づる瞬間であり、未來に於ける萠芽的要素の曙光が閃く最も創造的瞬間である。「ヘーラクレイトスが言つた樣に戰は萬物の父である。偉大な危險の各瞬間——不幸、反抗、解放——の中に相對立する諸力が衝突摩擦し、新らしい展開は決然として登場するのである。」と ランケがフランス革命の混亂に投げかけた言葉、そして近世の決定的萠芽を見たこの言葉は現代に對しても又妥當しなければならぬ。この創造と克服の道こそ我々に遺された唯一の道であると思ふ。我々は未來に對する豫言者ではあり得ないが決して盲目ではない筈である。そして幾多の疑問にも拘らず—それは少くとも無力であらう——根柢に潛む時代の感覺と現實克服の生への意志により、デーモン信仰と健康への憧憬を未來に見得るのである。我々は克服を考へなければならない。

不安とは社會の未來に於ける危機の人間の意識への情緒的反映なのである。不安は未來より來る。その未來を我々は無制約的なるものと考へる事は出來ない。不安を感じつゝある現在そのものが過去と未來との同時存在であり、永遠の過去と永遠の未來との接觸点である。從つて未來から感ぜられる不安も實は過去から課題として與へられたものと思ふ。卽ち人間は過去の重壓に喘いでゐるのである。この過去とは一体何なのであらうか。前にも述べた如く叙述としての歷史の前に生々しい事實としての歷史がある。歷史は飽くまでも史學に對して優位を保持するのである。か

かる過去の歴史の意義はポリユビオスにとつては實例に依る哲學であり、リヴイウスにとつては實例に依る倫理であつた。我々にとつての歴史の意義は何であらうか。

現在歴史のみならず學問一般に於て頻りに危機が唱へられてゐる。がそれは學の根本原理の動搖といふよりは、學問の自律性と實用性との間に存する矛盾の故である。學問の自由が否定されて國家への從屬が强要されてゐる。元來知識にとつてその實踐は種類に依つて理想ではあらうが、果して一般的に必然的なものであるかどうかは疑問に思ふ。同樣に歴史についてもこの事が言へる。歴史學が民族精神强調の具となり、或は又それ以外の目的に供せられてよいであらうかといふ事である。この故に又歴史主義の危機も唱へられるのである。しかし十九世紀の最も異彩ある功績の一つである歴史主義が容易に否定されるとは思へないし、又否定されてはならないものを含んでゐる。が歴史學の立場からではなく、時代の克服のためには、歴史に對して未來への決斷が綜合の原理となり我々に對して更に積極的なものにならねばならない。斯樣に考へるならば我々はニーチェを想起せざるを得ないであらう。

「歴史は未來への架橋であり創造への決意である。我々は歴史の過重から脱して創造に歴史を從屬せしめなければならない」といふ語にニーチェの歴史觀は要約される。彼は十九世紀の特色ある功績ではあつたが、無批判に尊重せられた歴史科學が眞正な文化、人間の健康にとつて有益なるものではなく、似而非文化の招來者なる事を「反時代的考察」の中の「生にとつての歴史の利弊」の中で强調してゐる。その論文はゲーテの「兎に角、私は單に教へるのみであつて、活動性を直接活潑ならしめる事のない總てのものが嫌である。」といふ言葉を以て始められてゐる。それ以外でもゲーテの歴史に關する思想はエツケルマンとの對話の中にニーブールを評して、「今まで人々はルクレチウスやスカエウオラなどの英雄的精神を信じ、それに依つて鼓舞されてきた。然るに今歴史批判が表はれて、かゝる人物

は實在せず、ローマ人の偉大なる精神力の產出した虛構であると說いてゐる。然しかゝる貧弱な眞理が何であらう。ローマ人にして、かゝるものを作り出す程偉大であつたならば、少くとも我々はそれを信ずるだけ偉大であるべきである」と語つてゐる事に依つても知り得る。斯樣に、カントと對蹠的な地位に立つ形而上學者としてのゲーテには鋭敏な直覺による實在への深き洞察があり事實への尊敬と沒入があつた。ウイルヘルム・マイスターの生涯に於てファウストの結末に於て純粹な創造性を强調した晩年の彼は二元的分裂を超えた調和の世界に住んでゐる。ゲーテのかゝる勇猛に表現された言葉を前提としてニーチェは歴史の價値反價値への考察を進めてゐる。從つて十八世紀の文明精神の信仰を嫌惡した彼は單なる認識としての歴史を知識の花園に於ける懶け者の必要とする歴史であると考へるのである。懶け者達が上品に、粗野な優雅ならざる要求として冷笑する「生に從屬せる歴史」こそ彼には創造の根源であつた。ニーチェはギリシヤの徒であり、當時の時代の子としての体驗を超えて、その時代の歴史的教育を傷、畸形、歴史病なりと反時代的痛罵を行つたのである。彼の言ふ歴史病は創造に對する障害であり、過去から擔はされた運命の暗い影である。過去は一面重苦しい記憶の堆積と思はれる。「お前の傍を過ぎて草を喰ひつゝゆく家畜の群を見よ。それは昨日が何であり今日が何であるかを知らない。跳ね廻り、喰ひ、休む、消化する。そして左樣に朝から夜まで日から日へ……故に暗鬱もなく倦怠もない。」この動物達の姿は人間にとつては、一つの羨望である。彼等には忘却といふ賜物があるが、人間には「どんなに遠く、どんなに速く走つても一緒についてくる」記憶といふ鎖がある。それは人間の文化の根源であるとともに、不安の根源でもある。こゝに懷疑論者の判斷中止の如く「非歴史的に生きる事こそ幸福を幸福たらしめる。」とも言へるのである。かく創造のための忘却を說く彼には、この点に於て當然許さるべき錯覺があり、又眞理がある。「ゲーテの表現に從へば行動者は常に良心無しであり、知識無しである。彼は一つの事をするために大部分の事を忘れる。彼は自分の背後に横はるものに對して不公正であるが、たつた一つだけの

權利を知つてゐる。今成るべきである權利だけを」即ち忘却は常に健康のため創造の可能性のため必須のものである。「忘却の能力を全然持たず至る所に生成を見る如きは、まがひもなきヘラクリートの弟子として遂には指を屈する勇氣もない」文明人である。ニーチェの記憶の重壓と忘却の恩寵に關する思想は要するに、人間と文化の健康のためである。彼にとつては歴史も創造への決意であり未來への架橋でなければならないのである。しかし過去が未來への架橋であつて、過去は獨自性を否定され、即ちその固有の原理が否定され、次代への手段單なる課程としての意味しか認め得ないといふ事は彼の單純な獨斷と錯覺に外ならない。過去の意義は、過去の現在が根柢に於て超越的にして絶對的な絶對者に連つてゐる所にある。この歴史に於ける第三帝國たる神――神的たるものと言つた方が一層よいかもしれない――こそ歴史の潮流に潜む光輝であり、歴史的價値の規準である。そして現象的歴史事實も之との關聯に於てのみ生命を獲得する宇宙の原像である。故に過去の各時代の完結せる範圍に於ける絶對的な原始構造は本來如何にしても超克し得ない。ニーチェは過去を超克さるべきものとして否定したが反面彼は盛り上つた全存在の一点の故に過去も永遠に肯定されたのだとも考へられるが、しかもそれは眞の肯定ではないと思ふ。即ち彼の肯定は現在の肯定であつても過去の肯定ではない。といふのは、彼の肯定は現在の「高み」の故であるが、眞の過去の肯定とは過去の時々に現出した非連續的連續の「高み」の肯定でなければならないからである。過去の意義は絶對に否定できないが、過去はそれを否定し新なる時代の構造に飛躍する事に依つて超克し得る。新時代の創造こそ過去の超克であり眞の創造である。

ニーチェが健康なる過去乃至歴史を必要としたのは「人間は透視的に歴史の種々の原義を見拔きつゝ次第に後から後からと押寄せてくる象形文字に疲れ果てゝ逃げ腰にさへなる。何故なれば事件の過剰に於て彼はどうしても滿腹に食ひすぎ然り遂には嘔氣を催さずにはゐられない」といふ窮境を離脱するためであつた。自己の創造した知識の客体

の重壓に喘ぐのは、啓蒙主義精神、所謂學問精神の餘弊であつて、彼のみならず、總ての十九世紀人の苦惱した点である。「純粹學問として考へられた、そして獨裁的になつた歴史は人類にとつては、一種の生活終止にして、且つ生活決算であらう」といふ彼の言もその時代の人々に對する批判としてのみでなく、彼自身の内面的苦惱の表現として生々しく聞かれる。歴史的教養が一層力強い生活の潮流へ生成する文化へ非歴史的權力へ從屬する事に依つて「健康の關心事が解決され、歴史の過剰とともに生活の瓦解と退種から人間が免れ得る。」のであつて、非合理的デーモンへの從屬が彼にとつては歴史の本質であつた。即ち彼が墓掘人に譬へた過去を對象とした歴史は眞の歴史ではなく、却つて歴史の本質は未來にあるといふのである。歴史は成り出づるもの、或は存在ではなく行爲さるべきものである。歴史の本質の未來への轉換こそコペルニクス的であらう。歴史は所與ではなく未來に於て却つて實現さるべき課題である。この課題の實踐のため過去の忘却による健康な歴史が來り、創造への視野の轉換が行はれる。創造者は必要な事意外顧慮しない。それ以外の事は無視し得る。創造を考へるならば、史學に要求さるべきものは過去の模寫と再現ではなく實踐である。

ヴアレリーが「歴史はそれに參加する人にとつてのみ、未來に情熱を抱く人にのみ歴史である」と言ひ得るのは、歴史の認識が即ち歴史の行爲であるためである。單なる行爲ではなく歴史を行爲するといふ事には深き根據があらねばならない。ヘーゲルが馬上に過るナポレオンを見て「皇帝、この世界精神」と呼んだ時彼は歴史を行爲する英雄を見たのである。それは最も神的な一つの瞬間に屬するであらう。元來歴史は無目的に――これは歴史的普遍の存在を否定する事にはならない――蠕動する群集の足跡の如くであり一面英雄或は天才を結ぶ偉大なる上昇線に依つて象徴される。この一見逆説的な命題の成立する根據は歴史的世界そのものゝ深き構造に基くものである。我々は歴史を單に英雄の歴史と見、その基底をなす多數の人を無視すべきではないが、又英雄は民衆に從屬するものでもない。英雄は

民衆の形成的意志であり、民衆は英雄によつてのみ眞の民衆たり得る。「民族は自ら何を欲するかを知らない」とはヘーゲルの言葉である。かゝる潜在としての意志を限定し自覺せしめるのが英雄である。つまり歴史的世界の民族や國家の意欲と使命とを体現し個人にして同時に世界の傾向を擔ふものが歴史的個性即ち英雄である。しかしこの世界は歴史的世界であり、その傾向は同時に時代の傾向である。しかるに時代は固有の原始構造を有する。從つて歴史の發展は一つの原始構造から他の原構造へのメタモルフォーゼであり、その時代の本質としての原始構造は他のそれとの比較商量を絶對的固有價値を有する。それがランケの言ふ如く神に連つてゐる歴史の面なのである。英雄は時代を逸脱するものでなく却つて之を代表する。しかし根本的には時代の傾向は民族の意欲としてのみ表現されるのであるから、英雄は民族の傾向と主体の行動との呼應的合一即ち歴史的世界の深い要求と歴史的主体の創造的意志との呼應的合一に於て、英雄が出現する。かゝる永遠の面に直面する英雄民族にしてのみ歴史を行爲すると言ひ得、又歴史は眞に歴史たり得るのである。歴史の我々に對する創造的意義はかゝるものでなければならない。そして我々は更に生きた歴史の把握についても思を廻らさねばならない。

繰返へし述べた如く事實としての歴史は存在の虚無性に漂ふ過去の闇であり、又神の微光の閃く一つの象徴であり、又意味の深淵である。かゝる深淵からオリゲネスの如く、一つ一つの言葉に隱された秘密の意味を悟り卑俗な言葉の中に秘せられた智慧の寶庫を見出さねばならない。かゝる歴史は知性の分析、比較、抽象、綜合等の作用に依つては認識し得ない。單に内体で感覺する事に依つて体得される所に本質を有する生命的本質を有するものである。單なる頭腦の機能としての知性ではなく深き本能に基く我々の血液のみが歴史の深淵的事實に共鳴し正しく赤裸々に認識し得るのである。過去の体臭と息吹を感じてこそ我々の歴史認識は全うされる。そのためには深き直觀と事實への沒入が必

要とされるのである。かゝる立場に於て近代史學の新なる出發点に立つランケを回顧しよう。

ランケ以前の歴史意識はギリシヤに於ては運命である。ギリシヤ哲學は前理性的な自由な構想力と原始的知性によるかの極めて人間的な神々の神話の否定に成立してゐる。從つてそこに代つて出現するのは神々の人間性の否定の後理性に依つて直觀せられたイデア即ち永遠の一般者である。かゝる非人格的實在イデアとの人間の對立の故に冷徹なる宿命がギリシヤ的な歴史意識の根源であり、又ギリシヤ悲劇が運命の惡戯と見なされる所以である。中世紀に於ては歴史の主体は神である。アガペの主体としての神は意志的人格神であり創造主であるから人間の歴史課程は神の意志の顯現である。天國追放以來の墮落、その現實の悲慘のための救世主出現を希望する强烈な理想意識は未來に對する救濟の歴史意識となる。歴史の本質を深く洞察してゐたアウグスチヌスにとつては歴史の目的は人間の罪よりの救濟、神の攝理の實現であつて、現實に於ける超越的なるものゝ積極性を認めるのである。が中世としては當然であらう。而るに近世啓蒙時代に至つて、始めて人間が歴史の主体である事が自覺されるに至つた。最初歴史哲學なる語を鑄造したヴォルテールの意圖は歴史を導くものは信仰に非ずして理性であると說く明瞭な中世史觀への反逆この点に啓蒙といふ功績はあつたらうが一面史觀の淺薄化は免れなかつた。當時は總てが頭で組立てられてゐた時代なのである。これはヘーゲルがその歴史哲學の中で述べてゐるフランス革命についての言葉によつて知られる。「正義の思想、正義の觀念が忽にして勢力を占めて、不正義の足場はそれに對して何等の抵抗もなし得なかつた。かくの如き正義觀の上に今や一つの憲法が設けられ、今後一切のものがその基礎の上に立たねばならなかつた。太陽が天空に懸り諸遊星がその周圍を廻つてから以後未だ人間が頭で立ち、即ち思想で立ち、そしてそれに從つて現實を作り上げるといふ話を聞いた事がない。昔にアナクサゴラスが初めて言つた道理が理性が世界を支配すると。然るに今や初めて思想が精神界の現實を支配せねばならぬといふ事を承認するに至つた。それは實に燦然たる日の出であつた。總ての思

索する生存物が相共に此の日を祝賀した。莊嚴な情緒が當代を風靡した。人心の情熱が世界に漲り渡つた。今こそ神意と世界との調和がきたかの樣に。」この一文に於て理性の支持に歡喜したヘーゲルを含む當時代の人々の樣子が巧妙に表現されてゐる。しかし革命の結果は如何なるものであつたらうか。ランケは一八三〇年パリーが七月革命の血に彩られた時書いてゐる。「ヨーロッパが祝福と自由とを齎す親愛なるものとして歡迎し來つた諸觀念が（第三階級のため）眼前に見る見る中に忽にして何といふ荒廢劫掠の惡鬼に變じた事か。人々が土地を暖める事によつて、それを肥し、生氣づけるものと考へてゐた火山の火は今や戰慄すべき爆發を反覆しつゝ地面に降りそゝいだのである。」（强國論フランス革命）しかし「この道理の王國はブルジョアジーの王國の理想化に過ぎなかつた。フランス革命のこの正義はブルジョア的正義として確立された。」（エンゲルス）とまでは極度し得ずとも、少くともランケの見たが如き事情にあつたものと思はれる。そして革命の理念もヴオルテール等から出てゐるものであり、又彼の史觀そのものもマイネツケが「芝居から歷史に入つた。」と皮肉つた如きものであつて趣味的な興味的なものでブルジョア社會のサロンの背景があつた。兎に角ヴオルテールの時代には啓蒙思想の特徴として過去の總てが唾棄すべき無價値なものであり、それ自体のもつ意義などは見失はれてゐる。つまり當時の人々は思想を歷史の事實に强制し、極めて好都合な實用的歷史を揑造したのである。かゝる當時の傾向に於て、事實の理論に對する優位を强調したランケの意義が解される。

ランケ（一七九五—一八八六）は歷史家であると同時に實質上宗教家であつた。彼にとつては歷史は神の啓示に外ならない。敬虔主義を信奉して嚴肅な教職者となつてゐる弟へ「一体この世に純粹に世俗的な神に關らないものがあらうか。一切が神に關るのだ」といふ時、彼は晩年のゲーテの如く汎神論者の樣に見える。實際彼にとつては歷史は神の顯現であつたが、中世史觀の如く神の攝理として歷史を見たのではない。歷史を一つの理念で解釋する事こそ歷

史事實の冒瀆であつた。彼は歷史の中に光の微光を「個々の場合の隙間と斷片を通じての外は見得ないにしても、歷史は神の舞臺である」（ヘルデル）といつた風に神を瞥見したのである。斯くの如きは、彼がザクセン選擧侯領チュリンゲン地方に代々牧師を努めた家の出身であるためであらうか。元來ランケは歷史家たるを志さずして歷史家となつた人物で最初彼を歷史叙述へ驅りたてたものはルツター傳の製作であつたと晩年の彼は回顧してゐるから、その動機には寧ろ宗教的なものが働いてゐると思ふ。

かくの如く歷史に於て神を見る彼に於てはそれ故歷史事實は極めて神聖なものであり、人間の小細工を許さない。從つて bloss zeigen wie es eigentlich gewesen 或は Ohne weiteren Zweck が彼の歷史に對する態度である。かく神を史實の中に見るランケは單なる客觀史觀を超える。同樣な譯で彼は神聖な過去を如何なるものゝ手段としても認めず前にも述べた如く過去の時代の原始構造の絶對的價値を認容してゐる。從つて啓蒙思想或は近代唯物史觀の如く時代の價値は次代によつて正當化されるのでなく、神に依つて正當化される。過去は理想への手段と見なされ、或は野蠻なる時代としてそれ以外の價値より評價さるべきではない。こゝにランケ史觀の啓蒙史觀に對する反逆があり、一歩前進した所以がある。しかし前にも言つた樣に歷史は神聖なるものなるが故未來の行爲に對しては利用さるべきではない。ランケは、前代の歷史家中ニーブルとツキヂデスを尊敬してはゐるが、歷史事實の將來に於ける反復を豫想して、歷史をその場合に於ける實用に供せんとするツキヂデスとはかゝる点に於て對立してゐる。それは歷史の冒瀆に外ならないからである。

歷史哲學と歷史學との關係については、一八五四年九月二十五日ババリヤ王マクシミリアン二世に對する進講「近世紀の各時期」の第一回に於て論じてゐる。それに依れば、ヘーゲルの言ふ辨證法的論理過程に於ては唯思想のみが生命を有して實は思想の幻影となる。世界を概念に依つて構成せんとする哲學に事實の立場より反對してゐる。同樣

の趣旨は強國論の序説の中にも見られる。「各時代に於ける指導的思想は叙述できるのみで一個の概念に歸結する事は出來ない。」と言つてゐる彼にとつては論理を超えて事實が本來如何にあつたかといふ事は神に對する謙虚であり一つの宗教である。同様に事實の連關は神の證しであり、その象形文字の判斷をする歴史家は祭司であるとも言へよう。

彼の住んでゐた神との合一に依る調和の世界で宗教的卽物主義が生れ、事實の絶對性が確立され、事實に對する客觀的沒我的な献身がある。歴史の事實は概念に歸結せんとし、合理的に思辨されるものでなく事實の無媒介性を直觀する事に依つてその生の面が把握できる。ランケのこの事實の無媒介的直觀は單に彼獨自のものたるのみならず十九世紀初頭の文藝思潮ロマンテイク運動と密接に關聯するものであると思ふ。ロマンテイクには中世的カトリツク的匂が感ぜられるのであるが、それに於ては、フランス革命の根源となつた自由も啓蒙的な理念的なものを超えた事實としての自由があつた。例へば戯曲に於ては、クラツシツク劇に嚴存する三單一の法則の否定はもとより、未開の若き王と言はれるヴイクトル・ユーゴーが一つの理念を强制する事、或はアリストテレス流に事實の顔を歪める事を非難してゐる如き一層高い自由の概念が見られるのである。かゝる一般的時代思潮からもランケは一層完全に理解されるであらう。又日本の歴史意識も歴史事實の背後に因果とか天命とかいふ理念を考へる事なく背後を無として事實の直觀に於て、合理主義の盡し得ざる深い意味を把握するのがその特徴であるが、彼此對照して面白く思ふ。

斯様な史觀をもつランケの歴史叙述もそれが政治史なるが故に個人主義的傾向のもつ不徹底さは脱れてゐないと思ふ。時代の体臭の息吹は寧ろ却つて社會史の中に見出さるべきではなからうか。しかし幾つかの缺陥にも拘らず、彼の事實の直觀と神は意義深きものがあらう。要するにランケ史觀の精髄は、强國論再建の最後の言葉に見出されるであらう。そして、こゝにこそ歴史の生命があると思ふ。「私達が世界史の轉開に於て目擊するものは諸々の力であり、

しかも精神的な生命を生み出す創造的な力であり、生命そのものである。それは實に道德的エネルギーなのである。これ等のものは、定義したり抽象的規定を與へたりする事は不可能である。私達はそれを直覺し知覺する事が出來るのであり、それの存在を自ら生々と同感する事が出來る……之等の諸力の相互作用の繼起の中に、その生存と消滅或は復興……の中にこそ世界史の秘密は横つてゐるのである。」と。こゝにランケの總てがある。そして生の歴史への道がある。かく、彼が啓蒙主義史觀の域を越えて歴史の中に神を見、諸々の人間的諸力の錯節を見た事は確に史觀の一進展といふべきであらう。しかし、彼の如く歴史のエネルギーを直觀し知覺し同感するといふ受動的態度を以て歴史事實に沒入する事は歴史事實の生命的把握を齎らす一方主觀的獨斷に陷る。「概念なき直觀は盲目であり、直觀なき概念は盲目である。」とはカントの言葉である。歴史も科學たる以上單なる受動的直觀に止まる事は許されない。その直觀は主体的認識にまで止揚されねばならない。同じく彼が直觀にとゞまつてゐた事の理由により次の事が言へると思ふ。時代の理念がそれ〴〵神に通ずると言つて、その非連續を直觀した彼が基底に於ける連續を見出したのも神の概念の中にである。歴史に於ける神的なるものは認識されるであらうが、それは時代の理念の説明回避の學的假説であつてはならない。しかるに、彼の物自体的な神の概念こそランケ史觀に於ける生命的中心を形成するとともに又不明瞭なる個所であると思ふ。これは無媒介的直觀は生命認識の基礎ではあり得ても結果ではあり得ないからである。又彼の史觀もニーチェの言ふ歴史病が當時の歴史主義に根源するものである事を考ふれば、ニーチェの鋭鋒を全面的に拒否する事は困難であり、又ニーチェの忘却が誇張であるにしてもランケ史觀及び歴史主義に對する意義は看過されてはならない。この点にランケの限界も存すると思ふ。

以上所々に於て示されたランケとニーチェの對立にも拘らずランケは過去に、過去の現在に絶對的價値を認め、ニ

ーチェは存在の高みに於ける「現在の價値」に絶對性を認めてゐる。この兩者の現在の絶對性に關する思想の一致に双方を止揚すべき立場を求め得ると思ふ。

現代の生の哲學はホモ・サピエンス哲學の抽象的思惟の概念的認識を排して、實在の主体性に深まらうとするが故に、デカルトが一切の懐疑の後、遂に彼の立脚点として見出した Cogito, ergo sum の命題を否定して人間的現實の全体 vivo を Cogito に置換する。從つてデカルトの命題は必然的に Vivo, ergo sum とされねばならない。人間は思惟する前に廣き意味に於て行動し、意欲する人間である。行爲に於ける現在は絶對なるが故に現在と、過去の現在は絶對的である。この意味に於てランケとニーチェとは同じ基底に立つてゐる。西田哲學に於ける絶對的現在の行爲的直觀もかゝる意味に於ける行爲ではないかと思ふ。かく生の全体に依る歴史の主体的把握により眞の歴史の認識が成立ち、結果として生の創造的潮流に合致する歴史が生れる。歴史はかく、必然の認識に止まらず創造的當爲をも意味する。

歴史の斯くの如き觀察により現代は次の如く考へられる。即ち必然として時代の原始構造は絶對の障壁に遭遇し未來への轉換に打震へてゐる。そしてこの非連續の切斷面こそ眞に歴史的であり、神聖である。そして他面當爲として歴史より現代に課せられた課題が見出されねばならない。故に我々は所與としての必然と課題としての當爲との統合たる現實的創造が我々の道である。

（十五・十一・十）

校内プール及び寮の風呂の水中に於ける細菌數に就いて

秋田利夫
中島章

緒言

プールで泳いだ事のある者は、殊に水が濁つてゐる時など、さぞ細菌が澤山居る事だらうと氣持惡く思つた經驗があるに違ひない。まして毎日プールを道場として心身を鍊つてゐる我々水泳部員は、特に此の点に非常な關心を持つて居る。更に我々は殺菌の目的で時々プールに藥品を投入するが、それが果してどの程度の効果があるものか、實際は少しも判つて居ないのである。それでこの疑問を我々自身の手で多少とも解決しようと考へ、これに關して我々高校生で出來る範圍の實驗を行つた。手近に得られた文獻に依ると、京都、熊本等で數回此の種の調査が行はれてゐるが、概して實驗例は餘り多くない樣である。而もこの樣な調査は實驗例の多い程、正確な結論を導く事が出來るものであるから、我々の今回の實驗も決して無駄ではなかつたと信ずる。

培養基

方法

寒天ブイヨン培養基を使用した。即ち型の如く水一〇〇〇立方糎に對し牛挽肉一瓩を加へてスープを作り、これを濾して後、ペプトン二〇瓦、食塩一〇瓦、寒天一七・五瓦を加へ、熱して良く溶解せしめる。次いで更にこれを濾して稀塩酸及び炭酸ソーダを以て水素イオン濃度七・二に調節し、一〇立方糎宛試驗管に分注し、コッホ氏蒸氣殺菌釜で一日置きに連續三回殺菌を行つた。

採　水

コルク栓を施した殺菌試驗管を用ひ、午前十一時頃プールの東南隅上り口の水面下約一〇糎の所の水を採つた。保存した水道水中の細菌增殖狀況の檢査に於ては、綿栓を施した多數の殺菌試驗管中に同時に水道水を入れて保存し、各日二乃至三本宛を取つて實驗に使用した。風呂水の細菌檢査に於ては、寮の入浴時間が午後四時から午後七時までであるから、午後四時から一時間毎に午後七時までコルク栓を施した殺菌試驗管で採水した。

實驗操作

試驗水は豫め殺菌したシャーレに、同じく殺菌したピペットで〇・五乃至〇・〇二五立方糎づつ、空中の細菌が出來るだけ混入しない樣に靜かに流し込む。次に前以て溶かして置いた試驗管內の培養基をその上に流し加へて兩者を混合せしめた上、室溫に放置し細菌聚落の發育を待つて、一週間後にその數を計算した。尙ほ正確を期する爲め、同一實驗につき、シャーレを三乃至一〇個づつ使用した。實驗は六月五日プールに充水してから七月四日まで行つた。

結果及び考察

該實驗の結果はこゝに第一乃至第五表として揭げた。プール水中の細菌數は第一表、第二表にも明かな如く、充水當時に於て一立方糎につき二十三個を示した。その日の午後漂白粉三封度、硫酸銅五〇瓦投入して殺菌した爲めか、第二日目は細菌數が減少して居るが、その後四日目までは增加して行き、五日目で急に減り、十三日目までは二〇〇か

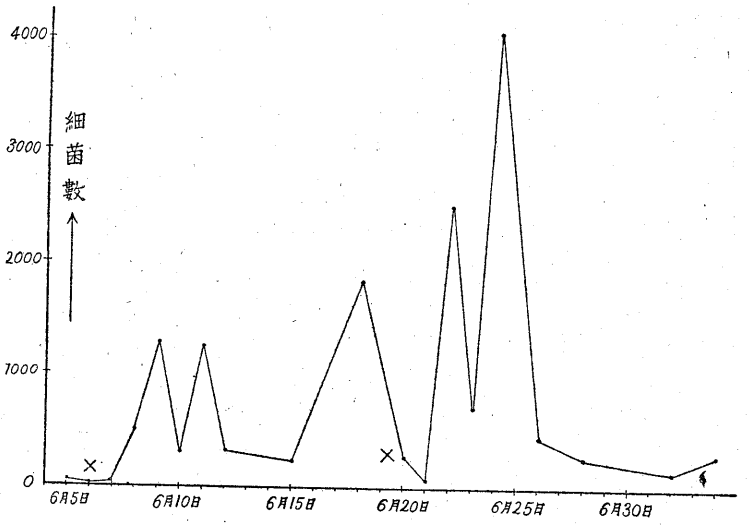
ら二〇〇〇の間を上下してゐる。十四日目に再び漂白粉五封度、硫酸銅八〇瓦投入した爲め細菌數五四個まで下り、それから四日後には四〇〇〇以上に達し、更にその後にはずつと減少してゐる。最初氣象等と關係あると豫想して、天候、氣溫、水溫も同時に日々記錄したのであるが、細菌數の增減との間に何等確定した關係を今回の實驗では見出し得なかつた。然し我々の從來の想像に反して細菌數の意外に少なかつた事は、我が四高の爲め誠に喜ぶべき事であらう。他地方の調査記錄に依れば、或るプールでは細菌數一立方糎に付き數萬に達した例さへある。然し細菌數の意外に少いのは一面四高プールが利用される事の少ない事を明白に示してゐる。四高生諸君よ、どしどしプールを利用して我等と共に泳ぎ給へ。

第　一　表

採水日	附	天候	氣溫 ℃	水溫 ℃	プール水1立方糎中細菌數
6月5日		雨	19	16	23
五日午後漂白粉3封度、硫酸銅50瓦投入					
6日		薄曇	23	20	9
7日		小雨	21	18	13
8日		晴	27	21	504
9日		晴	24	19	1295
10日		曇	22	21	281
11日		晴	25	21	1263
12日		晴	27	22	304
13日		晴	29	23	
14日		晴	29	24	
15日		曇	31	24	202
16日		雨	24	23	
17日		雨	23	23	
15日		曇	19	23	1835
19日		晴	27	25	
19日午後漂白粉5封度、硫酸銅80瓦投入					
20日		晴	27	25	294
21日		晴	28	26	54
22日		晴	30	26	2513
23日		晴	30	26	710
24日		曇	30	27	4064
25日		曇	24	27	
26日		雨	24	27	457
27日		雨	26	26	
28日		雨	25	25	278
29日		晴	31	27	
30日		晴	32	27	
7月1日		晴	29	28	
2日		雨	42	27	164
3日		晴	29	27	
4日		晴	31	29	307

註　水溫及び氣溫は採水時に於ける測定

第二表　プール水の細菌數



×印……殺菌直後の成績

さて今回の實驗に於て、プール水中の細菌數が日に依り著しく增減して、豫想に反し等比級數的增加を示さなかつたのは、屋外プールが終始外界の狀況の相違に依る影響を受けて居る爲めではないかと想像される。然し、プール內に於ける細菌分布の不均等、實驗方法及び操作の不完全及び拙劣等の結果もその原因の一端をなすかとも考へ得る。尙ほ從來我々の行つてゐたプールの殺菌法は、此の實驗から見れば餘り完全とは言へない。然し嚴密に殺菌する程の必要もないから、今まで通りの方法で差支へないと思はれる。

次にプール水との比較の爲めに、外界の影響を殆んど受けない保存水道水中の細菌數檢査實驗を行つた。卽ち新鮮な水道中の細菌數を檢査し、次いで該水道水を殺菌試驗管に入れ室內に保存しおき細菌數の增殖率を調査したのであるが、第一回の結果はその細菌數（第三表に示した如く）約二週間保存しても一立方糎に付二〇〇を越えず、第二回の實驗では五〇〇〇〇以上に達した。然し後の實驗では、その細菌の殆んどの部分が小さい褐色レ

ンズ形の聚落を形成する一種類のもので、これが第一回目の實驗では殆ど現はれなかつた爲めに、第一回と第二回との結果に著しい不一致を生じたのである。水道水中に此の一種類の細菌が含まれてゐない場合、又は含まれてゐる時には之を除いて考察する場合、水道水中に於ては保存日數が經過しても餘り細菌は增殖しないものと解せられる。

此の種の實驗は同じく熊澤教授御指導の下に、昨年 理乙二の澤田君が行ひ（生物研究會々報第二輯登載）、最近 又理乙三の瀨戸・酒井兩君が行つたが、やはり上記の如き一種類の細菌のみが非常に多く增殖したと聞く。

尙ほ奇異に感ぜられるのは水道水を何日保存しても外觀には少しも變化がないにも拘らず、その中に含まれる細菌

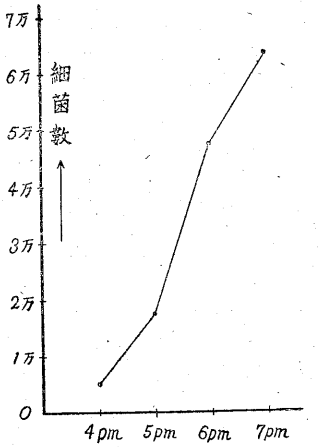
第三表

水道水	一立方糎中細菌數	一立方糎中細菌數
保存日數	第一回(6月5日開始)	第二回(6月20日開始)
0	27	2
1	6	6
2	14	193
3	36	1494
4	42	8232
5	21	
6	41	20216
7	160	
8		24721
9		
10		
11		
12		
13	107	51600

第四表

採水時間	寮風呂水 一立方糎中細菌數
午後4時	4725
5 〃	17055
6 〃	48000
7 〃	63940

第五表　寮の風呂水の細菌數



の數が一立方糎に付或る場合には五〇〇〇〇以上といふ非常な數に達する事である。之れをプールの水が外觀は濁つて居るにも拘らず、細菌數が五〇〇〇を越えないのに比較して見ると、自然界には往々我々の常識と全然反對な事實の存在する事が知られるであらう。

次に寮の風呂は第四及び第五表に示す通り、入浴の許される最初の時から細菌數四〇〇〇を含み、午後五時、六時と時の經つに從つて急激に增して、僅か三時間後の午後七時には既に六〇、〇〇〇以上と云ふ驚くべき巨大な數に達してゐる。これは入浴者も多く溫度も高い風呂としては當然の事であらう。然しこれは本年七月の實驗で改裝前の風呂に於ての結果であるから、現存の狀況とは稍異るかも知れない。

結語

要するにこの實驗のみに依つて見ると、我が校內プール水中の細菌數は豫想外に少なく、これに反し一見澄んで見える長期保存後の水道水や、多人數の入浴する寮の風呂水中の細菌數は非常な數に上る樣である。然し前にも述べた如く、この種の實驗は回を重ねて初めて正確を期し得られるものであるから、有志諸君の追試を切に願ふものである。

最後にこの實驗を御指導下さつた理學博士熊澤教授及び御援助下さつた植物教室古村助手に深く御禮を申上げる。

科學と宗教（上）

バートランド、ラツセル著
渡邊　宏
石野龍山共譯
遠藤　宏

まへがき

著者について

バートランド・ラツセル（Bertrand Arthur William Russel）はイギリスの數學者哲學者で且社會論者、一八七二年五月十八日モンマウスのトレレツクにアムバーリ子爵の第二子に生れた。ジョン・ラツセルは彼の祖父に當る。ケンブリツヂの Trinity College で學び卒業後講師及び校友となつた。記號論理・數理哲學の研究者及新實在論哲學者として顯る。前の大戰の時政府に反抗して罰せられ母校に於ける地位を失つた。アメリカ、支那で講演し我國にも來遊（大正一〇）ソヴエート・ロシヤをも旅行した。自由主義の精神で可成根本的な社會改造を主唱しフロイド說を基として兒童の本能の正しき教育結婚の自由等を主張するが、ボルシエヴイズムの專制主義には反抗する。最近には科學文化の未來を豫想しその必然性とその非人情性とに對して懷疑と厭世的見解とを抱いてゐる。

※　フロイド說

オーストリーの精神病學者フロイド Freud を祖とする所謂精神分析派の說である。卽ち彼が神經病者の病因を診斷する爲に用ひた「精神分析」に依つて潛在意識作用を研究し、夢・ヒステリー等を、抑壓せる性慾の變態的滿足に歸せしめ、他の日常生活の不可解なる心的作用をも同樣に說明せんとするものである。「精神分析」を說明すれば精神病患者とは無意識の中に抑壓されてゐる複合によつて病的に左右されてゐるものである、と見て表面的な意識を分析して隱れたる其複合を發見せんとし直接の對話、聯想法、夢の分析(夢判斷)等の方法を用ひるのである。

本著について

これは一九三一年出版された

"Scientific Outlook" 中の一章

"Science and Religion" の飜譯である。

近頃、多數の秀れた物理學者及び生物學者は次の樣な發表をした。卽ち科學の最近に於ける進步の數々には古い唯物論に反證を擧げ宗敎の眞理なる事を再確立する方向を取つてゐると云ふ發表である。科學者等のかゝる發表は槪して幾分實驗的で纏まらぬものであつたが、神學者がそれを捉へて發表させ一方新聞紙も亦神學者等の一層センセイショナルな說明を報道したので一般民衆は物理學が實質上舊約聖書第一卷の創世記全部を確認するものであると云ふ印象を持つに到つた。然し私としては、近代科學から引き出されるべき倫理は苟も一般大衆が斯く考へるに到つたやうなものであるとは考へない。第一に科學者達は彼等が語つたと考へられてゐる程多くは語つてないし、第二に彼等が傳統的な宗敎的信仰を保持する手段として言つた事は、愼重な科學的資格に於て言はれたといふよりは寧ろ美德と所有物とを護らんとする善良な市民の資格に於て言はれたのであるから。世界大戰及ロシヤ革命の結果臆病人は總て保守

的になり敎授連も資質上臆病になつてゐるのが普通である。然し斯る考慮は的を外れてゐる。では科學が眞に何を言はねばならぬかを吟味しよう。

(一) 自由意思——神學は、そのカトリツクの形式に於ては人間の自由意思を認めて來たのであるが、極く近頃に到る迄屢起る奇蹟を信ずる事によつてのみ納得出來る宇宙の自然法則に素直に對して來た。十八世紀に到つてニュートンの影響を受けて神學と自然法則との同盟は非常に緊密となるのである。其頃には神は神の御意に從つて世界を創造したもので、自然法則とはその具象であると考へられてゐた。そして十九世紀まで神學は依然として、嚴しく智的で確乎たるものであつた。然しながら此處百年の間に神學は無神論的論據の强襲に應ぜんとして、次第に一層情緖に訴へんとするやうになつた。卽ち人間を智的に弛緩せる氣分に陷さんとして試み、それ迄身につけてゐた窮屈なジャケツから餘裕ある化粧着に着換へる樣になつたのである。而して現在では根本主義者と少數のお偉くなつたカトリツクの神學者だけがその古い結構な因習を墨守してゐるだけである。そして他の宗敎的辯證者達は理性に訴へるよりは心に訴へ、又我々の感情といふものは、それに理性が追ひやられる結論の誤りである所以を知り得るものであると主張して、論理の鋭鋒を鈍くしようと努力してゐるのである。テンソン卿が高潔に、

されば怒れる人の如、心は
立上りて言ひぬ。「我感じたり」

と、言へるが如く現在、人の心は科學なかりせば依然として無關心で止つてゐたかも知れぬ、原子とか呼吸器系統とか又海膽成長其他の斯る題目について認識を持つてゐるのである。

近世に於て宗敎的辯證法に於ける最も顯著な發達といへば原子の運動について人が何も知つてゐない故に人の自由意思を救出せんとする企である。眼に見える程の大きさのある物体の運動を支配した力學の昔からの法則は斯る物体

に於ては非常に近似的に當はまるのであるが、原子には成立しないのである。況んや一個のエレクトロンやプロトンに關しては猶更當てはまらぬ事は勿論である。更に總ての点に於て原子の運動を支配する法則が有るものかどうか、又斯る原子の動きは一部分出鱈目であるかどうかと云ふ事は未だ全然知られてはゐないのである。然し大きな物体の運動を支配する法則は多數の出鱈目の運動の平均を表はしてゐるものである以上唯單に統計上の法則であるかも知れないと云ふ事は想像され得るのである。熱力學第二法則の如き或ものは統計上の法則なりと知られてゐる。而して他の法則も亦さうであるかも知れない。原子に於ては連續的に相互に併合し合はず小さな限定された細隙によつて隔てられた色々の狀態が有り得るのである。其故一つの原子は此等の一つの狀態から他の狀態へ跳ぶ事が出來る。而も異れる色々の跳躍があり得るのである。

然し現在の處ではどの場合に何んな跳躍が起るかを法定する法則は發見されてゐない故に原子は此の点に關しては、全然法則に從はず、類推に依つて、さうとも呼ぶべき「自由意思」を持つてゐると云ふ事が暗示される。エディントンは、彼の著書「物理的世界の性質」に於て此の可能性を大いに運用した。彼が考へるには明かに人は人の頭腦内の原子に或瞬間に可能なあれやこれやの轉移をやらせる事が出來るので、斯くして或種の制動作用によつて、原子の意思に從つて大規模な結果を造り出す事が出來るのであると。意思それ自身は自生のものであると彼は考へるのである。若し彼が間違つてゐないとすれば可成り大きな質量が關係してゐる時でさへも、物理的世界の過程は、物理學の法則によつては完全には前以て決められないのであつて、人間の自生的な意思によつて容易に變へられるものであるとするのである。

此の命題を吟味する前に私は所謂「不確定性の原理」について二三言費したい。此の原理は一九二七年ハイゼンベルグに依つて物理學に紹介されたもので其後國教派の牧師達によつて支持されて來たものであるが、その歡迎された

理由は思ふに、主としてその名稱による爲であらう。即ち彼等牧師等にとつては數學的法則の束縛から離脱させるべきものとして受入れられたのであらう。エディントンが此の原理の使用を奬勵してゐる事に私は些か驚いてゐる。不確定性の原理は次の樣に主張するのである。質点の位置及び運動量を正確には決定する事は不可能である、といふのは各々に於て幾分の誤差が有り二つの誤差の積は一定であると說くのである。換言すれば我々が「位置」を正確に決定すればするだけ增々不正確に「運動量」を決定する事になるのであり、又「運動量」を正確に決定すればするだけ「位置」が不正確になるのである。包含された餘分の誤差は勿論非常に小さいものである。繰返す樣だが、エディントンが自由意思の問題と合せて此の原理を用ひようとは驚くの外ない。といふのも此の原理は一向に自然の過程の不確定さを示す事にならないから。その原理は唯昔からの時間、空間といふ器械は如何なる場合にも他の見地から見て始めて知られる近代物理學の必要を充分には充たしてはゐないといふ事を示すだけである。空間と時間とは希臘人によつて案出されたもので、現世紀に到る迄人々の目的に驚く程に貢獻したものであつた。アインシュタインは彼が一種の中間物に名樣をつけた、あの「時空」の名によつて其等を置き換へた。そして二十年間はそれで充分役に立つたのであるが、然し近代の力學は全部一層根本的な再建が必要なる所以を明かにしたのである。不確定性の原理は單に此の再建の必要性を證明したに過ぎず、自然の過程を決定せんとする物理學の誤りなることを明かすものではない。

J. E. ターナーが指摘せる如く不確定性原理が今日迄用ひられて來たのは主として「確定された」といふ言葉に兩意があるからである。一つの意味に於て、量は計られる時に確定されると云ふ意味であり、他の意味に於ては、出來事は惹き起される時確定されるといふのである。而して不確定性原理なるものは測定に關係ある事であつて惹き起す、即ち因果關係には關はらないのである。質点の速度と位置は、それ等が精密には測定されぬといふ意味に於て此の原理では確定されないものとなる。此の事は測定するものが測定されるものに、物理的影響を與へる物理的過程である

といふ事實に當然歸結されてゐる、物理的一事實である。其故不確定性の原理の内には物理的事件は自然に惹起したものであると云ふ事を示すものは何一つとして存在しないのである。ターナーが言ふ如く、或る變化が、それが「確かめられる」と云ふ意味では確定されぬ故に「惹き起される」と云ふ全然別な意味に於ても確定されないものだと頑張つても、それは胡魔化しの謬見である。

さて話を原子と原子が持つと假定された自由意思に戻すとして、原子の運動の氣紛れなる事は未だ知られてゐないといふ事實を前以つて斷つておかねばならない。それ故原子運動が氣紛れなる事を知つてゐるとする事は誤りであり、又氣紛れでない事を知つてゐるとするのも亦誤謬である。極く近頃になつて科學は始めて原子が古い物理學の法則には從はぬ事を發見したので、物理學者の内には、早計に原子は全然法則に從はぬものであるといふ結論に飛躍したものがある。精神が頭腦に及ぼす効果についてのエディントンの議論は同じ題目についてのデカルトの說を想起させざるを得ない。デカルトは「活力」(vis viva) の不滅を知つてはゐたが運動量の不滅については知る處が無かつた。それ故彼は次の樣に、人は動物の氣分の方向を全部ではないが一部變更する事が出來ると考へた。然し彼の說が發表されて後間もなく運動量の不滅が發見せられるや、デカルトの見解は放棄されねばならなかつた。此の事實に類似してゐるがエディントンの意見も亦一に掛つて、個体原子の運動を規定する法則を何時發見するかも知れぬ、實驗物理學者に依存してゐるのである。故にほんの刹那的であるやも知れぬ、一片の無知の上に論理的、上構を建てる事は非常に向ふ見ずな事である。而も此の方法はその結果として人々に新發見が將來されないと云ふ風に考へさすが故に、總て必然的によくないのである。

加之、自由意思を信ずる事に反對する純粹な經驗的抗議がある。動物の行動及人間の動作を愼重な科學的觀察の下に置き得る場合では總てパヴロフの實驗の場合に示される樣に科學的法則なるものは、他の領域に於けると同樣發見

し得るものであるといふ事が分つたのである。成る程我々は全く人間の行動を豫言する事は出來ないが然し此の事は人間の仕組が複雜してゐるからであるとして、全く充分に說明される。而して充分に試驗して見るならば必ず誤りなる事が直ぐ分るあの全くの無規則性と云ふ假定を考へ出す事は決してやらないのである。

物理的世界に於ける氣紛れを望む人には私には、實際に此の世界が包含してゐるものを得損じた人の樣に思へるのである。自然の過程に關する氣紛れを望む人には私には、實際に此の世界が包含してゐるものを得損じた人の樣に思へるのである。自然の過程に關する推論は すべて因果的なものであり、若し自然が因果律に從はぬならば、總て斯る推論は失敗に歸しなければならぬ。その場合に於ては我々は我々の個人的經驗以外は何等知り得ないのである。實際嚴格に云へば、記憶は總て因果律に依るものなる故、我々は唯現在の瞬間に於ける自分の經驗を知り得るのみである。若し我々が他の人々の存在を推理し、或ひは我々自身の過去さへも推論する事が出來ぬならば、どうして又神を推論し、神學者が望む他のものを推論する事が出來ようか。因果律は眞理であるやも知れず又誤りであるかも知れぬ。然し自ら喜んで因果律を誤りとする假說を採らんとする人達は、自分自身の理論の紛糾せる所以を認識する事が出來ぬものである。彼は例へば、食物が滋養になり銀行が小切手を參加支拂するが如き、自分が便宜なりとする挑まれない因果律は總て之を保留し一方厄介なりとする因果律には總て反對するのが普通である。然しながら、斯く言ふものゝ之は餘りに無邪氣な手順である。

實際苟も原子の運動が法則に從はぬものだと考へる爲には何等の判然とした理由も存在しないのである。實驗による方法が、個体原子の運動に光明を與へ得るやうになつたのは、ほんの近頃の事であるから、原子運動の法則が未だ發見せられずとするも怪しむに足らない。又一つの現象が法則に從はぬものである事を證明する事は實質上にも理論上にも不可能なのである。それ故現在確言される事と言へば法則が若し假に存在するとしても未だ發見されてゐないと云ふ事である。若し言はんとするならば我々は次の樣に卽ち今迄原子を研究して來た人には非常に賢明であつたので

若し原子運動の法則が存在するならば必ずや發見したに違ひないと言うてもよいが、然し此れが宇宙の理論を載せ置き得る基礎の堅固な前提であるとは私は考へない。

（二）數學者としての神（エデイントン卿）は原子が數學の法則に從はぬといふ事實から宗教に說き及んでゐる。一方ジエームス・ジーンズ卿は原子が數學的法則に從ふといふ事實から宗教を演繹してゐる。此等二つの議論は科學で終始一貫せんとする要求は冷靜な理性に屬するものであつて我々のより深い宗教的感情に干涉してはならぬと考へてゐる多くの神學者等によつて等しく熱中して受け入れられて來た。

我々は今迄原子が跳躍するといふ方面からエデイントンの論據を檢討して來た。ではジーンズの論件を星が冷却するといふ方面から吟味しよう。Jean の神はプラトン的である。彼は生物學者でも工學者でもなく純粹の一數學者であつたといふ事である。(The Mysterius Universe p. 134) 私は實は仰々しい推論の結果考へられる神よりも、寧ろ此の形式の神を好むのである。然し此の事は慥に我が思索よりも活動を好むからである。此の事よりして筋肉彈力が神學に與へる影響を取扱ふ一論說が暗示される。卽ち筋肉の强健なる人は活動の神を信じ一方筋肉柔軟な人は思索と默想の神を信ずる事である。慥かにジエームス、ジーンズ卿は彼の有神論の立論に確信を持つてゐたが一方進化論者の立論をあまり稱讚しないのである。彼の Mysterius Universe「神秘なる宇宙」と題する著書は殆んど碑文とも言ふべき太陽の傳記で始まつてゐる。それは約十萬個の中で、たつた一つの星だけが遊星を持ち大凡十億年以前では太陽は他の星と出逢つて實を結ぶといふ幸福な運命を持つてゐて其結果現在の遊星の子孫が存在すると說く樣である。遊星を持つてゐない星は生命を生ぜしめる事は出來ない、其故生命は宇宙に於ては非常に稀有な現象にちがひないのである。ジーンズ卿は次の樣に云ふ。「宇宙が我々人間の樣に生命を創り出す樣に元來計畫され得たなんて事は信じ難い。若しさう計畫されたのならば慥に我々は仕組の雄大さと生產物の總額との間によりよき調和を見出し得ると期待

してもよかつたらう」と。そして宇宙の此の稀な地球に於てさへ生命の存し得るといふ可能性は氣候があまりに暑すぎたり餘りに寒過ぎたりするその暮間狂言の間に存し得るのみである。彼は更に語をついで、「一方では宇宙の物質の大部分が生命が存在しえない程熱くなつて依然としてその狀態が殘つてゐるのに人類が寒さの爲結局は死ぬ宿命にあるといふ事は我々人類にとつて悲劇である。」と云つた。恰も人間生活が創造の目的物であるかの如く說く神學者等は自分自身及人間一般を評價するに際して評價し過ぎてゐると同樣に彼等の天文學に於ても誤を犯してゐる樣に思はれる。私は此處にジーンズの近代物理學卽ち物質と輻射及び相對性とエーテルについての稱讚すべき數章を要約しようとしない。といふのも其等は既に出來得る限り約言されてゐるものであり、しかも此以上要約しても趣意に悖るからである。然しながら私は諸君の意慾を刺戟する爲にジーンズ教授自身の梗概を引用しよう。

「要約すれば表面に不規則さと波形をもつたシヤボン球が簡單で誰にも親しみのある物であるといふ流儀で相對性理論によつて知られた新宇宙の最良の代表である。宇宙はシヤボン玉の內部でなくて、その表面なのである。そして、一方に於てシヤボン球は唯二つのデイメンジョンを持つてゐるが、宇宙の球は四つのデイメンジョン卽ち空間と時間のデイメンジョンを持つてゐると云ふ事を我々は常に記憶しなければならぬ。而して此のシヤボン球が吹き出される物質卽ちシヤボンの薄皮は、鎔接されて空の時間となつた空の空間なのである。」

その著作の最後の章は此のシヤボン球は、神の數學的特性に於ける御意があるが故に數學的な神によつて吹き出されるといふ事を論じてゐるのである。此の部分は神學者等を喜ばせて來た。といふのも神學者等が小さな寬大な處置をも有難がるやうになつて來た故で、彼等は科學者が神を與へさへすればそれが何んな種類の神であらうとそんなには關心を持たぬのである。ジエームス・ジーンズ卿の神は、プラトンの神の如く算術の問題を解く情熱を有する神である。然し純粹な數學者であるから算術の問題がどんなものに關係しようと全く無關心である。多數の困難と近代物理

學を彼の論說に序言として書く事によつて、その著名な著者は他の場合では持つ事の出來ぬ一片の該博の氣味をその論說に與へようと遣り繰り算段した。本質に於てはその論說は左に述べる樣である。「二個の林檎と二個の林檎とを合せると四個の林檎になるから創造者、神は、二と二とを加へると四になる事を知つてゐたに違ひない、と言へる。然し一人の男と一人の女とは一緒になつて、往々三人になる故に、神は未だ人が望む程算術に通じてゐなかつたと反對されるかも知れない。眞面目に話すならばジェームス・ジーンズ卿は存在するものだけが考へられ、そして我々が外部の世界に於て觀察する外觀上の恒久不變性は神がそのものに全く長い間考へ續けてゐるといふ事實に依るものであると言つた事から判斷すれば明白にバークリ僧正の說に復歸してゐるのである。例へば物質的な對象物は神が常にそれ等を眺めてゐるから、否寧ろ常に神の御心の中で考へられてゐるから、人間が視てゐない時でも依然として存在するのである。彼が言ふに「宇宙は猶ほ非常に不完全で不適當ではあるが純粹思想卽ち、より廣い意味の言葉がないから、數學的思想家と言はねばならぬ者の思想より成立つてゐるとするならば最もよく表現されるのである。」と。然し少し後になつて、我々は神の考へを支配する法則は我々の日常現象を支配する法則であつて、明かに我々が夢に描くものでないといふ事がわかるのである。

此の議論は勿論ジェームス卿が議論に際し私情を含んでゐない事を要求した如き形式的正確さで始められてはゐない。その細部全体を除けば彼は純正數學及應用數學の兩者の領域を混同してゐる点で基本的な誤謬を犯してゐる。純正數學は全然觀察には依存してゐない。卽ち、それは符號を取扱つてをり符號の違つた集團も亦個々と同樣な內容を持つ事をも證明してゐる。此符號の特性の故に實驗の援も借りずに研究し得るのである。これに反し物理學は如何に數學的になつたとしても全般を通じて觀察と實驗に換言すれば感官知覺に依存するものである。數學者といふものは

あらゆる種類の數學を準備してゐるがしかし、その中の或部分のみしか物理學者には役立ちはしない。而も物理學者が數學を使用して明言する事柄は純正なる數學者が確言するものとは全然異つた性質の物である。それ故物理學者は自分が用ひてゐる數學的符號は感覺的印象を解釋し概括し豫說する爲に用ひられうると明言する。彼の仕事が如何に抽象的にならうとも物理學者の數學的符號と實驗との關係は決して失はれるものではない。數學上の諸公式は我々が觀察する世界を支配してゐる或種の法則を述べ現はしうるのである。ジーンズはこれ等の法則が行はれてゐるのを見る愉快さの爲に世界は數學者によつて創造されねばならぬと論じてゐる。若し彼が嘗てかゝる議論を正式に發表しようとした事があつたとしても其時彼はそれが如何に誤りであるかゞわかつた事だらうと信ぜざるを得ない。先づ第一に、兎に角世界はその本体が何であらうと充分な手練のある數學者によつて一般的法則の範圍內に齎されうる事はありさうに思はれる。若しこの事が事實であるとすれば近代物理學の數學的特性は世界に就いての事實ではなくして單に物理學者の手練に對する禮讃となるに過ぎない。第二に若し神が神の俠心ある勇士が考へる樣に純粹なる數學者だと假定しても神はその思想に粗野な外的存在性を與へようといふ願望は持たなかつたであらう。曲線を追跡し幾何學的なモデルをつくらうといふ希望は學校生徒の段階に屬するもので教授は「體面にかゝはる」ものとしてこれを考へる。しかしジェームス・ジーンズ卿が彼の造物主に轉嫁したものは、この希望であつた。彼は次の樣に言つてゐる。「世界は思想から構成され、かゝる思想の中には三つの段階があるやうに思はれる。卽ち神の思想と覺醒した人間の思想及び眠つてをり惡夢を見てゐる人間の思想である。而して神の思想はその最上であることは明白であるから後者の二種類の思想が宇宙の完全さに何を附け加へ足さうといふのか又かくも多くの間拔けをやりながら一体何が得られうるのかといふことを吾人は充分に理解は出來ない」と。私は或一人の非常に學識のあるしかも正統派の神學者と話した事がある。その男は長い間研究したお蔭で何故神が此世界をつくつたかといふ理由は別としてその他の事は何で

も理解する樣になつた、と私に語つた。私は此話にジェームス・ジーンズ卿が注意する樣に推薦したい、しかも私は近き將來に於て彼がそれをうまく處理してその神學者を宥めるだらうと期待してゐる。

（三）造物主としての神——

最近の科學に對抗してゐる最も由々しき難題の一つは宇宙の運行が止りつゝある樣に思はれるといふ事實から由來する難題である。例へば世界には放射能ある元素が存在する。これ等元素は絶えずより簡單な元素に崩壞しつゝあるが、これ等のものが作り上げられた過程は全く知られてゐない。しかしながらこの事は世界が運行を中止して行くといふ最も重大にして且困難なる点ではない。複雜な元素が一層簡單な元素から作り上げられた自然の過程に關しては我々は全く無知同然ではあるが我々はかゝる過程を心に描く事が出來るし、しかもかゝる過程が何處かで起りつゝあるといふ事も可能である。しかし熱力學第二法則に我々が至る時、我々は一層基本的な難題に遭遇するのである。

熱力學第二法則は概略に言へば、次の樣に述べてゐる。一体事物は勝手に變化して混亂狀態となり、彼等自身では再び整はないものであると。往昔は宇宙は全く整然たるもので萬物皆その處を得てゐたが、その時以來宇宙は次第に無秩序の狀態となり遂に効果の強い再出發に依る外はすべての物は初期の秩序に回復する事が出來ない樣に思へる。原形の熱力學第二法則は（遙かに）一般的性質とは緣の薄い事柄を確言してゐた。即ち二個の相隣れる物体間に溫度の差異がある時高溫なる物体は冷え低溫なる物体は溫度が上昇して遂に兩者は等溫度に至るといふ事である。此形式に於けるその法則は萬人に衆知の事實を述べてゐる。若し諸君が赤熱した火斗（ヒカキ）を持上げてをれば火斗は冷えてその周圍の空氣は暖まる。しかしその法則が遙かに一般的な內容を包含してゐる事がやがては理解されて來た。極めて高溫度の物体の細粒子は極めて高速度の運動をなし、非常に低溫度な物体の細粒子は遲く運動をするものである。結局は多くの高速度の細粒子と多くの緩漫な運動をする細粒子が同じ範圍內に存在する時には前者は後者に衝突して遂には

兩組が平均した同一速度を得るものである。同樣な眞理はエネルギーのあらゆる形式にも適應するのである。一範圍內に多量のエネルギーがありそれと相隣れる範圍內に殆んどエネルギーがない時には何時でもエネルギーは前者から後者へ移動せんとする傾向を示し、遂には同量の關係が確立される。この過程全体は民主主義への傾向としても述べられるかもしれない。此の過程は不可避な性質のものであり過去にあつてはエネルギーは現在よりも以上に不均齊に分配されてゐたに違ひないと思はれる。物質的な宇宙は今や有限のものと考へられ、しかもエレクトロンやプロトンの數は未知數ではあるがそれでゐて或る一定數から構成されてゐると考へられるといふ事實から見ると或る場所にはエネルギーの蓄積が可能であり他の場所ではその反對が可能であるといふ事に對しては或る理論的な限界がある。世界が辿り來つた進路を順次に遡つて追跡して行く時に我々は或る限界ある歲月を經た後に（しかしながらその歲月は四千年或はそれ以上で寧ろあるんだが）若しその當時も亦熱力學第二法則が有効であつたとすれば、如何なる他の時代にも先鞭をつけられない世界の或狀態に到達するのである。かゝる切期の世界狀態は恐らくエネルギーが最も不均齊に分配されてゐた狀態であつただらう。エデイントン氏はこれを次の樣に言つてゐる。

『無限の過去を考へるといふ難題はひどく困難である。我々が無限なる準備時代の、その相繼者であることは信ずべからざる事柄だ。如何なる瞬間にも先鞭をつけられぬ一瞬間が嘗て實在したといふ事は比較的信の置ける事柄である。

若し我々と無限の過去との間に存する他の壓倒的な難題のためにかゝる時間の始りに關する双關論法が閉出しをくはないならば恐く一層我々はそれに惱まされる事であらう。我々は宇宙の運行が停止しつゝある事を研究してゐる。

即ち若し我々の見解が正當であるならば時の始りと現代との間の何處かに我々は宇宙のゼンマイを卷く場所を定

め置かねばならぬ。

過去に遡つて行く際に我々は世界が一段一段と組織的になつて行く事を理解する。若し其處に我々の前進を阻止する城塞がなければもつと早く我々は世界のエネルギーが出鱈目な要素は何一つ含まずに完全に組織化されてゐるあの一瞬間に達せるに相違ない。現代の自然法則の体系下ではとにかくこれ以上に遡る事は不可能である。「完全に組織化される」といふ辭句は更に說明を要する辭句だとは私は考へない。我々が現在關係してゐる組織は正しく定義さるべきものであり、それが完全となるには或る限界があるものだ。高度にしかも益々高度に組織化され、無限に續く一連の狀態は存在せず、亦遲々としてゐるが結局は一歩一歩近づいて行くべき限界もないものだと思ふ。完全な組織は不完全な組織よりも損失から免れるやうに傾くわけのものでもない。

最近の七五年間を代表してゐる物理學の体系は宇宙の實体は高度に組織化した狀態の中でつくられたものか或ひは先在する實体が彼等が嘗て浪費して來たあの組織を賦與されたものであるか、何れか一方の年代を假定してゐることは全く疑ふ餘地がない。更にこの組織化は明かに機會の對照であり、偶發的には起り得ない性質のものである。

この事は餘りにも侵略的な物質主義に反對せんとするものゝ論據として久しきに亙つて用ひられて來た。又この事は今日まであまりに時代の經つてゐない昔の或時代に於ては創世主を解釋する際に於ける科學的證據として引用されて來た。しかし私は我々がこの事から何等かの性急な結論を引出す事を薦めはしない。科學者及び神學者は共に現代ではあらゆる熱力學の教科書中に見出される（適當に變裝された）質朴な神學的教義即ち幾十億年か以前に神は物質的宇宙のゼンマイを卷き、それ以後は宇宙を偶然に委ねるといふあの教義を幾分粗野なものと見做さねばならぬ。この事は信仰の宣言と云ふよりは寧ろ熱力學の活動的な假設と見做されるべきものである。それは

我々が何等の論理的な逃避、――その事が信ぜられないといふその障害物によつてのみ惱んでゐる――をも見る事が出來ない此等の結論の一部である。

たゞ私は科學者として事物の現在の秩序は急烈に出發し去るとは信じない。即ち非科學的方面では私は神の自然の中に包含された不連續性を受け入れることをも亦同樣に試みたくはない。さうは言ふものの私はかゝる停頓を回避すべき暗示は何も爲しえないのである。』

上の文章の中では Eddington は創世主（神）のなした天地創造の明瞭な所業を結論してはゐないと思はれる。彼が排斥した結論への科學的議論は自由意思を認めるのに味方する議論よりも遙かに一層强力である。といふのは我々が今考へてゐる後者の議論は知識に基礎を置くに屢して科學的議論は無知に基いてゐる。この事は次の事實を例證してゐる。即ち科學者により科學から引出された神學結論は唯彼等自身を喜ばす如きものに過ぎず議論してその結論が正當だとわかつても、所信の正しさに對する科學者達の食慾がのみ込むにも物足らぬ代物である。私が思ふに宇宙が無限に遠くは隔つてゐない或時代に始つたものであるとする見解に對しては、科學者が最近我々に承認するやうに勸めて來た他の神學的結論に對してよりも一層多くの論ずべき点が有る事を我々は認めねばならぬ。その見解は表示的な確實性を持つてはゐない。熱力學第二法則はあらゆる時間、場所には當てはまらぬものかも知れず、或は我々は宇宙と云ふものが空間的には限定されてゐると誤つて考へてゐるのかも知れない。斯る性質の問題に關する限りでは我々は世界は或る知られざる時代ではあるが、或は時代に始まつたと云ふ假定を暫く承認すべきであるから、熱力第二法則は穩當な見解である。

然し此の事から世界は神によつて、創られたと推論し得るであらうか。若し我々が正當なる科學的推論といふ法典を墨守すべきならば、確かに答は否である。宇宙が何故に自然的には始まるべきでなかつたかといふ理由は、宇宙が自

發的に始まるといふ事が奇妙に思へる故以外には何等の理由も存在してゐない。しかし我々に奇妙に見える事物は起つてはならないといふ事を決定する自然法則は無い。神を推論する事は（正當な理由）原因を推論する事であり、しかもその因果的な推論はそれ等が觀察された因果律から由來する時にのみ科學に於て承認さる可きものである。無からの創造は未だ觀察されない出來事である。それ故に世界は神によつて惹起されたと考へる理由は宇宙が自然に生じたとする方の理由と同じく優秀である。この兩者は共に我々が觀察しうる因果律を否認してゐる。

私の見た範圍では世界が神の手でつくられたといふ假定からは又何等特種の慰みも齎らされてはゐない。それが神の手で創られたにしろ又さうでなかつたにしろ宇宙の性質には變りはないのである。若し誰かが諸君に一杯の胸の惡くなるやうな酒を勸めてその酒が試驗所でつくられたもので葡萄の汁液でつくられてはゐないと相手が話しても、ほしいと云ふ氣が少しでも增すわけのものではなからう。同樣な風で私は此の極めて殺風景な宇宙が豫定の目的で創られたといふ假定からは何等の慰みも齎されないものだと考へる。

しかし或る人達――此の人達の內にはエディンヂンは含まれてはゐないが――は若し神が此世界をお創りになられたとするならば、世界の運行が完全に停止した時に再び神はゼンマイをお卷きになるだらうと考へて、心を慰めてゐる。私としては世界が無限に繰り返さるべきであるとする思想によつては殺風景な自然の運行が如何に、より殺風景でなくされ得るかとは考へない。しかしながら疑ひもなく、此の樣に考へないといふ事は私が宗教的情緒に缺けてゐるが爲である。

此見地に於ける眞に知的な議論といふものは一言で盡されるかもしれない。卽ち神は物理學の法則によつて證明されうるのか或ひは證明されえないのか？　である。若し證明されないものだとすれば如何なる因果律も神へは通じ得ないが故に神は物理學的現象からは推論されえないものであり若し證明されるものだとすれば我々は熱力學第二法則

を神にも適應して神も亦或る遠き時代に於て創造されねばならなかつたと想像するだらう。

しかし前者の場合には神は神の存在理由（raison dêtre）を失ふのである。奇妙な事に物理學者のみならず神學者さへもが近代の物理學に關する議論の中に或る新しい物を見出してゐるやうに思はれる。

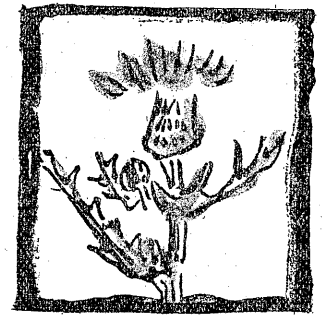
恐らく物理學者は殆んど神學の歷史を知つてゐるとは期待されてゐなかつた、しかし神學者は近代の議論がすべて昔の時代に於けるそれと好對照をなすものを得て來たといふ事は知るべきである。Eddington の自由意志や頭腦に就いての議論は我々の見る處では Descartes の議論と全く同方向のものであり Jeans の議論はプラトー Plato 及び Berkeley 兩者の混合物であつてしかもその議論が此等の哲學者の何れかが住んでゐた時代に於て得てゐたと同じ程度の保證を物理學に於て得てゐる。世界が時間的始まりを持たねばならぬと云ふ議論は Kant によつて極めて明白に示されてゐる。しかしながら Kant は同じ程度に力强い議論で世界は時間的な始まりをもつてゐなかつた事を證明する事を補足附加してゐる。我々の時代は新しい多數の發見や發明によつて、自惚れになつて來たが哲學の領域に於ては現に我々が想像する程には過去より進步して優れてはゐないのである。

我々は今日流行遲れの物質主義や、それに對する物理學の批難を耳にする。實際の所これまでに物理學の方法には變化があつた。昔時に於ては例へ哲學者が何と言はうとも物理學は型式上物質は堅い小さな塊より成ると云ふ假定の上を進んで來た。現今に於ては最早さうではない。然し Democritus の時代より後の時代に於て堅き小さい塊の存在を信ずる哲學者は殆んど居なかつた、Berkeley、Hume は確かに其事を信じなかつたし又 Leibniz、Kant 及び Hegel に於ても同樣である。Mach は彼自身は物理學者であつたが完全に異れる說を唱へて居た又幾分哲學的臭味を持てる科學者はすべて進んで此の堅き小さな塊は技術上の工夫に過ぎない事を認めんとして居つた。此の意味に於

ては物質主義は死んで居るが他の更に一層重要なる意味では物質主義は以前よりももつと生氣に滿ちてゐるのである。物質は堅き小さな塊か或は又他の何物かから成るかどうかと云ふ事が重要な問題ではなくて自然の進行は物理學の法則に依つて決定せられるかどうかが重要なる問題なのである。

生物學、生理學或は又心理學の發展はすべての自然現象が物理學の法則に支配されると云ふ事を以前より一層尤もらしきものにしたが此の事が眞に重要なる点なのである。

然しながら我々は此の点を證明する爲に生命の科學を取り扱つた人々の二三の斷言について考へなければならない。



短歌

秋鳥の群

廣瀬治郎

黄葉に秋風渡る雜木山寂しきものゝ宿ると思ふも

秋鳥の群飛び去りし楢林靜寂の中に我息づけり

疊はる群山皆は黄葉せり山しん〳〵と秋深きかも

山道に獨活の花白く咲きてあり我寂しさを肯ひて過ぐ

朝まだき嵐は過ぎて我が庭の鷄頭の葉の亂れつゝ赤し

秋深き靜寂の中に谷川の光寂しく流れ去り行く

死にし君の寫眞に供ふ初葡萄青々しきが悲しかりけり

秋草の茂れる中の墓の列君が在せる墓は寂しも

秋深み畑の葡萄はここだくも實は熟れたれど君は在さず

日暮には葡萄畑に秋風の止むときなしに悲しかりけり
冬近き荒磯に立ちて辛痛しや我がまなかひに立ち來る君はも
死に近き君は臥床に冬の日の海邊を戀ふと言ひにけらずや

榛名山偶居

小川常人

見遙かす山並の間ゆおぼどかに眞白夏雲の湧き出でにけり
桃二つ朱塗の盆にのせて來し老婆も日毎の暑さを言ひぬ
杉生ふる峠路まだし明け切らず流るゝ霧とともに越え來ぬ
谷一つ向ふは霧れる杉木立明けゆく山は靜かなるかも
檐端さへ見えず霧りたる山深き朝の宿場に乘合着きぬ
二三日陽氣涼しと思ひしに山の宿場は霧立ち込めぬ
午過の夕立あがりわが窓に吹き入る霧の白々と見ゆ
寒き日は爐端にひとり坐り居て芋の煮ゆるを見てゐたりけり

木場先生

乘合の客みな木場先生を葬らひにいゆく人なり心和みつ

秋雨

安田道夫

秋雨のそぼふる夕はらからとそら豆を喰ふ語ひもせず
海人の歌を讀みつゝ歌詠むは作るにあらず生むと思ひぬ
附添ひの老いたる女倦み果てゝ空襲を語り秋の日暮れぬ
混沌の世は身をすてゝ大君に仕へ果てなむ秋のますみに（新体制）

十一月六日富山縣西礪波郡北蟹谷村西敎寺にて故木場敎授を荼毘に附す

二十日前ともに來りし山里の秋の深みに君を葬りぬ
腐りたる栗毬の敷くこの寺に靜ねむりにて歸りましけり
語りたき事一つあり吾が君は還りまさぬに拜がみまつる

感慨一束

由良陽太郎

（一）犬丸敎授惜別

あが妻は寡歌好むとのたまひし君は今はも金澤になし
春なるを妻を喪ひ時もあらず四高を去るとのたまひし君
拍手して送りしラストレクチュアの君の眼に涙ありしを

（二）旅に拾へる

湯河原は雨に暮れたり梢打つ滴に遠き將來を想ふ（湯河原）
夏なるを冷き雨の落ち居たり湯河原吾れ獨り山を見擧ぐる（湯河原）
夜の海の猛り立つ浪に湯の町の灯映ると見るに早や碎けたり（熱海）

（三）雜　詠

臺所町の下宿の傍に牧場の有り秋雨に鳴く牛は悲しも
廿歳かも今日乾坤に秋晴れて吾が行く道のかくてこそなむ

（四）紀元二千六百年之秋

あな尊と吾も「御民」と生まれ來て今日の榮光に「萬歳」を叫ぶ

儀我壯一郎

映畫館を出でし瞳に白々と廢墟の如き夕暮の街
一すぢの良き意志に生くる人に會ひ大陸の朝に希望蘇るゝ

戀ふる日

和田清彦

もの戀しく思へどあやしためらひて今日も一日部室にこもれり

歸省日を思ひて我れゆたかなる小川の流れに影を映しぬ

故木場教授を悼ひて

うつし世に殘し給へる講義をばおろかにきゝし我れ羞らうも
み佛と變りし師をば偲びつゝノートの亂れ字改めにけり

四高生活三年間懷古

中村峻

時習寮の午後

茜射す入日のどけく背に受けてたゆたふ紫煙に暫時見入りぬ

祖母死去の報を得て

北國に生れし吾が祖母はこの吹雪の日に奇しくも逝く
祖母死去の電報を手に我や今吹雪の中を心のみせく

下宿生活某日

しづしづと桐の葉ぬらす朝しぐれ今日の休みを空に眺む

兄の出征を送りて

ひたむきの兄の氣性に似たるなり肩に輝く昭和の軍刀は
時計止りて一入しげし懸桶水この夜半に雨來るらし

時雨

三好廉

時雨して繩なふ音の聞え來るわらやののきに獨り稚子立つ
小夜ふけてふみにつかれて床に入れば秋雨の音一しほとさゆ

砂丘

神田郁夫

遠白く秋の潮は流れたれその日砂丘に我は來て居り
向ひ立つ丘のかげりはゆるやかに傾斜に沿ひて下らんとする
新しき足跡を見出でてしばらくは追ひて見れども人には會はず
こゝにしてねむの若木に白々と風が渡るを我は見て居り

梧桐

安嶋彌

春雨のうちけぶりつゝ梧桐に白き滴となりて垂れ居り
汗にじむ蒸暑き日の夕かな夾竹桃の花は動かず

斷想

小橋靖

スクリーンを銃劍鐵兜行き征きぬドイツの兵等猛くもあるか
ほの紅くめぐる走馬燈童らに賣る老翁あり街の黄昏
武藏野を汽車走りつゝ夜は明けぬ田の中の農家蚊帳釣りしまゝ
教會の十字架の上に陽は淡し暮れんとすなる夏の街はも

白山に登りて

山形利一郎

天峻る白山の峰は明けそめておのも〳〵の谷に雲這ふ
アルプスは雲海の上に峻り立ち渡らまほしと友は言ひにき

切支丹信徒

宮川浩

きりしたん信徒となりて霧雨のそぼふる街をゆるく歩みぬ
母一人其子に離れて庭隅の銀杏散る宵何思ひ給ふ
故郷に今は在さねば鶏頭の燃え出る毎に祖母し思ほゆ

夕月夜空に溢れて方十里砂丘の面に風吹き渡る

秋の嵐

石上晃

甲高く百舌鳥は叫びて朝明けぬオレンヂの杜に霧深き所
嵐ありぬしとどに濡れし落葉林光ほのかに栗を拾ひつ

庄川にて

池保

きらゝかに山紅葉しぬ吹く風の冷々として空澄み渡る
山肌は尾花の白し紅葉肩に勇み行く子の見え隠れして
我が汽車の傾くまゝに書物おきてふと見出でたる雪の立山

朝の峠

沖谷一男

朝露を踏みわけて行く峠路に晩秋を鳴く蟋蟀の聲
濃き薄き夕暮八峰に入日さし遠き木梢の浮出づる見ゆ

鈴懸

宮地知男

病みて臥す我が枕邊に匂ひ來る鈴懸の花粉は期満ちにけり
梅雨逃げの大空青み鈴懸の濶き葉かげに暑さ蒸れわく
大いなる回轉のやがて來る如し歐洲に戰のあるてふこの空
遲植ゑの大輪朝顔花咲かず肥料強くしてか葉のみ硬はし

切子燈籠

橘正明

脚腰のいたむといひて二階には上らず歸る祖母老いにけり
押せどならぬ鍵もありしが幼稚園の古きオルガンいかになりけむ
君死なば我が苦しみのいくばくは減らむと思ふ一時もあり
野田山の靜けさの中のつり捨てし切子燈籠は雨にぬれをり
魚屋の俎板の上のはらわたに金蠅群れて夏盛りなり

旅

立野達郎

故郷の人となのりてきし男心ひろげて話盡きせず（岩見澤にて）

夕映にひたゆく汽車の影を追ひしばし走れる馬のありたり（石狩にて）

秋

はだらにも山の木立の色づきて町吹く風は足に冷し

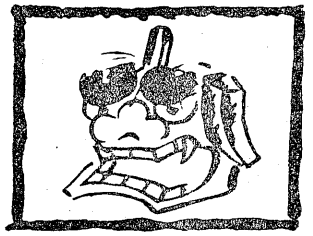
はるかなる山の綠もほうけきて秋やゝ動く今日のかはたれ

長雨の晴上りたる秋空に銀杏の黃色いたく目に泌む

肌寒き山蔭道に割きすてし栗のいが多く秋は闌けたり

秋深き砂丘の蔭にはつかなる花を延べたる草のありしも

秋晴れをたどりつきたる村里は今豐年の秋祭りなり



俳句

秋冬の間

目崎德衛

病懶に熟(うれ)無花果は青くさき

白菊や夢に亂るゝ日々の朝

入日寒く少女のテニス緩やかに

夕燒け消え煖かき冬の家となる

汽車寒し哀しき歌を我知り度し

吐息白々月に對ひて吐きて去る

火事の鐘消え見慣れたる月に對す

斷片

澤木欣一

橿原神宮

虹捧げ松ケ枝垂るる砂眞白

金剛山四句

岩灼くる光の底に蛇ゆけり

一木づゝ夕燒け終る天の松

驟雨來て瑠璃岩盤に萩散りぬ

殘照の海見ゆるところ林檎熟れ

松江小泉八雲舊居

秋霖やヘルン愛顧の櫛の雲脂

柘榴實となりしか歸省の旅了る

灯蛾に孤り高校生活かくて半ば

嶺拓く學徒に稲田聚れり

誕生日秋蟬放ち露地の暗

かにかくに柿買ひ戻り誕生日

梨賣りの頰照らし過ぐ市電の燈

芭蕉忌や時雨のひまの機銃音

おびたゞしき靴跡雪に印し征けり

アルバイト

儀我壯一郎

日に焦けし肩くらべつゝ憩ひ居り

友も微笑みぬ蕎麥の花々白うして

市川定三

獨り道驚鳴く梢無月かな

木下圭紹

芭蕉忌

時雨るるや崖下寒し石蕗の花

父來澤・湯涌溫泉にて

秋の風裸身の父子笑み合へる

焦躁の果て默として炭火つぐ

柴擔ふ樵夫に冬の日ざしかな

泉健三

伊豆大島にて

靜かなる朝の椿路牛鳴ける
水寒く鮴のからだの透き通る
蜻蛉の翳つめたき河床登りゆく

木枯　青園謙三郎

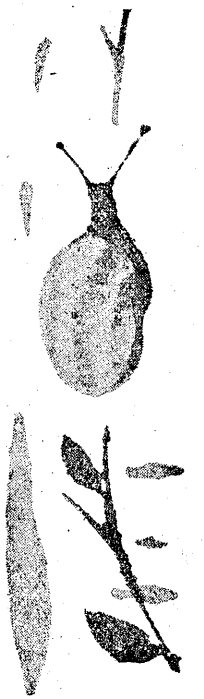
汽車來しと走れる子等に秋寒し
白旗の時雨に濡れて踏切番
終列車木枯歩廊吹き拔ける

西本長

熟れ柿の影白壁に夕陽映え
子等よせてねろりによれば火影さす
堂の影おとして寒きつはの花

桔梗　高畠平

桔梗搖いで馬も咳をして居る
馬どちさゝやく陽の香りなり
刈り取つた牧草の上にながゝと寢て空
啄木碑に夕陽映えて小犬ゆまりしをり
濟みました夕暮の手術室に藪蚊が一匹
古里からの荷からふと出た虫と破れた疊と



詩

滅亡の詩

石上晃

今まで俺には月が兎に見えてゐた。海は微笑んでゐるやうにも思へた。そして岸と波のたはむれも、そよ風のささやきもハツキリと聞きとれたのだ。「紅い空氣と青い空氣」や「夜の哄笑」も決して誇張でも修飾でも象徴でもなく、俺の眼に俺の耳にハツキリと寫つて眞實であつたのだ。

今宵豪雨の街を俺はさまよふ。俺の肩に、顔に、脊中に、雨は横なぐり、又斜めに叩きつける。風は荒れ狂ひ雷鳴は天地をつんざく、そして雲が斷れた時、あ、月は丸かつた。風はヒヨーヒヨーといふ音に過ぎなかつた。柳は岸邊に、月影は水の面に、依然としてあり乍ら、森羅萬象何の變りもないまゝに、ふくれあがつてゐた風船玉が急にペシヤンコにしぼんでしまつたやうに、あ、俺はしみじみと哀しくなつた。

野に、森に、大空に、色彩に音樂に、蟲類に、草花に、人間に、それらメール（おとぎばなし）ヘンの森羅萬象に、俺は今哀しきほゝゑみを投げかける。最後のアディューを呼ぶ、がそこにはエコーのニンフもなく、八百萬の神々の哄笑もなく、幻想は徒にさまよひ、冴え返る秋の中を空しくおびえて、俺のふところへ逃げ歸つてくるばかり。唯、駸々乎のREALが立ちはだかり、飄々乎のFATEが風に嘯（うそぶ）き、たちまちにして、あゝ、淡く日輪はかげろふ。

俺はもうハツキリとは言へないだらう、俺はもう詩を書かないだらう、俺はもう喜ぶことはあるまい、悲しむこともないのと同じやうに。

俺の口は塞がれ、俺の耳は掩はれ、俺の眼は盲ひた。鼻も舌ももう役には立ちさうもなく、あ、かうして俺の心は潰滅し去つた。潰滅し去つた……　そして哲學者なんかが云つてゐる。「詩は亡びる」と……

（十五・九・二八）

月影の流れてゐる此の町には

月影の流れてゐる此の町には、見知らない人ばかりが住んでゐて、どこへ行つてしまつたのだらう、それらの季節……。

いつも熱心に議論して、いつも深く考へて……。

テニスコートや薔薇を愛した青年……。

私はたゞ青い空氣にファンタムを描き、そして消すばかり……。
昔々……　又一頁
そしてその頃……又一頁……。

（十五・十一・九）

青いボタンのマントを着て

遠い春の夢は忘れられてしまひ——
私達の肩にハラハラと花びらが散りかゝつた、夢中になつて讀んでゐるのは觀念の世界、サクラの花びらになつて散る春の宵。
さういふ風にして私達は長い眠から覺め　憎み合ひ乍ら——實ははづかしいので別れて行つた。さうしてお互ひに微笑を交す。
夢みるひとみ……。さくらの花びらがハラハラと散る。

（二六〇〇・十一・十三）

車窓を駈けるものに

高島順吾

角目のすれた、柔い七月の底に、

死魚の瞳のやう、綠を散らせ、綠を戀ふ沿線の、村むらが、ほろ〳〵と、刻み目なき絃を横たへて、流れてゆく。
葦笛の韻律の、今に村を漂ふ筈もないが、
秋。鎌の鋭角を光る劫初の土塊に、
古老の傳說が、甦へるといふ。——
黝んだ歷史を、水澐に朽ちた旗にもつ人たちは、
時に、運べない、因習に貼られた、藁葺の勞働者でもあるが、
（泣いてゐるのか）（笑つてゐるのか）
神話を、爐邊に、話込む彼らは。

煮沸せる、水族館。
透明な手から昇る、赤い煙。
ベルトの意慾に、反語が疲れたか？

鐵車を、神々の肉骸が、駈けて消える。
鐵車を、神々の肉骸が、駈けて消える。
「神々の苦笑と茂つた肌は……。」

散歩

白い腹が枯れた畫に吊懸る。
微風の心地よさ。それは火葬場。

きづついた兵の足取りは新舊の蝸牛。
——又碎けた星たちの涙の搾取機。

僕の黑服に僕の肉体が流れてゐて。
亂れた光りと一緒に活版の闇を彷徨してゐる。

市祭と霎

a(一)インク壺に市祭が踊り出した。
b(一)赤と青のインクが引力的冷笑と挨拶してゐる儀禮が約三十分もつゞく。(それは今日もそのまゝの姿勢)
c(一)學園の小春日の窓及び科學兵器から茜色の雲が食氣を二ツ三ツ怖れ乍ら投下する。
——統制されたステッキが黑板から逃亡を企てゝ白墨に叱られてゐたつけ——
d(一)橄欖の若葉に東洋の日が照る。瞬間歴史が一駒ずれたがたちまち例の寄生虫が肛門に駈け込んで暗轉。その間忠靈塔が處々に建てられてゐる。

e(一)蠶の蠕動運動は實に逞しい。市民諸君！ 美しくないですか。
あゝ！ 足下が墜ちる、蓮華の莖の眺めるフットボールには氷海にゐながらの瞳を閉ぢる鯨体の幻が踞む。

夜

儀我壯一郎

滑稽は存在できない……
ひとり 憤りつゝ
重い意識を巷に曳きずり
嚴しい羞恥を己れに感じ。
地の蟲共の
生溫い低劣さ
今、水のやうな秋は
星から下りて來る。

スケッチ

倉橋克

山の盥に
もく〳〵と出來たシャボンの泡。

ぷうつと吹いたら
小さい泡の塊が二つ三つ
水素の多い空に飛んで行つた。

コバルトの結晶が午後五時頃の空に
ぽつかり浮んで
秋の小川に流してゐた。
川べりの草は原色のまゝで……。

黒檀の板が西の空から滑つてきた。
黒い木目を見せながら……
街の灯は
さら〳〵落ちる塵埃を映してゐた。

二十日の月はまだ昇らない
空は灰汁で一杯だ。
拍子木の音と一緒に幕が開くのかしら、
そしたら、黄金を塗つた樟腦が
汚物をぐつと押しやるだらう。

長庚の沒落

市川定三

贈畏友林亜庭君

四月の後——星座の革命は來た
北緯零度の下をはげしく渦卷くエーテルの氣流の中で
百尺の竿頭は今限りない動搖を續けてゐる。

牧里の牧歌は地底に埋れ
「眞理の秘府の燈」は貌の餌にすぎなかつた
辨證法と永劫回歸は最早戰意を失つた。

星は碎けた
日輪は上つた
あゝ長庚の沒落。
百尺の竿頭は今限りない動搖を續けてゐる。

劫火

銀河を焦がす惑星の劫火

成・住・懐・空――十二宮の風車
人馬も行け　處女も行け
獅子も行け　牛も行け
裸漢の亂舞　狂熱の咆哮
亂舞　咆哮　亂舞……。

幻惑の怪鳥は大腦を奪つた
逆廻轉する文字板の上で如意の寶珠が涙のXを追つてゐる
大乘の法門は地平を彷徨し
五龍の嵐は八寒八熱に喘ぐ。

形象の創造――咄
如是因・如是報・如是相
還元の煩悶は昇天の一線を劃して
對象の轉換を要求してゐる。

燃えろ劫火　もつともつと

我が詩

森口徹彌

――春の夜――
何處かで寂かなピアノの音
淨らかな愛の囁き　甘き戀のかず〳〵
白銀の月の光は……
寂けき小川そが中をかけめぐる
かげよ――
――汝知るや明日が事共――。

（一九四〇）

ふるさとのうた

満島俊次

湖岸逍遙

水青み
波しづか
朝曉や

うすむらさきや。

松並木
羽衣のごと
きえゆく乙女
たけいろの薄ぎぬのすそ。

ためらひて、春の風吹く
凪ぎし日は波の間に
美しき女神笑むとや
遠き日のゆめ物語。

あさぎりに
陽ざし和らぐ
波の音は
春を呼ぶむかしのうた。

波間に白帆

白帆きらめく
あゆみよる汀はるけく
影はきらめく。

うすべにの貝のひとひら
手にとれば
いとけなき日の
うすべにの貝の思ひ出。

うすもやにひとりしづか
夕映えや
砂ふめる足音のみ
碎け散る波に應ふを。

夕すゞみ盆をどり
とうろう流せし
赤きなみ
いま、いづこ。

夕暮

吉友睦彦

人を拂つた公園
どんよりうるんで暮色を待つ

風景

水落進

くつきりと映えた絲の輪廓——
絹糸の風が虹の亂反射の中に漂ひ、
遠い夢　近い花
ひばりと共に私の心は
峠へ!!
其處で私は此のチューリップを喰べよう。

けむり

ギヨーム・アポリネール
山本周三・石上晃共譯

地球を血塗る戰爭の一時(ヒトトキ)

私は赤十字の旗のもとに香を上げる
そ
し
て
私
は
煙草をすふ……

戰場に

地上かすかに咲いてゐる花は思ひ出したやうにお前の帽子も被らないでゐる腕から立上るけむりの輪をみつめてゐる。
然し私は香へる洞穴　いこひの園
あの紫のけむりの赴く所をも知つてゐる。夜よりも靜かに黎明よりも澄み切つた所、お前は愛に疲れた神樣のやうに横たはる。
お前はそれらの焰を魅惑し
彼女等はお前の足下にひざまづく
これら　放逸の女達
それはお前の紙のキレツパシ——

——大戰と平和の詩集
「カリグラム」より——

アポリネールについては別段紹介する必要もなからう。現代詩のあらゆる形態の源が彼に見出されると云はれる。「カリグラム」はその中でも特に重要な詩集。

*

小説

もう一度

ジョン・ゴールズワァジィー作
伊東章譯

赤ン坊がチッチャな足で跳ねるのに目を醒まされて、彼女は胸の上でその手足を伸してやり、寢そべつたまゝじつと汚れた天井を見上げてゐた。三月の朝の東雲の日差しが、下半分にモスリンのボロ切れ一枚だけしか掛つてゐない窓越しに、薄白い光を此の小さな室に擴げてゐた。この通りの小つぽけな裏側の室の御多分に洩れず、「希望」に見棄てられた部屋だつた。その中には、圓い褐色の柳籃の中に、仕入れた菫菜の殘りがある外は、何一つ、美しいものも、金目のあるものも無かつた。

母親の胸と腕の溫もりに機嫌を好くして、赤ン坊はうぶ毛に覆はれたチッチャな頭を彼女の頸のくぼみにつつこむやうにしながら、再び寢入つてゐた。丁度その頭の上にある母親の顏は、小形のスフインクスのやうだつた。

二日前に夫は、歸つては來ないぞと云ひ殘して、家から出て行つて了つたのだ、が、これには彼女は狼狽しなかつた。といふのは若くして苦勞し始める人特有の不思議な分別で、彼女はとつくの昔に、夫がゐる場合とゐない場合の自分の暮し向きをちやんと秤に掛けてあつたからだ。彼女は、夫婦共稼ぎの花賣りの職業で、夫よりも儲けが多かつた。それは、「洒落男」が時折、恐らくは彼女の疲れた氣な、美しい顏と、赤ン坊の重さで横に曲げられた若い姿態を見てほろりとなつて、法外な金を與へて呉れたからだ。全く、亭主が女房からふんだくる金の方が、女房が亭主からふんだくるのよりも多かつた。それに彼は、前にも二度、こんな風に出て行つて、その二度とも歸つて來たのだ。彼女の胸の中のもやもやは、又別な發見のせゐだつた。昨晩、死んだやうに疲れて家に歸る途中、彼女は或る女の腰に腕をまとひつかせてゐる夫の姿を、乘合バスの中に見掛けたのだ。それを見た途端、かツと熱いものが身内に湧き起つた。荷厄介な赤ン坊と籃に惱まされながら、彼女はバスを追つかけてみた、がバスの速度が早過ぎて、直きに後に取殘されて了つたのだつた。——かうして長い間、爐の上に背中をまるくして、彼女はあの外の女と一緒にゐた夫の姿を瞼にちらつかせながらじつとしてゐた。それから火が消えて了つてから、寢床に入り、寒さに震へながら、未だあの時の姿が瞼にちらつき、あの時の物音が耳に聞えるやうな氣持で、まんじりともせず横になつてゐた。——ぢやアあの人ッたら、あんな所へ行つたんだわ！　あたしとしてもこれ以上腹をさすつて行けるかしら？かうして彼女は思案の中でさへも、行過ぎを一切つゝしみ、むつつりと、スフインクスのやうにスーツとして、あれこれと考へながら、横になつてゐた。

部屋が明るくなつた、彼女は起き上つて、小さいひゞの入つた鏡の所へ行き、長い間自分の顏を眺めてみた。若し彼女に自分が美しいと思つた時代があつたにしても、時には打擲もされ、年から年中着るものも錄々なく、多少とも金に困つて、この子供ッ氣の拔けない亭主と一緒に暮した生活は、彼女からこの思ひを奪ひ去つて了つてゐた。——

あの人が腕で腰を抱いてゐるのを見たあの女は、榮養が良ささうで、帽子に羽毛飾を付けてゐたつけ。——すると彼女は、その鏡の中に、あの女の丸々した頰とあの羽毛飾に匹敵できるやうなものを何か見出さうと必死に努めてみた。しかし彼女の顏はわれながら目玉だけぎよろついてゐるやうに見え、頰には色艶がなかつた。我れとわが目にも陰氣くさい顏だつた。あまり嬉しくもない、その鏡から顏をそ向けて、彼女は火をたきつけ、赤ン坊を抱き上げて、乳をやるために腰を下ろした。素足を焰に向け、自分に凭れかゝつてゐる赤ン坊の動きを感じながら、彼女はあの乘合バスが通りすぎて以來始めて溫い心地になつた。何か嫉妬心を和げてくれさうな事を思ひ出さうと、懸命に、しかし無意識の中に努めてゐる彼女に、殆んど快いばかりの思ひ出が一つ訪れた。——昨晩、一人の「洒落者」の旦那さんが、自宅の庭の門に這入りながら、一束の菫菜を半クラウンで買つてくれたつけ。なぜあの方はにつこりして、半クラウンも下さつたのかしら？——赤ン坊が一度吸ふ毎に、溫い心地は强まつてゆき、興奮した感情がそれと混り始めた。——あの方があたしを美しいとお思ひになつたんでなければア、あんなに長くあたしを御覽なさりはしなかつた筈だわ、につこりともなさらなかつた筈だわ！——併しいきなり赤ン坊の唇が動かなくなつた。興奮した氣持は消え去つた。その小さな兒を肩掛布にくるんで、彼女は再び寢床の上に寢かせた。それから少しばかり湯を沸し、いつになく叮嚀に顏を洗ひ始めた。彼女は自分を、帽子に羽毛飾のついてゐた女よりも美しくしたくて、どうにもかうにも堪らなかつた。——よしんばあの女は着物を質に入れる必要がないにしても、あんな女なんぞにつこり笑顏をしてくれるやうな、「洒落男」が一人だつてあるものか。——物思ひで凍え、嫉妬で燃え立つてゐる、彼女の小さな頭は、着物のことであれこれと思ひ惱んだ。壁に打込まれた二本の釘に、彼女の衣裳の全部——擦り切れたスカート、破れたメリヤス襯衣、それに黑い麥稈帽——が掛つてゐた。彼女は一枚しかない下着をきて、その方へ行つた。それらのくすんだ衣類を見て、彼女はおぼろげながら物事の皮肉さに氣が付いた。三週間まへのこと、彼女は雨に逢つて臺無

しになつた、その賣り花を新しいのと取換へてやるために、自分の持つてゐる一張羅の着物を、六ペンス・四シリングで「曲げ」たのだつた。自分の魅力を質に入れて、夫にあの女を追駈ける機會をわざ〳〵與へてやつたやうなものだつた！　自分の金を仕舞つてある秘密の場所から、彼女はそこにある澤山の質札の中の一枚を選んで、齒に銜えた、それからボロ切れの下にして、金をしまつてある破れ茶碗から、「洒落男」が吳れた半クラウンと五ペニーとを取り出した。これが彼女の持ち金の全部で、しかも一週間分の間代が借りになつてゐる。彼女は部屋を見廻してみた。彼女の毛布は質に入つてゐるし、肩掛布の外にはなにも殘つてゐない。それは質草にして十八ペンスになる、厚手の肩掛布だ。利子の三ペンスを加へると、着物を受け出すにはもう四ペンス要るわけだ。彼女は花籃の所へ行つて、その汚れた麻布を手に取つて見た。花束は凋んで了つてゐる。昨夜、むか〳〵して心が亂れたあまり、水をやつて置くことを忘れてゐたのだ。彼女は寢臺に腰を下ろした。そして象牙色の丸顏に、黑い眼、眞直な眉をして、赤い唇を閉ぢてゐる彼女は、いつも以上にも小形のスフインクスのやうな感じで、まる十五分間もそこにじつとしてゐた。不意に彼女は立ち上り、下衣を脫いで、それを調べて見た。穴一つないのだ！それをしつかりと肩掛布にくるんで、彼女はスカートとメリヤス襯衣を着け、帽子をピンで黑髮に止め、質札とお金を手にして、汚れた階段を下り、寒い戶外に出て行つた。

彼女は、自分の世界の中心である、例の小さな店に足を向けた。たつた今しがた店が開かれたばつかりで、中には誰も居なかつた。それで彼女は、無數の物品の中でヌーツとして待つてゐた。――その品物の一つ〳〵は、人間の命の織物にくるまれてこの店先に運ばれて來たものだつたらう。店の主人は直きに內側の戶の硝子越しに彼女を見付けた。彼は淺黑い、强さうな男で、一種媚びるやうな冷酷さを湛へた、すばしツこい眼は、すぐに彼女の肩掛布をとらへた。「前にも預つたことがありましたね、十八ペンスでしたかね？」その肩掛布の中から彼は下衣を取り出した。

彼は鋭い目でそれを見た。それは極く粗末で、厚く、ひだ一つ無かつた。けれどもをかしなほど新しかつた。「それは六ペンス、洗濯代に半ペニー引いときますよ」それから、宛もかういつた取引の性質上、何かにほろりとさせられたかのやうに、「洗濯代は負けときませう。」と附け加へた。彼女はお金と質札とを持つて、小さな、ざら〳〵した手を彼の方へ、だまつたまゝ差出した。彼はその兩方を穴の明くほど眺めてから云つた。「成程、差し引き二ペンスの借りですね」その二ペンスと着物とを持つて、彼女は家に歸つた。溫くするためと、あの女が丸々した頰をしてゐたからといふ氣持で、スカートとメリヤス襯衣の上にその着物を重ねた。髮を撫でつけ、寒さのために鳥肌になつた顏を擦りながら、數分間立つてゐた。それから赤ン坊を一階の女に預けて、彼女は例の乘合バスが通つて行つた道の方へ出掛けた。彼女の心はあの女に逢つて、女と、とり分け亭主に復讐してやりたいといふ一念で燃えてゐた。午前中一杯、彼女はあちらこちら歩き廻つた。時折り彼女を呼び止めて、話し掛けようとする若者があつた、が直きに、まるで彼女の顏には何かしらこちらの折角の好意をしぼませるやうなものがあるみたいで、やめて了つた。彼女は二ペンスでソーセジ卷を買ひ、それを食べて家に歸り、赤ン坊に乳をやつて、それから再び外へ出た。もう午過ぎになつてゐた。けれども彼女は絕えずあの一念に驅り立てられ、そして時折り男に上目使ひに、にツと笑ひかけながら、尙行つたり來たりし續けてゐた。かうしてほゝ笑むことによつて彼女が何を得ようと思つたのかは、說明出來ない。――彼女の笑みは誰もそれに應ずることの出來ないほど、陰鬱なものだつた。がそれでも笑顏をつくるといふことは、まるで自分の復讐の應援をして吳れるやうな氣がして、一種奇妙な、重くるしい快感を與へるのだつた。一陣の强風が、澄み渡つた靑空にさツと幾片もの雲を吹きやつた。するとこの風にあたつて、庭園の中の蕾や少數の蕃紅花がゆらゆらと動き出した。とある廣場では、鳩もく〳〵と鳴いてゐた。そしてどの人もみな幸福さうに急ぎ足で行くやうに見える。けれども、例の乘合バスが通り過ぎて行つた、その長い道をいつ迄もぶら〳〵ほつつき歩いてゐる、この若い

女房にとつては、大氣をよぎる春の氣もむなしかつた。

五時になると、彼女は復讐したいといふ切望の今一つのおぼろげな衝動に驅られて、いつもの巡回路を横に外れ、昨晩「洒落男」が這入つて行くのを見た、白い家に足を向けた。彼女は長い間ためらつたあげく呼びりんを鳴らし、それから花賣りをしてゐる中に度々罹つた風邪が元の、少し濁つた、しやがれ聲で、ひどくヌーツとして、「旦那さま」にお會ひしたいと賴んだ。女中が面會出來るかどうかを聞きに行つてゐる間、彼女は玄關で待つてゐた。そこには鏡が置いてあつた。が彼女はそれを覗きもせずに、眼を牀に据ゑたまゝ、全くじつとつゝ立つてゐた。

彼女は曾つて自分が入つたことのあるどの部屋よりも、明るく、溫かく、不思議な部屋に案内された。それはまるで、一皿の柔い、黑ずんだ、そしてうまさうなクリスマス・プデングが前に置かれた時のやうな氣分を與へた。壁も雜作も白かつた。そして褐色の天鵞絨のカーテンが張られて居り、繪には金の額緣が嵌めてあつた。

彼女は往來で男達に向つてしたやうに、笑顏を浮べながら、中へ這入つて行つた。がその微笑みは途端に彼女の唇から消えて了つた。白い衣裳を着けた、一人の貴婦人が長椅子に腰掛けてゐたのだ。そして彼女はきびすを廻らして、出て行きたいと思つた。彼女は自分が新しい着物の下に肌着をつけてゐないのが相手に分るに違ひないと、とつさに感じたからだ。紳士は彼女に席を勸めた。そこで彼女は腰を下ろした。そして問はれるまゝに、賣り花が臺無しになつたこと、一週間分、間代の借りがあること、亭主が自分と赤ン坊とを棄てゝ了つたことを話した。しかし話してゐる間にも、彼女はこんなことを云ひに來たんぢやないと感じてゐた。彼等は、まるで彼女の云ふことが分らないとでも云ふやうに、繰り返し〳〵質問するやうであつた。そこで彼女は藪から棒に、亭主が外の女と一緒に行つて了つたことを話した。彼女がそれを云つた時、貴婦人は、やつと合点が行つて、氣毒に思ふかのやうに、やさしい聲を立てた。彼女はそこで、彼等が乘合バスに乘つて自分の傍らを通り過ぎるのを見た時のことを詳しく話した。そして

貴婦人が美しい小さな耳をしてゐるのに氣が付いた。紳士は、彼女のためにどんなことをしてあげたら好いか分らないが――「貴女は御亭主と離婚なさりたいのですか？」と訊ねた。彼女は直ぐさま答へた、「もうかうなつたら、あんな人と勿論、一緒に居れませんわ」すると貴婦人が呟いた、「さう〳〵、勿論さうでせうとも」。「ぢやあ、貴女は」――と紳士は云つた――「どうしようと云ふんですか？」彼女は絨氈を見つめながら默つてゐた。突然彼女にはこの二人が、「この女は金を貰ひに來たんだな」と考へてゐるやうに思へた。紳士は一ソバリン金貨を取り出して、云つた。「これでいくらか足しになりますかね？」彼女は小さくお辭儀をして、ソバリン金貨を受取り、手の中で十分しつかりと握つた。彼女には彼等が自分の出て行くのを希望してゐるやうに思はれた。そこで、彼女は立ち上つてドアの方へ行つた。紳士がついて來た、そして玄關のドアを開ける時に、彼は微笑を浮べた。彼女はそれに笑顏を返さなかつた。彼が昨日、たゞの親切のつもりでしてくれたに過ぎなかつたことが分つたからだ。そしてそのために、彼女は復讐心の一端が身体からふぬけて行くやうな氣がして、心を傷けられた。

彼女はばら錢に換へない、ソバリン金貨を尙も握りしめて、家に歸つた。弱つて了つて赤ン坊に乳を飲ますことも出來かねるくらゐだつた。彼女は爐に火を起してその傍らに腰掛けた。時刻は六時を過ぎて、あたりは殆んど暗かつた。――前は二度とも、三日目の今時分歸つて來たんだわ。あの人が今歸つて來たとしたら！――

彼女はます〳〵火にひつついて屈んだ。眞暗になつてゐた。彼女は赤ン坊を眺めた、赤ン坊はチツチヤな拳をくしや〳〵にして、頰にあてながら眠つてゐた。彼女は火をかき立て、そして例の乘合バスが通つて行つた道に沿つて自分の巡回區域へ戻つて行つた。

二三人の男が彼女を呼びとめた、が彼女がもう笑ひ掛けなかつたので、直ぐに避けて通つて行つた。空氣は澄み切つてゐて、冷めたかつた。しかし彼女は寒氣を感じなかつた。彼女の眼は大きな燃力性の運搬車――乘合バスに注が

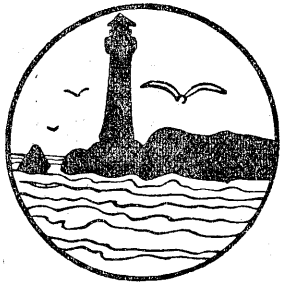
れてゐた。一臺毎に積荷を運んで近付いて來るずつと前から、彼女の眼は捜し始めた。がた〳〵と音を立てゝ通り過ぎて了つてからも、ながい間、彼女の眼は黒い麥稈帽の縁の下からじつと見送つてゐた。けれども彼女の待ちこがれてゐるものは一向に現はれなかつた。騒しさと突然の靜けさ、燈光と影の動搖と混亂、心中の動搖と混亂と暗黒——その中で彼女は赤ン坊のことを思ひ出し、急いでそこを去つた。赤ン坊は未だ眠つたまゝで、火もまだ燃えてゐた。着物も脱がずに、彼女は疲れ切つて、寢床に這ひ込んだ。起きてゐるときの彼女が小形のスフインクスのやうなら、黒い睫毛を伏せ、唇を僅かに開いて、眠りの神祕のかげの中にある彼女は、尙更のことさうだつた。夢路の中で、彼女は兩手を組み、呻いた。彼女は夜中に目を覺ました。

未だ燃えてゐる火の明りで、彼女は夫が寢臺の足の方を通るのを見た。彼は物も云はず、彼女の方を見もせずに、爐の前に腰を下ろして、長靴を脱ぎ始めた。その手馴れた仕草を見ると、烈しい怒りがかッと湧き起つた。——あゝして好きな時に入つて來れるんだわ——散々、好きな所へ行き、したいことをし盡したあげくに、この——！——だが烈しい聲は出て來なかつた。夫に浴びせるに足るだけのひどい言葉が思ひ付けなかつた。——三日も經つてから——人にあんな所を見せつけて置いて——散々待たせ——ほつつき歩かせ——苦勞させたあげくに——ノメ〳〵靴を脱いでるわ！——その仕草をもつとよく見ようと、彼女は寢床の中でそつと身を起した。もしも彼女が口を開いたとしたら、それは絶叫するためだつたらう、なまやさしい叫び聲ぐらゐぢや、彼女の心は救はれなかつたのだ。それでも尙、彼は物も云はず、彼女の方を見もしなかつた。彼女は、いきなり爐の中に落ち込まうとでもするかのやうに、彼が木の椅子から辷り落ちるのを見た。そして思つた。「燒けちやうがいゝわ、こんな——！」卑しい言葉が頭にこびり付いたが、口にはいつかな出ようとしなかつた。彼女には彼の身体がもうすつかり山なりに曲つてゐるのがよく見えた。彼の齒がが〳〵震へてゐるのも聞えた。するとその音は彼女に快感を與へた。それから彼は全く靜かになつた。で彼女の方も固唾を呑んだ。眠つてゐるのかしら？　自分の方は激怒にさいなまれて横になつてるつていふのに、眠つてゐるなどと考へるだけでも堪へられなかつた。彼女はそつと怒つた聲を出した。彼は顔を上げなかつた。が彼の足が動き　もえがらが離れて落ちた。再び靜かになつた。彼女は寢臺の足の方へ這ひ始めた。腰を曲げ、ひろげた兩腕の間に顔をうつ向けて、其處にうづくまつた彼女は、まるくなつてゐる彼の体のすぐ上に近付いてゐた。あまり近付き過ぎて、手で彼の頭を摑んで扭ぢ戻せるくらゐだつた。彼女は、自分の目を彼の目に接近させ、齒を彼の額に當てがひながら、心の中では既に、これをやつてゐた。——餘りにもなま〳〵しく想像したので、口の中に血の味がしたくらゐだつた。突然、彼女は擦り切れた寢床の上掛布の上で、顔を兩腕の間に蔽ひながら、彈かれたやうに身を引いた。數分の間、彼女はかうして、木の枝にのつた野良猫のやうに屈み込んで、じつとしてゐた。恐ろしくうらさびれた思ひが身内に起つたのだ。彼女は自分達二人がこの部屋に歸つて來た。最初の夜のことを思ひ浮べたのだ。夫の接吻を思ひ出したのだ。彼女の咽の中で何かかちつと鳴るやうな氣がした。彼女はもう引ッ掻いたり、咬んだりしたいとは思はなかつた。そして顔を上げてみた。彼は動いてはゐなかつた。彼女は僅かに彼の頰と顋の輪廓を見ることが出來た。それは子供みたいに、髯も生えて居らず、死んだやうに全くじつとしてゐた。彼女は寒氣がして、恐しくなつた。この靜かさはどうしたことなのかしら？　夫の息使ひさへ聞えないのだ。彼女は牀の上に辷り下りた。彼の眼は開かれてゐたが、全く血の氣なく、消え行く火をじつと見つめてゐた。頰は窪んで、唇には血が通つてゐないやうに見える。がその唇が絶望的に震へ動いた。——ぢやあ死んでゐないのだわ、前に二度歸つて來たときと同じやうに、唯だ凍え、飢ゑてゐるだけなんだわ——マスクのやうな彼女の顔は、自分の考へてゐることも、感じてゐることも何一つ、のぞかせなかつた、が彼女の齒は下唇を咬んでゐた。——こんな風にこの人つたらもう一度あたしン所へ歸つて來たんだわ！——

爐の中の薪が燃え盡きようとして、突然焔となつてゆらめいた。彼は顏を彼女の方に向けた。その弱い火の光りで見ると、彼の眼は赤ン坊の眼のやうだつた。その眼は彼女になにかを求めてゐるやうだつた。その眼は全く弱々しげに見えた。彼の身震ひしてゐる姿全体がやるせなげに見えた。彼はなにか呟いた。だが身体が震へて言葉が出なかつた、で彼女の耳に聞えたのは、赤ン坊が出すやうな音だけだつた。するとその音を聞いて、彼女の心の中のなにかゞくづ折れて了つた。彼女は夫の頭を自分の胸に引き寄せ、有りつたけの力を出して夫をかき抱いた。そして火が消えた時にも、彼女は夫をゆさぶり、泣きじやくりながら、もう一度、自分の小さい身体の溫くみを分ち與へようとして、尙も夫を抱いてゐた。

――あとがき――

誰が見ても明らかなやうに、これは本當の拙譯である。たゞ私が全力を傾倒して譯に當つたといふことだけが、私の心を慰めてくれる。そして何回も草稿に目を通し、私の拙劣な譯を直して下さつた恩師井上先生、終始私を勵ましてくれた文藝班の市川君その他の人々に對し、私は胸中に溢れる感謝の意を表はすべき言葉を知らない。私の譯の中に認むべきものが、萬一あるとするならば、それはすべてこれらの人々に負ふものであらう。



軍港娣姒記

市川定三

「航空隊の兵隊さん、一つやつてらつしやい、ね、いゝでしよ」と通り掛つた二人の水兵に向つて例の甘つたるい聲を掛けてゐる。私は俊子又やつてるなと思ひ乍ら飯を食つてゐる。

「ねえ、兵隊さん。どう」

「あゝ射的か、歸りだ歸りだ」と水兵の聲。

「今浪子不動へ行つて來るからな、その歸りにやつてやるよ」と、もう一つ別の聲。

「ぢやきつとよ、歸りにね、忘れたら承知しないから」

「あは……仲々恐ろしいんだな」

水兵は行つて了つた。俊子は退屈さうに流行歌を歌つてゐる。

私はつひ四五日前のことを思ひ出した。海岸の眞中から兩側へ氾濫してゆくピーチパラソルがこの海岸の端の方にある私の店の前にも一二本づゝ立ち始める。ひる一寸前だつた。一人は二十位、一人は中年の醉つて赤い顏をした二人連れが店の前に立つて客がやるのを見てゐた。俊子の「兄さん、どう、やんなさいよ、よくあたるわよ」で「ぢや

一つやつて見るかな」と言つて中年の男は笑ひ乍ら鐵砲を取つた。俊子は

「兄さん仲々巧いわねえ」

「あら惜しいわね、もう一寸だのに、もつと下の方ねらはなきやだめよ、バツト三個落しはね二番目と三番目のバツトの境目をはね上げるのよ。今度は大丈夫だわ」

「あらもう止めるの、そんなのないわよ。もう少しやんなさいよ」

「暑さうね、あんなに汗かいて、上衣脱ぎなさいよ、あたしが脱がしたげるわよ、さ、あんた」

この調子で三十分たつかたゝない中に八圓の商ひをした。

「なんだ八圓でキヤラメルたつた三つか」と苦笑し乍ら上衣を肩にかついで砂の上を定まらない足取りで歩いてゆくのを見送つて私は

「馬鹿だなあ、あんな奴がゐるんだから、だが八圓とは一寸氣の毒だな」と言ふと俊子は

「構はないわよ、あんなの、どうせ通り一ぺんの客ですもの、どつかの職工でしよ、どつち道カフェーかどつかで五圓や十圓使ふに決つてるわ」

と言つて平氣な顏をしてゐた。今年やつと二十。二年前に東北から出て來て東京の親戚の家から半年許洋裁を習ひに行つてゐたと言ふがどうもあてにはならない。私の從兄（横須賀で矢張り射的屋をやつてゐる）の店へ來て一年半立つ、顏はまあ十人並の方、だから化粧すればそれに比例してその努力の何割かの効果はある。だが化粧の方法を知らないのか化粧品が悪いのか（むしろ後者かも知れぬが）大してパツとした化粧をしてない。たゞ無暗に長く引いた眉と赤い唇とがぞつとした感じを起させる。仲々商賣上手だしこの種の女に似ずまめに働く。私は「從兄のいゝドル箱さ」と何時も思つてゐる。「この秋に家へ歸る」と言ふ。義理で嫌で嫌で堪らないが遠緣に當る男と結婚しなければならないのださうだ。「まだ世帶持つ年でもないだらう」と言ふと、所がその男がこの十一月兵隊に行くからその前に結婚式をあげなくてはならない。「でもあたし本當に嫌で〳〵堪んないの、どうしたらいゝんでしよ」と相談を持ちかけて來る。

「どうもあいつ臭い、何がつてね。奴歸り際になつたんでね、この頃これをしてるらしいんだ」と言つて從兄は右の手の人差指を鉤形に曲げて目の先に上げた。

「何しろ問題が金だからね、こればつかりや現場を抑へないことにや何とも言へない。あんたもそれとなく氣をつけて下さいよ」

こんなことをとり止めもなく思ひ出してゐると俊子が表で何か言つてゐる。

「う、何だい」

「旦那今幾時です」

「今か、丁度二時だよ」

と言ひ乍ら紅白の幕を上げて店へ出る。海から眞ともに吹きつける風に幕の端がパタ〳〵鳴つてゐる。こりや一雨來るなと思ひ乍ら店先の台から躰を乘り出して空模樣を見る。伊豆の上あたりに塊つてゐる黑雲が上へ上へと擴がつて來る。波が荒い。ボート屋が走り廻つてボートを汀から岸の上の方へ引き上げてゐる。海水客達があわてゝ歸り支度をしてゐる。又雨か、これで今日の日曜もすつかり目をすつた。今年はどうしてこんなゝんだらう。七月中にあんなに工合よく行つたのに。七月には金曜日迄降つてゝも土曜にはぴたりと止んで土曜・日曜と丁度巧くやつて來た。所が此の月に入ると普通の日はいゝ天氣なのに奇体に土曜・日曜は降られる。土曜が七十圓、日曜が百圓として百七十圓の倍だから三百圓の餘損をした。七月の中に今年の費用の小屋代が百五十圓、電氣代が五十圓、空氣銃が四挺で五

十圓、射的の權利金が五十圓、小屋の材料の保管料が三十圓、世帶道具の運般費が十五圓その他雜費が二三十圓として合計四百圓の元はどうにかかうにか取つた。今月分丈は丸々儲かると喜んでゐたのにこんな天氣ぢやどうもならない、と思つてゐる中にざあつと降り出して來た。

「こりやいけない、あたし裏へ肌襦袢を」と言ひ乍ら俊子は頭を抱へて雨の中へ飛び出して行つた。ピーチパラソルをさした海水客が海岸を走つてゆく。まだ海の中へ入つてゐる者も四五人ゐる。傘をさして隣りの大弓のかみさんが入つて來た。

「いけませんね」

「全く、今年はもうすつかりさん〳〵ですよ」

「本當に今年は的を外しましたよ」

このかみさんはもう十何年この海岸で弓屋をやつてゐる。このかみさんの言によると今年來年はよくないさうである。と言ふのは水商賣には「辰で上げて巳で下りる」と言ふ諺がある。つまり辰年は風が荒れ巳年は雨が多い。だが今年は辰年なのに雨許降つてゐるから來年は風が荒れるかも知れないと言ふことだ。

マッチを取りに奥へ入る。雨が吹きかけるので窓を閉めたのだらう。中は眞暗だ、ふと見ると隅の方で俊子の石膏の様に白い姿がぼつと浮んでゐる。裸になつてゐるのだ。着換へでもするのだらうと思つたがわざと

「どうしたんだ」と聞くと

「今ね雨がすつかり肌迄透しちやつたのよ。で體拭いてるんだけど何だかじめ〳〵して、氣持惡いわ」

「さうか、ぢや風邪引くといけないから（やつと闇の中を摸る手先にマッチが觸つた）風呂へ行つて來たらどうだ。どうせ店はこいぢや客なんかありやしないから」

マッチを擦つて煙草へ火をつける。

「嫌だわ、旦那、マッチなんかつけて、恥かしいぢやないの」

「恥しいて、お前も年頃んなつたね、さすがに」

「だつて、何ぼ何だつてこんな恰好なんですもの」

「だからだよ、さすがにだつてんだよ。下町でオーシャンのりん子の次に心臓が強いて折紙がついてるお前もね、矢つ張り」

「嫌だわ、變なことばつかり言つて、旦那つたら、あんなの長門の人が勝手に決めたんぢやないの」

窓に取りつけた板戸の蝶番ひの隙間から雨が流れ込んで來る。濡らしちやいけないと思つて窓の直ぐ下にある床の上の莫蓙をめくらうとした時

「やあ堪らない堪らない」と言ひ乍ら誰か店へ駈け込んで來た様子、私は早速店へ出る。四五人の男達だ、どうも學生らしい。

「小父さん堪らないよ、俺達あすこにキャンプしてるんだけどね、降つて來たからテントん中へ入つたら坐つてる砂の上を水がどん〳〵流れて來るんだよ」

「僕はひどい目にあつたよ、さつきから晝寢して〻はつと氣がついたら半身水浸しさ」

「海水浴してる夢でも見とつたんだろ」

「あは……」と皆一度に笑つた。

「もうすぐ止むでせうから待つてたらい〻でしよ」

「たゞ待つてたつて仕様がない、これをやらうぢやないか、俺あ巧いぜ」と一人が言ひ出すと、俺も、僕もで皆やり

出した。

「俊子、一寸出て來てくれ」

「はあい」と調子外れの聲で返事をして、シュミーズの儘飛び出して來た。

「おい、たばこ積んでくれ」

俊子は手際よくバットや敷島を端の台から積んでゆく。この煙草を積むのが素人では仲々難しい。と言ふのは煙草とは箱許りでその中には煙草の內函の四つ耳を切つて作つたカードが十二三枚ぎつしり詰つてゐてその上ブリキ板を入れて他のより重くしてあるのもあれば銅片を入れて上下の重さを變へてあるのもある。さうした夫々の特長を手に持つた重さで選り分けて竝べなければならないからだ。しかしそれは兩切に限られてゐて口付は正眞正銘の大日本帝國專賣局謹製のまゝである。

「姐さん、早くどかないとけつへ當てるよ」

「當てゝもいゝわよ、大きいんだから」

「ようし一發當てゝやるぞ」と言つて男が鐵砲を取り直した時俊子は積み終つてくるつと客の方を向いた。

雨が止んだ。長者ケ崎の上の方に大小二つの虹がかゝつてゐる。

「をかしいわねえ、虹が二つ一ぺんに出るなんてどうしてどしよ」

「うん、ありやあね、男と女の虹なんだよ」

私は棚機の星を思ひ出して出鱈目を言つた。

「ほんと？」

「ほんとさ。で今にあれが段々近寄つて終ひに大きな一つの虹になるんだ」

「さうお？　どやどつちが女？」

「さあどつちか考へて見な」

海を圍む三方の山々の木は水を吸つて生き〳〵と輝いてゐる。伊豆・箱根の山が綠青の樣な色をしてゐる。海岸には人がぽつ〳〵出て來た。別莊にゐる避暑客達は海へ入れない日は退屈で仕方がない。一寸雨が上るともう海岸へ出で來る。少し位降つてゐても傘をさして海岸のキャンプストアや遊技場を廻つてゐる。何かを求めて朝も晝も夜も海岸を彷徨する男と女達——それらの間に一夏だけの樂しい思ひ出の花が咲く。「こゝだけの話さ」、「一夏限りさ」かう言つた考へを持ち相手にもさうした氣持を豫想して結ばれた幾組もの男女が海の中で戲れ合ひ、海の水が冷く感じられる八月の末になると互ひに思ひ〳〵の氣持を抱いて逗子の驛から上り列車に乘つて別れて行く。この逗子だけではない。葉山にしろ、鎌倉にしろ別莊地帶の海水浴場はどこでもさうである。鎌倉ではさうした全く海へ入らずに女を追ひ廻したり海岸の店々を廻り歩く男を「岡蒸氣」と言つて海水着を着てゐる男の三分の二はそれであると言ふ。逗子にも澤山の「岡蒸氣」がゐる。若樣・アコーデオンの人・ケイオーボーイ・にやけた人——これ等は毎日二三回も私の店へ來る、名前の知らない客につけた俊子のニックネームであり代名詞である。

虹を見て男だとか女だとか柄でもないロマンテイツクなことを言つて私は自分自身がをかしかつた。俊子はと見ると台から半身乘り出して景品のキャラメルをしやぶり乍ら半信半疑な顏つきでまだ虹を見てゐる。無智の者特有の表情——私は何故か小憎らしい感じがした。割合に肌理（きめ）の細い肌——左の二の腕に種痘瘡の痕が五つ——シュミーズのたるみで胸の中が少し透けて見える。その時俊子が急に私の方を向いた。私は、はつとして眼をそらした。俊子は氣がついたらしく兩手でシュミーズの肩吊りを後へ繰り上げ乍ら言つた。

「段々消えてくぢやないの」

俊子の頰はほんのり赤かつた。私は太陽をぢかに見る樣な眩しさでその顏を見てゐた。私は思つた。

「こいつ矢つ張りまだ生娘だな」と。

次の日曜日、天氣もどうにかかうにかもち、晝間の客が引いて夜の客に移る二時間餘りの合間——この間に店の掃除をし夕飯を食ひ風呂へ入るのである。掃除を終へて私は店先の緣台へ腰を下した。台所では俊子とおふみが夕飯の支度をしてゐる。おふみは何時もは横須賀の店にゐて忙しい時丈手傳ひに來る。浦賀の漁師の娘で今年十八になる。顏は俊子より一寸いゝし働くことはよく働くが祿すつぽなお世辭も言へず客扱ひが下手だ。要するに内氣な女である。その癖變に氣を廻して顏を赤くしたりむつとしたりする。感じが鈍いと言つていゝのか鋭いと言つていゝのか分らない。妙に人懷い所があつて私の妹と話が合ふ。妹はおふみによく化粧品やハンドバッグの古いのや婦人雜誌をくれてやる。俊子は妹に言はせれば「あんなひと、あたし、大嫌ひ」である。私は、俊子はどつちかと言へば男に好かれる型、おふみは女に好かれる型だと思つてゐる。

何がをかしいのか二人の笑ひ聲が台所から聞えて來る。

西の空が眞つ紅に染つてゐる。海も紅い。紅い海の上をスカールが滑つてゆく。夕凪だ。

犬を連れて海岸へ立つ人達の影が逆光を受けて綺麗な輪廓を作つてゐる。男でも女でも年寄りでも子供でも今頃散歩する者は大抵犬を連れてゐる。精悍な日本犬を引いた子供やヒステリックに絕えずキャン〳〵鳴くテリヤを抱いた女達が海岸を行つたり來たりしてゐる。その中を水兵が二人歩いて行く。水兵達は女を連れてゐる。女は歩く度に裾がめくれて膝のあたり迄白い脛を見せてゐる。身なりでどんな女かは分る。女はこつちを向いた。私はどこかで見た

ことのある顏だなと思つた。女は立ち止つて私を見てゐたが水兵に何か言つたかと思ふと私の方へ駈けて來た。

「あらあんただつたの矢つ張しさうだつたわ」

私はまだ思ひ出せない。

「あたしよ、喜美子よ」

「あゝさうがあんただつたか去年の夏の……」

「さうよ、あたしよ」

「喜美子」と言ふのを聞いて俊子が奥から飛び出して來た。

「まあゝ喜美ちやん」と「あゝら俊ちやんも」とが同時に二人の口から出た。

「何時こつちへ?」

「きのふ(——)おとゝひだわ」

「それ迄どこ?」

「呉よ」

「ぢやあれからずつと呉にゐたんだね」

「さうぢやないよ、呉にゐたのなんかたつた一月さ。呉から佐世保へ行つて佐世保から大村へ行つて内地なんか厭んなつちやつたから思ひ切つて鎭海迄行つて見たんだけどやつぱし内地だわ。五月から呉にゐたんだけど急に横須賀が戀しくなつたんで歸つて來たんだよ」

「横須賀なんか戀しいんぢやなくて彼氏だろ」

「何言つてんの俊ちやん、あんな奴、あいつね、けふ聞いたんだけど國からいゝ女貰つてもう子供迄あるんだつてさ」

「さうお、あたしはその後何にも聞かなかつたけど。所であの水兵は誰？」

「あれはねえ」と言ひかけたが「一寸待てゝ」と言ふと水兵の所へ戻つて何か話をしてゐた。

去年の夏だつた。風呂敷を一つ持つた女が從兄の店へやつて來た。「使つてくれ」と言ふ。世間の一通りのことは味つて來たらしい女だ。「かう云ふ女に出來るかな」と思つたけれども店の女は俊子一人で、困つてゐる所だつたのでやらして見る氣になつた。それがこの喜美子だつた。俊子と同じ年だが酒も飲む煙草も喫ふ。商賣そつちのけで客と遊んでゐる。立つてゐるのが辛いらしく椅子へ坐つたまゝ客と冗談を言ひ合つてゐて、崩れた煙草も積まないし台の上のコルクの彈丸が切れても出さない。たまに往來にコリントゲームの玉が轉り出して取りに行くと往來の眞中に着物の裾をはだけて坐り込み通る人も近所の人も顏をそむけてしまふ。「幾日續くか」と興味をもつて見てゐたが三日目に「暇をくれ」と言つて來た。それから一月許りカフェーの女給をしてゐたが八月の末にひよつこり來て「色々お世話になりましたが今度吳へ行くことになりました」とだけ言つて出て行つた。

喜美子は水兵の所からすぐ又引き返して來た。

「一緒に浪子不動へ行かうと思つたけど一人で行つて貰ふことにしたんだよ。あれ？　あれは何でもないよ。集會所（海軍下士官兵集會所の略）の前で會つて逗子へ連れてつてと言つたら連れてつてやると言つたから一緒に來た迄の話さ。全然見ず知らずの男だよ。甘いものさ、こつちのいゝ時にまいちやへばいゝのさ」

私はこの飽きることを知らない女の豐滿な體付きを見てゐる。半ば自暴自棄氣味の影を持つたやゝ赤い顏――赤ら氣な毛のパーマネント――襟足から咽喉に迄眞白に白粉を塗つてゐる。

「どう、近頃は」と喜美子は私に言つた。

「相變らずさ」

「たばこ一本頂戴よ」

私は丁度持つてゐた外國の煙草をやつた。

「あら凄いわねえ、これウエストミンスターでしよ、どうしたの」

「貰つたんだよ、東郷通りのフリントの用心棒にさ。何でもこの間ハマへ遊びに行つて三四箱貰つて來たんださうだ」

「フリント？フリントならあたし知つてるわよ。幸ちやん、まだゐるかしら」

「フリントの女給も一年の間に半分變つたけど幸子はまだゐるよ」

「一度會ひたいわ」

喜美子は巧さうに煙草を吸つてゐる。

「相變らず好きだね、止める止めるつて言つてた癖に、去年は」と言つて俊子は笑つた。

「もう止める所か、いちんち（一日）三箱だよ。あんた感心にたばこだけはやらないんだね、今でも？」

「うん、これ以上瘠せたら堪んないもん」

「おい俊子、奥へ行つて茶でも入れてやんな」と私は言つた。

「喜美ちやんお出でよ」

「構はないよ、こゝで、もうすぐ歸るんだからさ」

「まあいゝぢやないか。遠慮するなんて……」「あゝさう〳〵俊子、ビールが冷してある筈だから、あれを拔いてやんな」二人は奥へ入つて行つた。

「あゝ重かつた」と言つて從兄は大きな風呂敷包みをずしりと台の上へおいた」
「大變だつたね」
「重いよ、三箱許りと思つたらどうして〳〵」と言ひ乍ら額の汗を手拭ひで拭いた。
「キヤラメルはあと續くかね」私は風呂敷包みを持ち上げようとしたが一寸では持ち上らない。
「それがね、大キヤラはまだ少しやあ、あるが小キヤラはこゝ一週間か十日入つて來ないつて話さ」
「へえ、矢つぱり間に合はないんだね」
「でも今ストツクがこれと一緒で三箱あるね。だから今朝來る時ひさ（從兄の妻の名）に言つて横須賀の菓子屋を全部廻つて買べるだけ買つとく樣に言つといたよ」
「あゝさう〳〵喜美子が來てね、ほんの五六分前歸つたよ。喜美子つてほら去年の七月頃四郎さんの店にゐた」
「あゝ、あいつが、ふうん、吳だか佐世保だかへ行くと言つてたが」
「又歸つて來たんだよ」
「腰の落着きのない女さ、どこへ行つたつて永持やしねえよ」その時おふみが奥から出て來た。
「旦那、御飯の支度が出來ました」
「さうか。ぢやあ食べる間店番をしてゝくれ」
私達はなるべく俊子を獨りで店へおかない樣にしてゐるのだ。おふみは頷いて隅の椅子に坐つたが丁度客が來たので
「いらつしやいまし、さあどうぞ」と言ひ、作り笑ひをして立ち上つた。おふみも大分慣れて來たなと私は思つた。
ぱん〳〵と音がする毎に續いて人形の落ちる音がする。

「仲々巧いわねえ」とおふみの聲。

それから四日立つた日の夕方、妹が昨夜誰かゞ持つて來たと言つて手紙を一通持つて來た。
「今日は早いんだね」
「だつて木曜日ですもの、全部定時間よ、だから金澤文庫で乘り換へして湘南（電鐵）で來たの」
私は手紙の封を切つた。
「ふみちやんゐる？」
「今隣りの弓屋へ風呂を貰ひに行つたよ、もう出て來る時分だ」と言つてゐる所へふみ子が濡れた手拭ひを口に啣へとき色の兵兒帶を締め乍らやつて來た。
「今日は、こつちで艶子さんに會ふのは初めてですね」
「さうね、だつてあたし逗子へ來たのこれでたつた二回目よ」
私は景品の大きなチヨコレートを妹にやつた。妹はチヨコレートが大好物なのだ。
「さう〳〵あたし忘れてたわ」と言つて妹は富士絹の風呂敷包みを解いた。新聞紙にくるんだ中から赤い鼻緒のついた台の青いエナメルの駒下駄が一足出て來た。
「これ、よかつたらあんた履いて見ない？」
「まあ、いつも、ほんとにお世話になつて」おふみは貰つた下駄を履いて見た。
「兄さん、もうお店は暇なんでしよ」
「あゝ」

「ふみちやんと一緒に海岸を歩いて來てもいゝでしよ」
「いゝよ。四郎さんがさつき歸つて來たから夕飯を食つて歸つて貰はうと思つてた所なんだよ」
「さあふみちやん行きませうよ。なに履物？今のそれでいゝぢやないの」
私は小聲で
「今店に俊子がゐるよ。見えると工合がわるいから裏を廻つて行きな」と妹に言つた、
二人は竝んでゐる小屋の裏を通つて二軒向ふの横道から海岸へ出た。
私は飯を喰べ乍ら手紙を讀んだ。小學校の同窓會のことだつた。入營することになつた者も數名ゐる。でその壯行會を兼ねて同窓會を今月末やりたいと思ふ。就いてはあなたに極力骨を折つて戴きたい。尙一寸した打ち合せをしたいから土曜日の夜七時迄にニューセントルイスへ來てくれ。大体こんなことが書いてある。
大分暗くなつた頃妹は一人で歸つて來た。おふみは途中から驛へ行つたのだらう。
「おなかゞ空いたらう」と訊くと
「途中で喰べたわ」と妹は答へる。
夜の客がぽつ〳〵出始める。私の店にも三四人やつてゐてそれを見てゐるのが三十人ゐる。
私ははたきで台の上の砂をはたく。妹は店先の緣台に坐つてゐる。
「どこ迄行つて來たんだい」
「六代御前の御墓迄よ、途中富士山がよく見えてよ、迚も綺麗だつたわ」
「さつきの手紙な、小學校の同窓會のことさ」

「さうでしよ、あたしもどうもさうらしいと思つたわ」
「土曜日にニューセンで打合せだ」
「ニューセンて言やあ、ニューセンで一番素敵な人ね、あの人誰だか知つてる？　下町の人よ」
「下町の人間だつて」横須賀の下町で生れて二十二年間下町で育つた私は下町のことなら何でも知つてゐると自負してゐたのである。
「ほら、坂下の今市節子さんよ」
「あゝ、あいつか成る程」
四五年前下町の盛り場附近の中學生・女學生が殆んど擧げられた。新聞ダネに困つてゐる「横須賀日々」、「軍港よろづ」「相模中央」等の新聞はこの時と許り「男女中等學生の〇〇〇〇」とか「危い埋立海岸の夜の火遊び」とか、ひどいのになると「〇〇〇變化がなければよいが」等々の見出しで輪に輪を掛けて書き立てた。假名で出てゐたが一字や二字變へても同じである。その時の今町節子がこの今市節子だ。當時女學校三年生だつたが退校になつた。
若い女が二人入つて來た。
「いらつしやい、どうぞおやんなすつて」
私は彈丸を空氣銃に塡めてやる。女には銃身が折れないのだ。
私の妹は去年女學校を卒業して今追濱（横須賀と金澤—武州—との間にある）の航空廠（正しくは海軍航空技術廠）に勤めてゐる。記錄女工員、分り易く言へばタイピストである。一日九十錢であるが加俸とか何かがついて結局月に四十圓近く取つて來る。取つて來ると直ぐ五年間で三百圓になる月掛貯金の一月分と次の月のパス代とを引いて殘りは忽ちの中に着物や化粧品に變る。毎朝七時に出て夕方の五時か七時に歸つて來る。來月の一日から洋裁學院の夜間

部に入るから殘業は一日おきだと言ふ、一週三日で二年間かゝつて卒業である。

一体横須賀には勤めてゐる女が多い。女學校の卒業生が今の統計に依ると八十五パーセント就職してゐる。それは單に經濟的事情から來るのではなくて、その筋が愛婦・國婦等の婦人團体を通じて勞働に關する或る種の理解を強く與へた結果であり又さうすることが軍港市民の榮譽ある義務であると或る者は考へ、ある者は當然の權利と思ふ結果であり、更に京都の町を商ひする大原女の樣にかうしたことをするのが花や琴に勝る嫁入り前の娘の心支度であるとも考へられる樣になつた結果である。

航空廠は半分以上女である。その他建築部にも經理部にも軍需部にも女々々である。

袴の紐を胸高く締めたパーマネントやハイヒールの洋裝が颯爽と歩いてゆく。

「あれが女工か」と年輩の者は笑ふ。だが「看護婦氣質」なるものがあつて普通の女は看護婦なんかには決してならなかつた一昔前と今の「白衣の天使」への移り變りの目醒しさに驚く者は女工も、デパートの賣子も、商店のショプガールも、もう嘗ての面影を全く留めてゐないのに氣がつく。「女工」と言へば紡績工場や製絲工場の陰鬱な寄宿舍に閉ぢ込められた女を考へる時代はもうとつくに過ぎ了つた。

おふみが「どこかへ勤めたい」と言ふ。おふみの實家では反對である。私の妹が

「その方がいゝわ。さうしなさいよ。あんなことしてたつて仕樣がないわ」と頻りに勸める。普通だと小學校出は五十五錢、女學校出は七十五錢であるがタイピストだつたら小學校出でも八十錢、女學校出で九十錢だから女學校を出た者とさう變らない。

タイプライターなんかすぐ覺える。市内に今四箇所養成所がある。大抵は一月五圓の月謝で半歳で卒業である。

「あんたん家でいけないつて言ふなら、あたしん家から通つたらいゝわよ。あたしの部屋に二人でねませうよ、ね？」

おふみは默つて俯向いてゐる。

「どうも御叮嚀にわざ〳〵有難う。ぢやどうぞ宜しくつてね」私の母が重箱と袱紗を包んだ赤い風呂敷包みをおふみに渡す。

「いゝえ」とおふみは頭を下げて出て行く。母が後姿を見送つて

「いゝ娘さんになつたね」と言ふ。

「何のおこわです？」と私は母に訊く。

「ほら節ちやん（從兄の子供の名）が病氣したろ、疫痢で、あの全快祝ひだつて。ほんとにあすこぢや物固いよ」

「おこわ？　嫌だわね。果物か何か持つて來ればいゝのに」

妹は顏をしかめてゐる。

私は久し振りで家に泊つた。昨夜同窓會の打合せのため逗子から歸つて來たのである。今日は日曜日で天氣がいゝから逗子は忙がしい。九時迄におふみと一緒に行くことになつてゐる。

私は一昨日の俊子の話を思ひ出してをかしくなつた。一昨日の夕方俊子がボートに乘りたいが漕げないから漕いでくれと言ふ。仕方がないから二人でボートに乘つた。その時俊子が言つた。

「艶子さんて面白いひとね」どうしてだと訊くと千代子さん（私の姉の名）から聞いたんだけど艶子さんはかう思つてゐる。二十三迄、五年間勤めてその間に洋裁と花とを習ひ、次に二十七迄四年間東京の山の手の屋敷へ奉公して作法と料理と花と琴とを習ひ、三十迄三年間家に居て親に孝行する。そして三十になつたら死ぬのださうである。勿論結婚はしない。

「あいつ變り者でね、六人兄弟であいつ一人仲間外れさ。その癖よその人には案外受けがいゝらしい。勤めの方な

んかでも」

「馬鹿にふみちやんを可愛がつてるのね」こいつ妬いてゐるなと私は心の中で思つた。俊子は鄕里の町の學生が松嶋でボートを漕ぐ時に歌ふ歌を私に歌つて聞かせた。降りしなにボートが傾いて俊子は私の腕にしがみついた。

「平氣だよ」と私が言つても尙私の顏を見上げ乍ら私の腕を一層强く握つてゐる。私は拂ふ樣にしてボートを降りた。

「艶子、お前獨身主義なんだつてね」

「嘘、そんなこと誰から、姉さん？」

「違ふ、姉さんぢやないよ。ある人から耳に入つたんだよ」

「誰さ」

「誰だつていゝぢやないか」

私は妹のこの理想とも空想ともつかぬ變つた考へに、をかしさよりも、可哀想ないぢらしさを感じた。

「さあ、八時四十分のに乘つてかうかな」私は腕時計を見て立ち上つた。

從兄の店へ行くと「今支度をしてゐる」と言ふ。煙草を二本吸ひ終つてもまだ出て來ない。やつと

「どうもお待遠樣」と言つて化粧をしたおふみが出て來た。紫の矢絣のジョーゼットの着物を着て大きく作つたえもんから眞白い襟足が覗いてゐる。ワン、ロールの髮の毛は前の方がカールしてある。

「綺麗になつたね」と私が言ふと默つて笑つてゐる。どや〳〵と水兵が入つて來た。

「もう上陸なの？」

「今日は日曜だもの」

「ふみ坊どこへ行くんだ、逗子か」

「さう逗子よ、後でいらつしやいよ、一緒に泳ぎませう」

私とおふみは店を出た。僅か一月半の間に隨分すれたものだ。もう一人前の射的屋の女さ、これなら俊子がゐなくても大丈夫だと私は思つた。

「本當に勤める積りなのかい」私から一間もの間をおいて跟いて來るおふみを振り返つて私は訊く。

「あたしは勤めたいんですけど家でもつて……」

もうこの女も地道な勤め仕事は出來ない。勤めたいのは仕事をしたいんぢやなくて袴を穿いたりパーマネントをかけたりするあの派手な身なりをして見たいのだらう。この女もやがて俊子の樣になり喜美子の樣になつてしまふんだ、かう言ふ女にとつちやそれでいゝのかも知れない。

「お母さんが心配するから餘り飲んぢや駄目よ」と言ふ妹の聲を後にして私は表へ出た。從兄の店の前を通る。客が三四人ゐて從兄のかみさんと俊子が店に出てゐる。氣がつかないらしいので默つて行き過ぎようとすると俊子の聲、

「旦那どこへ？」

「小學校の同窓會だよ」

「行つてらつしやい」

妙な空々しさを私は身に感じた。

同窓會はすし屋の二階で開かれた。先生を入れてやつと十七人集つた。「です調」の他人行儀な挨拶に變に窮屈さを感じたのも最初の中だけで酒やらビールやらが廻つて來ると「おい誰々」と呼び棄ての十年前の腕白小僧に還つた。

九時半に終つた。相當醉つた私は、この儘歸るのも惜しいと思ひ乍ら人の波を泳いでゆく。誰かゞ呼び止める。

「ようつ、喜美子か」私は自分で自分の聲の大きいのに驚いた。濃艶な程迄に厚化粧をした喜美子が笑つてゐる。
「醉つてるのね」
「なあに大したことないよ。小學校の同窓會でね」
「どつかへ連れてつてよ」
「よし行かう」私達は歩き出した。
「毎日何してるんだい」
「何つてこともないわ、その日その日の風向きによつてさ」
「氣樂な身分だね」私の皮肉に怒つたのか喜美子は何も言はない。二人はフリントへ入つた。暗い電燈の中の人いきれと煙草の煙がむつと鼻をつく。席はないかと私はぐるつと見渡した。殆んど一杯だつた。
「あら、喜美ちやん暫くね、いつ來たのよ」幸子が走り寄つて來た。喜美子は默つてゐる。私は氣まづさを感じた。幸子は意味有り氣な顏をして私を見乍ら、
「今ね、奥が空くわよ」と言つて奥へ行つた。間もなく奥のボツクスへをさまつた。私はカクテルを三つ注文した。一つを幸子が飲んだ。
「喜美ちやん、どうしたの？ねえ」
「どうつて？」喜美子が妙に絡んでゆく。
「ウヰスキーだ、ウヰスキーだ」と私は叫んだ。私は小さなグラスに入つたウヰスキーを何杯も喜美子に無理に飲ませた。喜美子は頰杖をして煙草をふかしてゐる。
「もつと飲みなよ」私の聲に喜美子はぐつとグラスを乾した。

「俊ちやん、呼ばない？」と喜美子が言ふ。
「それはいゝ。ぢや俺が電話を掛けよう」私はテーブルや椅子を辿つて電話室へ入る。舌が縺れてどうも思ふ樣に言へない。間もなく俊子が來た。俊子の姿を見ると喜美子はいきなり抱きついた。
「俊ちやん、あんたあたしの氣持分つてくれるでしよ」
「分つてるよ。よく」俊子があつさり返事をする。
「俊ちやん、俊ちやん」喜美子は同じことを繰返してゐる。
私は俊子にもウヰスキーを飲ませた。顏が一時に赤くなつた。
「喜美ちやんけふ何だか變ね」
「變？　變にもなるわよ、變になんなかつたら一日だつてやつてけやしないよ、あたしなんか」
向ふでは醉つた男が盛んに何か喚いてゐる。
「十六の時うちを出て、もう五年になるわ」
「あんた兄さんがゐたんだつたわね」
「今早稻田へ行つてるの」
「早稻田へ？　幾つなの」
「今年二十……二十三だわ」
「ふゝん」と私は心の中で笑つた。かう言ふ女に限つて兄弟が大學へ行つてゐるとか大學を出たとか自分が女學校を中途退學したとかと言ひたいものである。自分は淪落してゐても家庭はれつきとしてゐると言ふことを言ひたい一つの虛飾である。その虛飾に依つて過去の世界を作り上げる。その作り上げた過去の世界がその女達には知らず知ら

ずの中に本當のものゝ様に思はれて來てある時には慰めになりある時には自信になる。

「もうこんな女になつたら、おしまひさ、自宅の閾も跨げやしない」喜美子は吐き出す様に言つて天井を見詰めた。体の動く間は女給でも何でも出來る。やがて動かなくなると墮ちてゆく先は決つてゐる……。

「そんなこと言つてたつて始まらないよ。ね喜美ちやん、そんな時にはお酒でも飲むのさ、あたしも飲むよ」俊子がグラスを持たうとすると喜美子はいきなり立ち上つて俊子に顏を冠せる様にした。

「俊ちやん、あんた迄がそ、そんな」ヒステリツクな聲の連續。俊子は遠くの物を見る様な目付で喜美子の顏を見てゐる。喜美子は坐るとどつとテーブルの上に俯向いた。グラスと灰皿が床に落ちて壞れた。

「どうしたんだ、喜美子」喜美子は泣いてゐる。背が大きく波を打つてゐる。

「どうしたのよう、喜美ちやん」

「あたしがわるかつたわよ、喜美ちやん、喜美ちやんてば」兩側から俊子と幸子が喜美子の肩を掛けてゆすつてゐる。何事だらうとあたりの人の視線がこつちに集中してゐる。「馬鹿野郎つ」と危く口の先迄出かゝつた言葉を呑んで、

「ぢや勘定は後でな、一足先へ」と言ひ殘して私は通りへ出た。ひつそりとした街を長靴を履き劍を吊つた巡邏が列を組んで歩いて行く。カフエーや食堂の女が店の前に椅子を出して凉んでゐる。從兄の店の前を通つたがもう閉つてゐる。私は右に工廠の白いコンクリートの塀が續いてゐる淋しい片側町を歩く。殆んど醉は醒めた。私は不愉快だつた。馬鹿な奴さ。軍艦の様に港々を兵隊を追つて廻つてゐる。港へ入れば定らないブイに繫つていつかは又放れてしまふ。だが考へて見れば可哀想な女だ。

波止場の入口へ來た。番兵の銃劍がキラリと不氣味に光る。青白い月が港を照してゐる。

このなかの私と言ふのは第四高等學校文科二年の文藝班の市川定三と云ふ小說家志望の男である。

雜記

第四高等學校北辰報國團々則並組織

第一條　第四高等學校北辰報國團ハ團長ヲ核心トシ全職員生徒一團トナリ報國精神ニ一貫シ修文練武以テ臣道ノ實踐ニ邁進センコトヲ期ス

第二條　本團ハ其ノ目的達成ノ爲メ左ノ部ヲ置ク

一、總務部

二、鍛練部

鍛練部ニ左ノ班ヲ置ク

弓道班　劍道班　柔道班　野球班　庭球班　山岳班

漕艇班　競技班　水泳班　籠球班　蹴球班　排球班

三、國防訓練部

國防訓練部ニ左ノ班ヲ置ク

馬術班　射擊班　スキー班

四、文化部

文化部ニ左ノ班ヲ置ク

興亞班　科學班　文藝班　音樂班　敎養班

五、生活部

六、會計部

總務部ハ本團ノ事業ニ關シ企畫統制ノ任ニ當ル

生活部ハ生徒團員ノ生活ニ關シ指導斡旋ノ任ニ當ル

第三條　本團ハ毎年修練大會ヲ開キ且ツ團誌「北辰」ヲ刊行ス

團誌ノ編輯及發行ハ文化部之ヲ擔當ス

第四條　本團ニ左ノ役員ヲ置ク

一、團長

團長ハ校長之ニ當リ本團ヲ統率ス

二、部長、副部長、班長、理事及委員

各部ニ部長副部長各一名ヲ置キ部務ヲ掌理セシム

但シ會計部ニハ副部長ヲ設ケス

各班ニ班長一名ヲ置キ班務ヲ掌理セシム

總務部ニ理事若干名ヲ置キ部務ニ參與セシム

各部ニ委員若干名ヲ置キ部務ニ參與セシム

部長副部長班長理事及委員ハ職員團員中ニツキ團長之ヲ任免ス

三、幹事及副幹事

總務部ニ幹事若干名ヲ置キ部務ニ從事セシム

鍛練、國防訓練、文化ノ三部ニハ幹事及副幹事各一名ヲ置キ部務ニ從事セシム

各班ニハ幹事一名ヲ置キ班務ニ從事セシム

各學級ニ幹事及副幹事各一名ヲ置キ團務ニ從事セシム

幹事及副幹事ハ生徒團員中ニツキ團長之ヲ任免ス

幹事及副幹事ノ任期ハ一箇年トシ更任期ハ毎年四月トス

第五條　團長ハ諮問ノ爲部長會其ノ他各種ノ役員會ヲ開ク

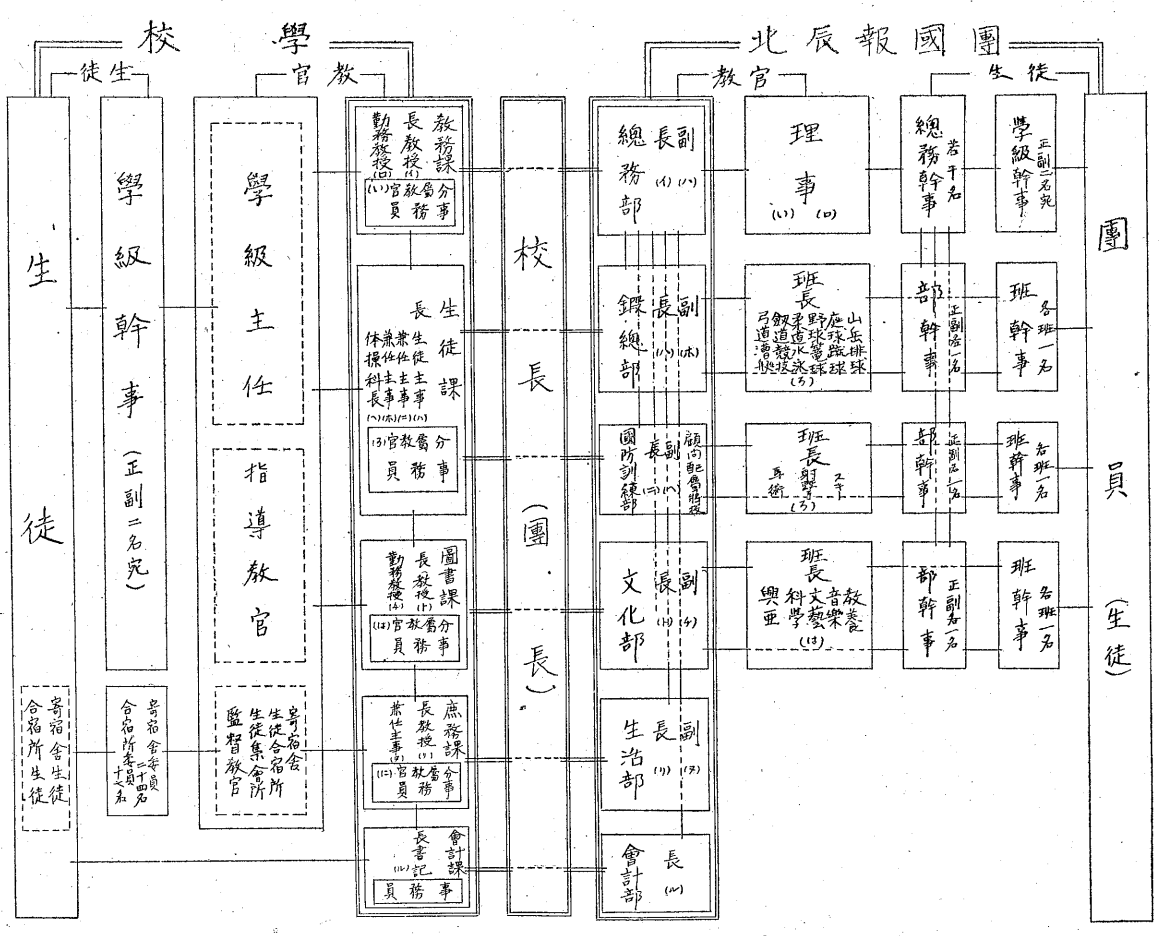
團員ノ協力ヲ計ル爲部長指導ノ下ニ各部又ハ各部聯合ノ役員會ヲ開クコトヲ得

第六條　本團ノ費用ヲ支辨スル爲修練費一箇年金八圓（假定）宛ヲ徵收ス職員團員ハ之ヲ適宜分納シ生徒團員ハ之ヲ授業料ニ準シテ分納スルモノ

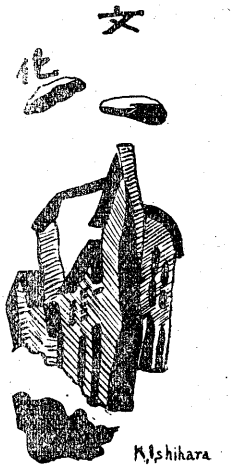
本團ノ會計年度ハ毎年四月ニ始マリ翌年三月ニ終ル

本團ノ收入支出豫算ハ毎會計年度ノ初メニ於テ總務部及會計部之ヲ編成ス

第七條　別ニ細則ヲ設クル必要アルトキハ團長之ヲ定ム



部	總務部	鍛練部	國防訓練部	文化部	生活部	會計部
部長 副部長	副長 栗原廣道 星野信之	副長 川島弘 栗原廣道	副長 翠川潤三 顧問 河内山邦三郎 伊藤三作	副長 篠原一慶 伊藤武雄	副長 山本興吉 大河良一	長 上村茂次郎
理事	理事	排球班長 蹴球班長 籠球班長 水泳班長 競技班長 漕艇班長 山岳班長 庭球班長 野球班長 柔道班長 劍道班長 弓道班長	射撃班長 馬術班長 スキー班長	教養班長 音樂班長 文藝班長 科學班長 興亞班長		
班長	事 清野巣盛治廣 鴻	中 三村豐市郎 端 覺松節 小 杉 熊 山 瀬 神 上 金 竜 岸 密 島 原 澤 浦 本 川 保 田 崎 沢 田 度 正 勇 正 重 龍 顯 周 重 良 勝 正 夫 吉 秀 禮 二 勤 彦 雄 次 二		向 井 犬 樫 向 居 上 塚 本 居 淳 義 岸 竹 淳 郎 正 三 治 郎		
委員	丹羽榮一 楠正路	手塚雅雄 町居一郎 今村四郎 坂井吉雄 香田愚		行野外雄 西田勝雄 白濱誠也 杉林條一實 六一銀次郎 盛古清道 前田秋夫 藤井信英 清水宗次郎 駒井德太郎 赤井直好 宮下重吉 高木友雄 岩井武雄	北村定雄 中村三信吉 加藤田智寛 松田愚	小西ふみ 加藤田文明 正谷金夫 松
幹事	常任	排球班 蹴球班 籠球班 水泳班 競技班 漕艇班 山岳班 庭球班 野球班 柔道班 劍道班 弓道班	射撃班 馬術班 スキー班	教養班 音樂班 文藝班 科學班 興亞班		
	理甲二乙一 文甲二乙一 渡邊定五 戸澤政方 山室重遠 高田喜久 蒲田喜久 高橋和夫 小川常人	理甲二乙一 文甲二乙一 櫻井五宏 田中博茂 山田泰三 金森圭三 吉田茂男 鈴木太郎 古川七郎 早川光三 齋田男 上田茂 高野宗司 小田垣次郎 安達秀男 高橋和夫	理甲二乙一 文甲二乙一 蒲田喜久 古森伸一男 久保平川嘉彦 森越智京之助	理甲二乙一 文甲二乙一 後藤信行 安田道夫 理甲二乙一 文甲二乙一 澤木欣一 瀬戸清		



文化部報告

文化隨想

石灰茂

凡そ文化の使命とは何であらうか。

恐らくこの問題については幾多の人々が思惟し規定し洞察して來たであらう。が文化もその内包性の増大と範圍の進展と、これを生む人間生活の變化流轉と共にその意義を變へ新しき活躍舞臺を開拓して行くであらう。

×

阿部知二氏は「文學論」に文學程譯の分らぬものはない。それは人間と同じく曖昧模糊としたものであるといふ意味の事を言つてゐるが、人間生活と不離の立場にあり、人間生活から生みなされ或は人間生活それ自身とも言ひ得る文化は、實に多くの問題を含む点に於て文學と同樣に全く規定し切る事の出來ないものであるかも知れない。規定しようといふこと自身が間違ひであるかも知れない。

×

更に文化といふ言葉の中には實に數多くのものを含むがそれが現今に至つては益々分化發展の傾向をたどつて來て文學となり音樂となり哲學となり物理となり、更に何々研究となつて來た。然もこれらは單に人間がその本能的意慾によつて生んだのが夫々意義あるものとなり、逆に我々に作用するものとなつて來た。

×

この点から見て現今の凡て分化せられた文化なるものは我々人間が意慾の儘に作つたものと、更にそれが獨立して人間に働きかける作用を以てその使命とするものとに分れ、後者は人間を指導して行く所に生命を持ち、前者はそれ自身が、作られるといふ事自身で意義を充分に持つものである。小生は後者の代表を哲學に置きたく、前者の代表を文學や音樂に置き度い。

×

この他に今一つ考へられるのは人間の生存する所必然的に文化の生ずるのは、人間がその生命の保持といふ事と、如何に生きるべきか、又我等が棲息する場所は何であるかといふ本能意識によるものであらう。このために、醫術が生じ天文學が生じて來た。

尙この地に、これらを結ぶもの、或はそれからそれへと進歩する文化のための必要に應じて更に文化が生じて來たのである。

×

故に本來文化は人間と共にあつたものであり、人間より出たものであり、人間を離れて文化は存在せず、人間なくして文化の價値もない。

×

文化の使命は夫々の文化本來の姿を發揮する—いひ換へれば生れる事に於て價値あるものは生まされる事に、指導する事に於てあるものは指導せねばならない。然もそれを作る人間は逞しき生活力を持つものに限られる。この点偉大なる人間は偉大なる文化の創造者であり、所謂「北辰」は四高文化のバロメーターなり、の言の上に更に四高生各自の生活のバロメーターなりの言を加へ得る。

×

我々文化部の使命とする所は四高文化の發展伸長にある。言ひかへれば、四高生の各自の生活力を刺戟し、逞しき人間性を作るにある。然る後に始めてよき文化は生みなされ又文化が使命を發揮して我等に働きかけることとなる。

×

この点、四高鍛錬部は我が文化部の目的遂行のため一役割を果してくれるであらう。

×

我々の意圖する所も追ひ追ひ實行されるであらう。

（二六〇〇、二、二四）

文藝班

市川定三

「我等が今又文化の全盛を夢みんとして立ち上つてその第一回のもの」として送つた一學期の北辰會雜誌を見て我々は皆失望した。「これだけのものか」と思つた。然し學校から休暇中の課題として論文が出た時我々は「書く」と言ふことに對するこの氣運が二學期に必らず好結果を齎すことを信じてゐた。二學期に入つて我々は「今度こそ」と言ふ意氣に燃えて「紀元二千六百年記念特別懸賞募集」を意圖し之を發表した。所が學内新体制に四高生はだらしなくも動搖し遂に九月二十八日土曜日の勤勞報國隊報告會に於るが如き恐らく全國の高等學校にも例を見ず又四高創立以來未だ嘗つてない最大の醜狀を暴露した。諸君はまだ憶えてゐることゝ思ふ、あの時の光景を。

私は「已に四高も駄目だ」と思つた。「文化の再建」等と我々十數名の者が大呼するよりも尋常一年の倫理を說く方が餘程いゝと思つた。新体制に依つて北辰會は改組され文藝部は文藝班に變つた。そして更に「北辰會雜誌」の歸趨が云々されて來た。その時我々は過去の北辰會雜誌を提げて之に抗することが出來なかつた。過去のものが最上のものであるならば我々は已に見放したかも知れない。然し「決して過去の北辰會雜誌が四高生最大の所產ではない」と言ふ信念は我々を又立ち上らせた。そして全四高生に最後の一つ迄をも要求せしめた。その爲に我々は心ならずも苦

肉の策を取らざるを得なかつた。その結果は？その結果は矢張り我々を裏切らなかつた。去年の二學期の應募篇數二十篇、枚數四百が今學期は何と應募篇數九十篇に垂々とし枚數は千枚を越してゐるではないか。而もそれは單に量的な增大ではなく質的の向上であることを知つた時我々は本當に喜んだ。だがこの一現象を指して直に文化の向上と言ふのは尙早である。文化と言ふのはそんな一朝一夕で向上するものではない。文化は不斷の努力を續ける時やつと緩漫な上昇を示し一刻でも努力を惜しむ時急激な降下を示すものであることを諸君は銘記しなければならない。今や我我一同新しく犬塚敎授を班長に戴いて再生の意氣に燃えてゐる。來年の北辰第百五十號を目指して。

尙長い間文藝部の爲に色々御盡力下すつた伊藤敎授に對して一同深く感謝致して居ります。

○第一回座談會　十月四日　北辰會雜誌百四十七號批評會犬塚敎授御出席

一學期の投稿者集合して掲載作品及び不掲載作品に就いての批評會を行ふ。出席者數名なるも眞摯に意見を發表し加へて文藝班全体に關する考へ等をも交換し合ふ。

○第一回自由詩研究會　十月二十三日

同好の士寄りて自由詩研究會を開く、先づ詩の本質論より入りて一同論議す。

○第二回自由詩研究會　十月三十一日

作品批評

○第二回座談會　十一月三十日

ゴールズワージイ研究井上敎授出席

○俳句會誕生　十一月六日

大河敎授御講演「蕉風發展の一契機について」

出席者　二十名

○紀元二千六百年特別懸賞

入選作品及び作者

論文　一席　小川常人

短歌　二席　廣瀨治郎

二席　小川常人

俳句　二席　目崎德衛

二席　澤木欣一

其の他該當作なし、佳作は略す。

○中河與一氏講演及座談會開催　十二月十日

演題「日本文學の構想」參會者約百名

○圖書交換會

第一回　十一月二十二日

成績不良、出來る丈利用されたし。

○「北辰」第百四十八號（紀元二千六百年記念號）發行

短歌會

廣瀨治郎

この道に寂しき光常にありていくたり
人を行かしめにけり　赤彦

何かある。我等の前途には何かある。光――さうだ。確かに光だ。併しそれは惶々と輝いてゐる光ではない。寂しい光だ。然も淸らかなる光だ。我等はその光を求めつゝ歩んでゐる。併しその光までどんなに道は遠いことだらうか。幾度かつまづき幾度かころび、或る時はこの道を歩むのを捨てようとさへ思ふ。併し一度この寂しき光の存在を知つた者はその光から離れることは出來ない。寂しい光だ。寂しい光と知りつゝもこの寂しい光を求めつゞける。それは內心の欲求なのだ。その光は手に入れることは出來ないかも知れない。幾人かこの光を慕ひつつ求めつゝ死んで行つたことであらう。そして又今後幾人かこの光を慕ひ求めることであらう。寂しき光はいつまでも寂しい光を持ちつづけてゐる。それは永遠に消ゆることの無い光なのだ。

山深く起き伏して思ふ口髭の白くなる
まで歌をよみにし　赤彦

赤彦が晩年になつて自己の辿つて來た道をふり返つてかく詠んだ。赤彦は一生歌に精進しつづけた。この寂しき光を求めつゝ限りなき辛苦の道を歩みつづけて來た。「口髭の白くなるまで」といふ感慨がどんなに深く我等の胸を打つことだらうか。

生きも死にも天のまにまにと平らけく
思ひたりしは常の時なりき

我が命惜しと悲しといはまくを恥ぢて
思ひしはみな昔なり　節

此は長塚節が喉頭結核にかゝり打ち捨てておけば餘命は僅かに一年を保つに過ぎずと醫師に宣告された時に作つた歌である。又死に近き母に添寢のしん〳〵と遠田のかはづ天に聞ゆる

桑の香の靑くたゞよふ朝明に堪へがたければ母呼びにけり

死に近き母が額を撫りつゝ涙ながれて居たりけるかな

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり　茂吉

齋藤茂吉の「死にたまふ母」の數首であるが、かうした心境は短歌でなくては言ひ現はせないものと思ふ。重病にかゝつた時、親に死なれた時の心境は成程散文でも、詩でも、俳句でも表現し得る。併し三十一文字の短歌から受ける感銘はその調べ、形式、言葉――かうした短歌獨特の要素に依つて絕對に短歌のみしか傳へることの出來ぬものなのである。そこにこそ短歌の特異性がありの生命がある。唯三十一文字――それがどんなに我等に深き感銘を與へることであらうか。萬葉集の歌が當時の實感をそのまゝ我々の心に傳へ、當時の萬葉歌人の感銘がそのまゝ我々の感銘でありかくして永久に日本人の心に次々と傳へて行く。

歌は勿論人間の全人格のあらはれである。又さうでなければな

らぬ。人間は自己の心情に感じたもの、抱いてゐるものを何らかの形式で外にあらはさずには居れない。それはその人自身の實感のあらはれである。そこに自ら個性があらはれて來る。生命のある歌は又當然一個性のあらはれてゐる歌である。それ故歌を見てその作者の性格を知り得るといふことも尤ものことである。歌を作るといふことは決して單なる道樂でもなければ慰みでもない。それは藝術であり生命である。佐千夫は叫びといふことを强調してゐる。短歌に生命を附與するにはどうしてもこの叫びがこもつてゐなければならぬ。歌を作る時は感情が高調してゐる時である。悲しみであれ、喜びであれ、ある感情が高調して來てそれを禁じ得ざる時、それは我知らず叫びとなつてあらはれるのである。

物いはぬよもの獸すらだにもあはれな
るかなや親の子を思ふ

山はさけ海はあせなん世なりとも君に
二心我れあらめやも

等は叫びの歌として好例である。勿論叫びの聲は自然描寫の歌にもあるのは當然である。かうした歌の生命と叫びといふ事を考へてみれば萬葉集と古今集の歌との優劣は自ら明かとならう。生命のある歌はそのまゝ常に藝術的新しみをもつてゐる。たとへ作者の考へ、作者の見た物、取扱つた材料が皆詩的な材料であつても、その歌全体としての生命が宿つてゐなければ、その作者の心情に觸れることが出來ない。我々はその歌にこもつてゐる生命を通してのみ作者と一体一心になることが出來るのであるからである。

短歌に生命を與へるためには叫びのこもつてゐることは勿論としてその他表情の自然的聲調や個性的感情の表現等が重要な要素である。同じ内容の事を表現するにしても、一語句の相違で歌全体が生きもし、死にもすることがある。生命のある歌の一語一字を代へれば最早全く生命が失はれるといふことは容易に肯けるであらう。併しかうしたことは極めて複雜難解で、唯一首一首の歌について實際に研究するより他に方法はない。

一首の歌が生命を得るのは天地一切の生物が生命を得るのと同じ樣に複雜な神聖な意義を有する。

以上は自分が日頃短歌に對して抱いてゐる感じをわづかにその一、二を記したのに過ぎぬが、何らかの參考となれば幸である。

（一一・九）

俳句會

澤木欣一

復興の言葉

森羅萬象の奥より滾々と溢れ出づる泉
多岐なる人間生活の崖に露頭する金剛石
之吾が民族文學たる俳句の姿である。

俳句の眞髓は永遠に流動する生の体驗の新しい光に照らし出さ

れた萬古不易の「永遠性」の諦視表現である。譬ふれば滾々として流れ來り流れ去る宇宙の大生命が一面吾々の体驗として意識に不斷の流動を形成すると共に、他面之を通して永劫に變らぬ寂然不動の大自然の河床を瞥見する文學である。

俳句は斷じて風流人の遊びでもなく老人の退嬰的嘯きでもない。

あらゆる現象の奥に、人間的眞理を透視する逞しく嚴肅なる積極的藝術である。

東洋藝術を貫通する此の精神は芭蕉の俳諧にいみじくも凝粒せられた。

顧みれば嘗て北陸に雄飛せし四高俳句會の沈滯は十數年に及ぶ。吾々はこゝに紀元二千六百年を記念すべく、新しき傳統の炬火に再び点ずべく俳句會を復興せんとす。

同好具眼の士は集れ！　來りて東洋的幽玄の扉を敲かれよ！

吾々は俳句創作の喜びの内に深遠極りなき民族精神を把握しようではないか。

昭和十五年十一月三日

――×――

かくして大河教授の御盡力と多數同好者の集ひによつて、俳句會は誕生した。

吾々は青年の若い情熱と共に、あく迄も謙虛なる態度を以て、遠い道を歩いて行かうと思ふ。

○大河教授御講演及座談會　十一月六日

演題「蕉風發展の一契機について」

世界に問ふべき日本文化の精華は、萬葉の歌に太古の響きを起し、平安朝の叙事文學を生み更に雪舟の繪を形成し、芭蕉に致つて深遠極りなき境地に達した。今後の日本文化の行方は？吾々は誰もが現代のカオスの中に於て模糊たる寂光を、未來に感得してゐるに相違ない。新文化は傳統の流れの内に於てその流れを超克し轉回させることによつて、生れるであらう。

吾々單に俳句を創る者といへども、此の傳統の源流の探求より初めねばならぬ。嘗て加賀の俳壇は芭蕉の流れを汲み俳諧史に巨歩を印した。將來吾が俳句會により加賀俳壇の研究も實行されねばならない。

○第一回句會　十一月十二日　出席者十四名

○中村草田男作品批評會　十一月二十七日

なほ、初めて俳句の道を志す吾々の勉强のため加藤楸頓著「俳句表現の道」を第三學期に熟讀するつもりである。一般同好の士の御支援を乞ふ。

映畫研究會

瀬戸健太郎

「黒蘭の女」「空想部落」批評會
「美しき青春」「最後の一兵迄」批評會
「嫁ぐ日迄」シナリオ研究會

一學期私達は此だけの研究會しか出來なかつた。何れも研究不足のため芳しい成績ではなかつたが特に「嫁ぐ日迄」のシナリオ研究が用語研究に終つてしまつたのは殘念だつた。

夏休み、不圖した機會から大船撮映所見學が出來る事になつた。會員以外の人も四、五人一緒に這入つた。

先づシナリオ・ライターに會ふ。映畫資本家、會社重役連の壓迫からか全く無氣力、無氣力に慣れて舊套を守るに汲々としてゐるから益々悲慘である。彼等の手から出來る映畫の骨組ぢや心細くて見てゐられない。

「若草」の撮映を見る。汚いセットの中で彼等は煙草の煙を絶やさない。ほんの二、三カットだつたが下らない事に時間をかけて二時間近くも經過してゐる。私達は此日迄、日本は監督システムで監督の一本の映畫に於ける地位の大きい事を信じて來たが監督は機械だつた、むしろ油だつた。パプストの樣にコンテイニュイティだけ作つて殘りは他に任せてしまふ人の居るのも無理はない。

私たちの對象たる映畫が娯樂と見做され、私たちはウイークデイにはシャットアウトされる事になつた。文部省推薦の優秀作品が續出する樣な映畫界たり得れば良いが、現在の所、推薦映畫以外に見たい映畫のないのが不思議だ、日本映畫は低調をかこつてゐる。……

「浪花女」「晴小袖」
「民族の祭典」
「風の又三郎」「小島の春」
「本年度金澤上映映畫ベストテン募集」
批評會

今學期の批評會は眞面目に研究して來た人達の御蔭で大体巧くいつた。

ベストテンも大体無理のない順位になつた。文化映畫が共に二位に進出したのは面白い現象だ。此の方面の發達が大いに期待される。

四高生の映畫觀賞も大体良い方向に向つて來たのは嬉しい。綜合藝術の映畫を藝術として考へて呉れる人達の增える事を望む。

教養班

安田道夫

私は何と云つて報告を始めたらいいか分らない。

二千六百年の世紀の祝典を旬日の後に控へた教育勅語御渙發五十年記念の意義ある日、私はその感激をもつて報告を書いた。そして今ここに餘りにも深い哀愁と、運命の氣儘に對する不可解に

沈みつゝ稿を變へねばならぬとは何と云ふ無常なことであらう。

しかし先生の死は大きく靜かであつた。それがせめてもの慰めである。先生の御葬儀は富山縣北蟹谷村の御自宅に於て六日行はれ教養班としても參列深く弔意を表しました。私は今倒れさうになる理性の支柱を漸くにしてもちこらへつゝ砂を嚙む樣な思ひで報告を始めねばならぬ。

畏くも御勅語中の「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」なる御言葉に拜する如く、實に現在こそ吾が國はその重大時機に直面して居り、それ故にこそここに新体制の要請實現を見たのであり、ここに於て吾が四高ではその指導的位置の自覺から率先實踐に移り、北辰報國團の結成を見たのである。その組織に於て、吾ゝは舊組織の講演部、經濟學研究會、佛教青年會、基督教青年會、英語會、佛語會の一部五會を綜合し、木場教授を班長として文化部教養班を構成した。今この組織を檢討することは差控へるとしても、その未だ粗雜不完全にして將來吾等の手で改革すべきは勿論の事であり、特に吾が班はその構成上無理な点が多い樣に思はれます。併し、今一度冷眼溫情をもつて顧る時、此等一部五會は決してその性質を全く異にして居るとは云ひ得ず、その矛盾的素質の中に理念を見出し、育て上げ、行動を律する樣、意志するのこそ尊いと信じます。卽ち各ゝその個に徹してその中に宿る普遍を發揚して歷史的創造に死なむとする自己を世界人生の中に einbilden せむとするこの努力過程中にこそ、更に換言すればヘーゲル的精神的存在の内的價値把握、存在より意味への轉換による生活形成こそ——が眞の Bildung であり、さればここに一層教養班の使命の重大と意義の深遠を痛感するのであります。吾ゝは一つの標的と一つの愛をもつて行爲し、その實行には各部會とも、その孤獨を守り胸を開いてこの新らしい堅實な眞實の歩みを踏みしめる覺悟で居ります。

講演部では、一學期末犬丸部長の御轉出の爲再び木場教授に部長を御願ひ致し、テキストは佐藤一齋の「言志四錄」(岩波文庫)を用ひて毎週水曜業後文甲三ノ二教室に於て輪讀了解を行つて居ます。思ふに所謂新体制は、その凡ゆる愼重にも拘らず、特にその基底的な倫理思想に於て德川封建時代の彼の不道德的と非難されるそれへの逆轉の危機がはらまれては居ないだらうか。そして所謂軌道に乘つたと云はれる思想的方面は非個性化に依る形式的低調に墮することを意味しては居ないだらうか。或ひは其の中には假面を被れる貧弱危險なる思想の蠢きを見出し得ないか。とまれこの一本的統一の中には既に避くべからざる矛盾と、近き將來に於けるその發現としての激しい思想的混亂が豫想されて居る樣に思はれる。社會に於ける吾人の位置を考へる時、その混亂に直面し打開指導の重責に衝るのは吾人を除いて何所に求められるだらうか。この國家人類の絕大の期待と、内奥より迫り來る使命感が吾等をして「言志四錄」の把握による「腹の錬成」に向はせたのであります。復歸卽前進の信念と、現今を押し出し來れる思想史の流れを傳統承受の地盤としてそこに個性の發揮と創造を見ると云ふ確信が德川幕府官學の大朱子學者一齋の懷中に飛び込み、そ

の矛盾的苦惱の中より新生を養出し、現代思想を飛び超えむとする吾等の「意志」を發現させたのであります。

"Ihr hattet euch noch nicht gesucht ; da fandet ihr mich. Nun heisse ich euch, mich verlieren."この叫びこそ正しく深き意味に於ての眞の新体制の聲として吾等の胸底に響き、その兩足を現實の大地に立たせるのであります。秋の夕闇が靜かに教室に流れ込み、文庫本の字が薄黑い數列になつてしまふまで、「學莫要於立志」と爲學故讀書の意氣に燃えて讀み解し行く思ひ出は吾等の生涯忘れ得ぬものになつてしまひました。志を内に發し正定受の位に腹を据ゑもつて一念發起せよと云ふ。

今は亡き木場先生の御諭しこそ、この教養の意志こそ新体制の根本的原動力であると信じて居ります。

この根本的基調に於て、吾等は十月上旬近衛聲明を中心に「新体制に關する座談會」を木場、向居兩教授御出席の下に二十名參會し談じ合ひました。又同下旬班幹事任命に引續き班内今回の講演會は、社會思想問題熾烈なりし頃講演部長として迎へて以來涙ぐましい御盡力をされ、又北陸佛教青年會には並々ならぬ御努力をもつて御指導を惜しまれず、今先には教養班長として戴いて來た故先生の靈を御慰めするものとして、そして又それ故に、共に四高文化の精華と水準を示すものとして頗る重大な意義と使命を有するものであります。又その他今學期は十一月中旬に「直毘靈」の座談會、及び秋山教授に「文化と劃一」についての御講演を、又向井教授には先生の學會發表論文について御講演を御願ひし、合せて座談會を行ふことにしてゐます。名士招待講演會は木場教授の御急逝の爲一時頓挫を來しましたが、高坂、梅原兩京大教授を御招きする豫定で居ります。

校内に於ける新体制組織は誠に激しい急變であり、爲に十月は全く其の編成に追はれて落着かずに過ぎてしまひました。しかしもう北辰報國團の方針も大略乍ら目安がつきました故十一月はその挽回にも猛烈な勇をもつて頑張り、故木場先生の御遺志の中に生きて四高文化の指導的位置に恥づかしからぬ實力を養ひ、傳統的榮譽を一層高揚すべく覺悟を固めて居ります。

（十五・十一・七日）

興亞班

木下圭紹

今や世界史は重大なる轉回を遂行しつゝある。國際情勢の變轉はその極まるところを知らず、人類は擧げてその苦惱の中に雄々しくも鬪つて居るのだ。嵐の如き急激なる轉回期に面し、舊來の世界秩序は脆くも崩壞し、新しき世界秩序が創造されんとして居る。支那事變・歐洲戰亂こそは、新しき建設に目覺めた若き魂の胎動ではあるまいか。

大政翼賛運動は發足した、昭和維新の大運動は出發したのだ、而してその前途多難なるは論を待たない、此の運動遂行の任は實に我々青年の雙肩にかゝつて居る。由來、社會進化は青年に依つ

てなされて來て居る。理想への憧憬と破邪顯正の淸純な魂、飛躍への情熱、此等の融合した、熱烈な青年の力が新時代建設の原動力たるは當然の事ではないか、ドイツを見よ、イタリーを見よ、……

……興亞の大使命を擔ふ我等の責務亦大なる哉である。

昨年七月斯る自覺のもとに誕生を見た東亞研究會は今回の校内新体制の結果、名も興亞班と改め、文化部の一部門として再出發することになつた。東亞研究會時代の成果を見ると、開拓者の苦みを味ひながら、諸先生、先輩の御助力のもとに、どうやら歩み來つたといふ感が深いのである。

次に十月二十八日總會にての協議事項を記載する。

班の理念……青少年學徒ニ賜ハリタル御勅語を奉戴し、興亞精神發揚、四高文化の發展に邁進する。

組織……舊來の如き、政治經濟、民俗宗教等に分立せず、興亞班のもとに一元化す。

事業……實踐的行動的が眼目

一、講演（地方巡回）（學内）從來の知識偏重を止め、實踐運動をす。興亞問題

二、名士招待講演　興亞問題

三、研究　1興亞問題　2興亞先覺者の研究）日本精神の昂揚

四、雜誌發行

大要右の如きものである。

現在班員約三十名、皆熱烈なる憂國の士とて總會も盛會であつた。勿論我々の班は未だ若く且完全なものでもない、然し創造の意氣と熱に燃ゆる若人の魂だ。今後の動向を刮目して待たれたい。

音樂班

村本登

今學期始めに、去る一年半合唱團の指導者として熱心に盡力して下さつたマクソン先生の歸國にあつて、可なりの動搖を受けましたが、何とか練習も早く始められる運びになりました。

近年、音樂部從來の同好會的な色彩をなくして、部としてがつちり構へて行かうといふ傾向は增々强く、又今後もこの方の助長に努めて行きたいと思つてゐます。團体的精神や他との協調の精神の涵養にも、合唱や合奏は最適のものと信じます。

部員は昨年より一名減少して十五名、新体制と同時に募集して見ましたが、一名の加入者もありませんでした。然し、昨秋のマンドリン・クラブ結成等によつて班の内部には新しい空氣が感じられます。又管絃樂の再興に向つても、少しづゝ基礎を築いて行きます。よくある事の樣ですが、「音樂はいゝが、譜が讀めない」等々、こんな人は一足飛をする事ばかり考へて、着實に一歩一歩進んで行く事を忘れてゐる人ではないでせうか。實際、譜法といふものは音樂の呪ひでせう。形而上的な抽象の美、流動する非實体的な思想を、無理にあてはめられた樂譜は音樂である筈があり

ません。これを適當に解釋して音樂にする事が卽ち音樂する事、換言すれば演奏する事です。他人の思想を行ふ事が音樂を行ふ事です。總てさうでせうが、音樂する者は己の藝術の本質を自らのうちから取らねばならない。この邊の事情が分つてくれたら音樂といふものがもつと親しめるものにならうし、レコードは聞くが、やる氣がないといふ變態的な狀態からも拔けられる事と思ふ。

新体制による校友會改組と、部員の相次ぐ事故の爲に、秋季の演奏會も危まれましたが、十一月九日無事終了しました。我々の演奏會も漸く認められて來たものか、聽衆八百といふ人氣でした。レコードコンサートは左の如く

一、ヴアイオリン協奏曲　ベートーベン
二、第五交響曲　ベートーベン
三、アル、の女　ビゼー
四、未完成交響曲　シューベルト
五、第四交響曲　ベートーベン
六、スペイン交響曲　ラロ
七、スプリング・ソナタ　ベートベン
　第九シムホーニ　ベートーベン
八、胡桃割人形　チヤイコフスキー
　伊太利綺想曲　チヤイコフスキー

今度學校の方から電蓄も買つて戴きましたから今後一層回數も多くし又、嗜好の調査等も時々やつて眞に全四高生の爲めレコードコンサートとして行き度いと思つてゐます。

科學班

瀨戸　清

今度校内組織の改革にあたり、文化部中の一班として從來自然科學方面の研究會であつた、理化學同好會、生物研究會の二會を包括し、科學班と命名せられたのであるが、この班に屬するのは前記の二會に限られるのではなく、將來もし天文等の他の自然の研究を目的とする會が誕生する時には是等をも科學班中の一員として一括して含み、以て班の發展に努めんとするものである。

周知の如く科學班は眞面目なる態度を以て、有るが儘の自然の姿を研究し、その眞髓を把握する事により班員の科學に對する認識、科學研究者としての態度を涵養し、進んでは國家の科學振興を致すべき基礎の確立を目標とするものである。特に現今は世を擧げて緊張の眞中にあり、我國も又未曾有の局面に逢着し「東洋平和、世界平和の確立」の聲が國内に國外に滿ち充ちてゐるのを聞く時、又之が遂行に不可缺な科學を振興させ、世界一流のものに高めるべき重大なる責は繫りて吾等理科生の頭上にあるのを知る時は、我が科學班の使命たるや、又重大なるものがあるのを感ぜざるを得ないのである。

然るに省れば從來科學者の内には自己の研究方面にのみ沒頭し、斯道には詳しいが、他方面に於ては殆んど未知に近いと言ふ狀態にある人が少くなかつたやうに思へる。その爲當然開かるべき道が開かれなかつたり、又科學的に許容し得ざるが如き學問の

研究法も皆無と云ふわけではなかつた。一例を擧げれば、從來、物理・化學の知識、特に化學の蘊蓄の割合に豐かならざる人達が生物學や醫學を研究したために、その發達の障害が大きかつた事は吾人の良く知る所である。

かゝる事であつては、將來世界の競爭場裡に於て立つ我國の科學を水準位以上に保ち續けるのは困難になるのではないかと思ふのである。

この意味に於て、將來の日本の科學を推進すべき吾々が、その基礎を固める今日に於て、互に他の自然科學の部門との接觸の機會をこの科學班内で持つ事が出來るといふのは誠に有意義な事であり、それぞれの會員相互の間で喜ぶべき事であると信ずる。

一般によく言はれる事であるが、日本人は科學的素養が足りないと言はれる事は閑却し難い事である。實際我々の行ふ生活は相當非科學的傾向が多分にある。これは誠に遺憾な事であり、世界一流國民として是非とも改善すべき事であらう。何も私はすべてを科學的なれと言ふのではない。非科學的であるべきものは非科學的で結構である。しかし科學的たるべきものは、「國民の科學知識の程度が將來を決定する」と迄に言はれてゐる今日、是非さうあつてほしいのである。ともあれ我々科學に進まんとする理科生中より生活中に、より多分の科學を取り入れ、進んで自然の眞の姿を認識して、自己の事物に對する眞面目な態度を涵養すると共に延いては將來國家の科學方面を背負つてゆく力の根源の養成を目指し、その完璧に近からんと期するものは振つて科學班に入つて共に同好の道を歩んでくれるのを心から期待するものである。

次に科學班の行跡を一覽に供する。勿論爲した事の眼目だけである事を注意されたい。

理化學同好會（十五年度）

實驗　水の硬度測定、水素イオン濃度測定、X線寫眞、放射性元素の乾板感光

講演
一、「時間と空間について」　金崎教授
一、「重水及び重水素について」　杉浦講師
一、「北朝鮮及び樺太に於ける化學工業について」　橙本教授

見學
一、「物理學史」　古谷教授
一、「科學と迷信について」　金崎教授
一、電氣冶金工場、工藝指導所

生物研究會（十五年度）

實驗
一、校内プール及び水道水中の細菌數調査　（中島　利夫　秋田　章）
一、寮の風呂水の細菌數の時間的變化　同　右
一、アヲキの葉插に對する種々の化學物質の影響　（安田　和夫　澤田　悌三）
一、ホウセンクワの色素吸上實驗　日置辰一郎
一、河北潟のプランクトンの調査　（高木康敬、安田和夫　中島　章、吉村　淳）
一、溫度の變化に依る根の伸長曲線の作製　松井　邦夫
一、水道水中の細菌の時間的變化について　（酒井　章　瀨戸　清）
一、芽の伸長力の測定　中谷　修一

講演
一、臺灣旅行談　（熊澤　敎授　日置辰一郎）
一、南洋群島旅行談　熊澤　敎授
一、皮膚機能について　金澤醫大助敎授　三木博士

この他に毎週一回例回を開き會員の研究結果發表などを行ふ規約である。

以上

後記

懸賞應募作品に就て

應募篇數九十篇原稿枚數千枚――意外の投稿數の爲銓衡に苦しみ、惜しい作品をも割愛した。その点を諒承せられ不掲載の者も落膽せず一層努力を切望する。

投稿數は論文は十九篇小說は十一篇詩は十六人短歌二十三人俳句は十三人雜記七篇、その中入選は論文八篇小說二篇詩十一人短歌十九人俳句九人雜記一篇である。

論文は大体豫期通りであつたが創作が一篇もないとは殘念である。オリヂナリテイの貧困とはこの前にも言れたことだ。飜譯の多いのも結構であるがかうした点を反映するものであるものとしたら考へなくてはならない。飜譯の類を設けなかつた一つはかうした意圖に基くものである。

短歌は益ゝ盛んになり今度新らしく誕生した俳句會、自由詩研究會が動機となつて俳句、詩も勃興の夜明け前に在る。

クラスとしていゝのは文甲三ノ二、文乙二、文甲三ノ一、文甲二ノ一、理甲三ノ一、理乙二の順であり科別・學年別に見ると三年文科、二年文科、二年理科、一年文科、一年理科、三年理科の順であり、又全文科の方が全理科よりよく、一・二・三年は全く丁度一對・三對・二の比であるのも面白い。理科生及び一年生の活躍を期待する。

飜譯について（主に小說の）

屢ゝ言はれる如く飜譯には飜譯の創作性と言ふものが必要である。字引の譯を杓子定規に當て嵌めて行く丈なら外國語の單語を邦語の單語に置換する單なる一肉体勞働に過ぎない。飜譯をする者は先づ國語の性格に就いて或る程度研究してゐなければならない。又それと同時に哲學の論文を譯す者は哲學に就いて相當の理解がなければならないし小說を譯する者は小說に就いて相當の知識がなければならない事は勿論である。小說で言ふならば川端康成のリーシズムと高見順のリアリズムとではその小說に於いて全く違ふし同一の作者でも作品に依り題材に應じて文章が違ふ。卽ち

一、如何なる文章がその作品全体の持つ雰圍氣を出すのに適切であるか

と言ふ点に氣をつけなければいけない。

次に

一、言語の階級性

に就いても考慮しなければならない。單に男女性や年齢性のみならず。又

一、語　感

が相當大きな影響を與へる。

「偉人」と「偉い人」は違ふし「とても」と「非常に」とも同じではない。要するに

一、一目見て飜譯であると分る樣な文章はいけない。

小　說

幼な日記

文体の亂れと形容の不自然が所々に目立つ。そして尻尾のないとんぼのやうに此の

小說は原稿紙の上でをどつてゐる。

要するに未完成、今後に期待、純粹性があるやうだ。

「むらぐも」

不可解な男が不可解なことを考へてその不可解さに氣付いてゐない。そして作者の小野にたいする態度も又不可解だ。おそらく作者も天井のくものすを見ながら紫煙の跡を追つて之をかいたのだらう。ねづみにかじりちらされはパン

殘骸が日光に灰青い反射をみせてゐる。

文章に難あり。

病　氣

作者はどうやら新しい方向に向はんとしてゐる。この上は二度三度生活に苦惱をかんじないやうに、只これだけのもの――何の感興もない――

もつと物をかくことを消化して欲しい。

〃死〃

前の作品と同じ作者のもの。

自分がぢかにふれた肉親の死について何物を摑まうとしてゐる努力が少し表はれてゐる。併し皮相的である。足が地に浮いてゐる。もつと心にせまる心をうつたるものが出來はしないか。聯關性の不備、作者の見方の一面さがさうさせるのかもしれない。中途反端だが新人として期待がもてる。

〃つまらない日〃

作者の心情を愛す、只それだけ。

たれもが味はつたことのあるやうな子供時代の感情が畫かれてゐる。しかしそれでゐて讀んだ跡の微笑が崩れるのはどうしたわけか。此處に作者に一考をうながす。

單に短いものが短篇小說ではないのだ。

三學期をまつ。

「軍港娘娘記」（市川君）…（掲載）

プロットの組立が嚴格でないため一つのシーンから次のシーンへの連絡がぎこちない。女の性格が一つ〳〵を見れば相當適確に描寫出來てゐるのに讀後それ等の印象が混亂するのはそこに原因を有する。だらう。文章は以前の作品に比べると格段の相違がある。文章全体からその雰圍氣を出すことに成功してゐる。唯もう少し切込みを深くすることが必要である。短篇としてよりも長篇の一章として見た方がいゝ。この作者特有のリアルな作品。創作數篇の中掲載出來るのはこれ丈とは情ない。

短　歌

（掲載作品は短歌會々員の諸君の意見を參考して決定した。）

「秋雨」（安田道夫）

附添ひの老いたる女倦み果てゝ空襲を
語り秋の日暮れぬ

之は可なり特色ある歌である。何ものかを摑まんとしてゐる努力の跡が分る。併し未だ思つてゐる感情が十分に言ひ盡されてゐないのではなからうか。

故木場教授追悼の歌は三首ともいゝ歌だ。唯細かい点では最初の歌の「二十日前」といふ言葉が歌全体として見た場合に果して利いてゐるかどうかは疑問である。最後の「語りたきこと一つあり」の歌はその語が切實であるだけに結句にもつと力のある感情の高調した言葉がありたい。

全般として調子がしまつてゐて良い。唯「海人の」の歌にしても「混沌の」の歌にしても語句の撰擇について再考ありたい。

混沌の世は身をすてゝ大君に仕へ果て
なほ秋のますみに（新体制）

はこのまゝでは決して良いとは言へぬ。特に「秋のますみに」と最後につけたのは悪い。併し内容の新しい歌として紹介のつもりで採つた。かうした内容の歌は今後我等が大いに研究せねばならぬ。

「榛名山偶居」（小川常人）

流暢な調子と美しい敍景。前號の批評がそのまゝあてはまると思ふ。

桃二つ朱塗の盆にのせて來し老婆も日
毎の暑さを言ひぬ
檐端さへ見えず霧りたる山深き朝の宿
場に乘合着きぬ

等は從來の歌とは一つの進歩を見せてゐる。一般に語句はよく選んであるが、その調子が餘りに流暢なため却つて感情が弱くなり例へば「見遙かす」「寒き日は」等は少し平凡になつた樣に思はれる。木場先生を詠んだ歌は趣向が變つてゐて然もよく君の心情があらはれてゐる。唯惜しいことは最後の「心和みつ」が弱すぎる。之を改作すれば立派な歌になると思ふ。

「秋鳥の群」（廣瀬治郎）

秋鳥の群飛び去りし楢林靜寂の中に我
息づけり
日暮には衞荷畑に秋風の止むときなし
に悲しかりけり

又「秋深き」「朝まだき」の歌も敍景の歌として自分は愛着をもつてゐる。他の歌の中には例へば「黃葉に」「秋深き」等未だ十分こなせない所があると思ふ。諸賢の批評を待つ。

「戀ふる日」（和田清彦）

「もの戀しく」「歸省日を」の歌は言はんとする所を十分に表現し盡されてゐない。材料（和歌を作る感興）を多く持つてゐる君はその表現法を研究してほしい。

故木場教授追懷の歌は内容がはつきりしてゐるだけにいゝが、稍着想が平凡である。もう少し個性を表はしてほしい。

「四高生活三年間懷古」（中村峻）

晒射す入日のどけく背に受けてたゆた
ふ紫煙に暫時見入りぬ

一日の授業を終へて氣樂な氣持がそのままあらはれてゐる。併しこの歌に限らず一般に實感をそのまゝ歌つてゐるのであるが、調子が輕くて餘り苦心してゐない。日記に書く時等よくこんな歌になるものであるが、歌としてはもつと苦心してほしい。

「祖母死去の報を得て」の歌など中々いい所を捉へてゐるが、惜しいことに言葉の用ひ方が輕卒である。例へば「奇しくも逝し」「我や今」等は再考すべきである。

「兄の出征を送りて」の歌は平凡とはいへ何か確かりしたものがある。最後の「時計止まりて」は事實としてもこの場何かわざとらしく感ぜられる。この語は全然不必要である。

「秋の風」（石上晃）

甲高く百舌鳥は叫びて朝明けぬオレン
ジの杜に霧深き所

君が詩を作つてゐることを思へば肯けるが非常に詩的である。悪く言へば詩の一片である。短歌が短歌である以上その獨色を生かしてほしい。併しかうした行き方を深

めてゆけば君獨得の新鮮さが出て來て捉らはれの無い活潑な歌が出來ると思ふ。

「切支丹信徒」（宮川浩）

皆整つた歌である。靜かに手際よく歌ひあげてある。併し「きりしたん信徒」「母一人」の歌には未だもの足りない所が無いでもない。かうした所で今ゆきづまつてゐるのではあるまいか。一度此の殼を破つて少し亂暴でもよいから力ある歌を詠む練習をしたら一段の進歩があらう。

「朝の峠」（仲谷一男）

君の應募歌は一般として餘りにボツンボツンと切れてゐる。歌らしい言葉を並べただけで未だ短歌になり切つてゐない。その中比較的いゝものを二首採つた。二首とも君が將來伸びる可能性が多分に含まれてゐる。多作並びに推敲に努力することを望む。

「梧桐」（安嶋彌）

提出歌九首は皆もう一歩といふ惜しい作だ。相當苦心してゐる後は見えるが、未だものたりない所、不注意な所が多い。たとへば不掲載作品の中

雨けぶり水かさ増しゝ犀川に魚釣る鈴
の響靜けし
河鹿にも似通ひて聞ゆ茅蜩の黃昏の中
に我が耳近く

之らの歌をよく考へて見れば自らその缺点が分るだらう。もう少しずつとよい歌になる所だ。

「砂丘」（神田郁夫）

四首の歌皆君の歌風があらはれてゐる。ゆるやかな調子の中にも一種の情熱がうかがはれる。いつとはなしに君の氣持の中にひき入れらる。

新しき足跡を見出でてしばらくは追ひ
て見れども人には會はず
この歌等趣向が新しく面白みがある。唯もう少し表現を考へ直すならばよい歌となら。

「庄川にて」（池保）

應募歌六首もう少しの所で陳腐に終つてゐる。もつと歌を大きく強く把握してほしい。

我が汽車の傾くまゝに書物置きてふと
見出でたる雪の立山

旅ではよく經驗する感興であるが、此の表現法では未だ〳〵不十分である。之に限らず一般にもつと強みのある歌を作る樣心掛けてほしい。

「切子燈籠」（橘正明）

脚腰のいたむといひて二階には上らず
歸る祖母老いにけり

一時「生活の歌」が盛んに言はれてゐたがこの歌にも一種の生活感情といふものがあらはれてゐる。他の歌を見ても君がかうしたゆき方は今後益々伸びると思ふ。

押せどならぬ鍵もありしが幼稚園の古
きオルガンいかになりけむ

何でも無いやうに言つてあるが靜かに讀み返して見るといかにも懷古の情があらはれてゐる。四高短歌會の中堅として大いに活動されむことを望む。

「白山に登りて」（山形利一郎）

天峻る白山の峰は明けそめておのもお
のもの谷に雲這ふ

「白山に登りて」三首の中最初のものである。三首は皆形式は出來てゐるが、他の二首は表現法が不十分である。この歌も下二句

が未だ力が弱い樣に思ふが三首の中では一番よい。參考のため他の二首を記しておく

雲の上に眞紅の朝日射しのぼり大和の國は今明けにけり

白山に朝日照り映え我が妻山下埋めし雲に寫れり

長塚節歌集（岩波文庫）「乘鞍岳を憶ふ」の歌を參考されたい。

應募歌中の「蛙の子」「雜」の七首は「白山に登りて」の歌とは大分見劣りがする。その中「アルプスは」の歌一首を採つた。

「鈴懸」（宮地知男）

應募歌は二十四首の多數に及んだが、餘りいゝのはなかつた。君の歌は少し投げやりすぎる。いはば「作りぱなし」といふ感じだ。もつと〳〵眞劍な態度で歌に臨まねばならぬ。歌全体のもつ生命といふ事を考へてほしい。二十四首の中掲載の四首は比較的いゝが、もう一歩つゝこんで表現してほしい。

「旅」（立野達郎）

故郷の人となのりてきし男心ひろげて話盡きせず

よく氣持の表はれてゐる歌だ。實感がそのまゝ歌となつてゐる。

夕映にひたゆく汽車の影を追ひしばし走れる馬のありたり

石狩のことを頭におきつつ讀めば肯かれる歌だ。かうした歌を中心にます〳〵努力してほしい。

「はだらにも」「秋晴れを」等は大体難の無い歌だ。殊に「秋晴れを」の歌はその情敍が目の前に浮んで來る始くはつきりしてゐる。

他の三首も可なりの程度まで行つてゐるが、「秋やゝ動く」「花を延べたる」等聊か不明瞭な言葉である。

「秋夜」

うら寒き月照る野邊を友とゆけば黑き我が影白き彼の顏

の一首が應募された。月照る秋の野邊を友と歩き乍ら月の光で友の顏の白さと自分の影の黑さとの對照に興味を感じで詠んだ歌だが、その表現が聊か觀念的になつてゐる。かうした表現法は餘程注意しないと成功しない。選外としたが努力されんことを望む。

「感慨一束」（由良陽太郎）

應募歌三十八首中々力作が多い。材料の豐富さと感情の纖細さは應募歌中特色あるものであつた。唯惜しい事にはたつた三十一文字の短歌としては形式に於ても言葉に於ても聊か不用意な所があり、もう一歩苦心してほしいと思ふ所が少くない。立派な歌もさうした一寸とした点でこはしてゐるといふ歌が相當にある。實に殘念な缺点である。「犬丸教授惜別」の三首は前號の雜誌の犬丸教授の歌と併せて讀む時その感慨は一層深い。二番の歌「春なるを」は再考すべきだ。「拍手して」の歌の「ラスト・レクチュア」は此の場合何らの不自然さも感ぜられず、却つて學生らしい雰圍氣があらはれてゐる。

「湯河原は」の下の句「滴に遠き將來を想ふ」は未だ表現の仕方が不十分である。この歌自身の調子といふものを考へてそれに相應はしい表現でかうした内容を言ひ表はす樣に苦心してほしい。

夏なるを冷き雨の落ち居たり湯河原吾れ獨り山を見擧ぐる

この歌の「湯河原吾れ獨り」の字餘りは歌全体から見れば左程無理とも感じないが、併し何か氣にかゝる言葉である。それは兎に角「旅に拾へる」の中で最もよい歌だと思ふ。いかにも旅の氣持があらはれてゐる。

臺所町の下宿の傍に牧場のあり秋雨に鳴く牛は悲しも

結城哀草果の歌を思はせる。素朴な表現法の中によくこの一首の持つ氣持があらはれてゐる。上の句についてはきつと各種の議論があることと思ふが、此の歌としてはかうした表現が却つて効果をあげてゐるのではあるまいか。

「さむしろ雜詠」他の三首（不掲載）は「さむしろ」といふことが目につきすぎて成功してゐない。「砂丘の時雨」二首（不掲載）の行き方は中々六ケしい。成功するもしないも一寸した点に依る。茂吉の歌等を參考して勉强すればもつと實感が出て來ることと思ふ。

淋しさは音だもあらず更くる夜をさゝと出で來し小守宮の影

物思へば何時か出で來し小守宮の吾れを見凝むる秋も暮れけり

之は「守宮の子」四首の始めの二首であるが、この二首は餘りにも重苦しく未だ〳〵考へ直す餘地がある。

短歌（三好廉）

二首とも捉へ所はよい。歌全体としての感じは大体出てゐるが、「繩なふ音の聞え來る」「獨り稚子立つ」「ふみに疲れて床に入れば」等はもつと考へる餘地がある。歌全体を生かすためには飽く迄細部にも氣をつけねばならない。

不掲載短歌

短歌

「小菊」「秋風」の二首とも古今集にある樣な歌である。手先だけで作つたといふ感じで人に迫るものがない。感傷そのものは少しもわるくないが、それを短歌にあらはす時は一度その感傷を拔け切らねばならない。さうして始めて歌にしみ〳〵とした味が出て來る樣になる。

「廢墟」

友の手を頰に押しあて人知れず泣かなんとする深き絶望

映畫館を出でし瞳に白々と廢墟の如き夕暮の街

五首の中の比較的いゝものであるが、かうしたゆき方は殊に一言一句が歌全体に微妙な作用を及ぼすから餘つ程注意せねばならぬ。よく讀んでみれば自らこの歌の缺点があきらかとならう。もう一歩の所で失敗してゐる。惜しい作だ。

「上信の山」

十三首の中どうも採れさうな歌が無かつた。といふのは非常に投げやりだ。言語等殆ど苦心してゐる跡が見えない。歌とはもつと自己の内から湧いて來なければならぬ。内から湧き起つた歌は決してこんな輕卒なものとはならぬ。歌に入つて未だ日が淺い樣に思はれるが、赤彦、節等の歌集を一つ一つ味つてゆけばずつと調子が變つて來ると思ふ。

多作と共に歌集を熟讀頑味されるやうに

望む。

短　歌　（三十次君）

應募歌二首に關していへば「上信の山」の作者の批評がそのまゝ君にもあてはまる。併し君の歌は歌に對する熱心さの跡があらはれてゐる。初歩の人は何といつても歌を多く讀んで出來るだけ短歌の本質を實感として捉へて頂きたい。

俳　句

現俳壇も新しきものの產みの苦みたる混沌の中にある。本年度俳壇で最も論爭された問題は「俳句性とは何ぞや」と言ふ極めてプリミチヴな問題であつた。一方に舊体依然たる老人的寫生の倦怠調あり、他方傳統を棄てた主知主義的安價浮薄な新興派ある現在に於て、改めて「俳句性」が論議される樣になつたのは、極めて當然のことである。こゝに於て古典への復歸就中芭蕉精神の復興が叫ばれ「俳句に於ける人間の探求」てふ課題が提示された。とりも直さず俳句の俳句たるべき本質への肉迫であり、純粹俳句の要求される所以である。之は日本的なるものへの開眼である。あらゆるものは今や萬葉精神に迄遡らねばならぬ。

俳句も又低回趣味を脫して力强い荒魂の叫びに至らねばならない。

青年はその情熱と眞摯さに何より賴るべきであり、その俳句は往々にして俳句の誤解される老人趣味を脫して雄渾眞純な止むに止まれぬ「ひたぶる心」の自らなる流露であるべきである。

○作品批評（掲載作品は大河教授の選）

秋冬の間（目崎君）此の作者の注目さるべき處は、日常茶飯事の現象の奥に可成深く進み入つてゐることである。山口誓子は「風は篁にはもはや起らず自分の身のめぐりより起る」と云つてゐる。日常茶飯事の奥にも自然に裏付けられた動かぬ形而上的な世界がある。讀者は「入日寒く少女のテニス隱やかに」を味はれるがよい。又感覺の冴えは此作者獨得なものを持つてゐる。そして各句の境地が各々自己の發見した處であるのは見落されてはならぬ。

無理に感情を表現するため、却つて淺く、獨りよがりになつてゐる点がある。

吐息白々月に對ひて吐きて去る

若々しく好感の持てる句である。

斷片（澤木）作品は自然の若しくは身邊の冷嚴な世界を格調高く表現しようとしたのであるが、表現の不備のため內容貧困な句がある。自分としても暗中摸索の狀態にあるので、未だ獨自な立場を持てず、明彩を缺くのであるが、どうしても自然のために自然を描寫することに安住出來ない。それだけに現下の作品には未熟の故觀念的恨みが從つて居る。

（木下君）打込み足らず素材を無造作に投出してゐる爲、唯事の身邊報告に終つてゐる句が多い。但し

「秋の風裸身の父子笑み會へる」

は、可成甘いが、その眞純の故に評價さるべき句でほのぼのとした血迄感ぜられる。今後の精進に大いに待つ。

無月（市川君）一句では分らないが、相當の技巧を思はする句である。今後の多作に期待する。

アルバイト（儀我君）やはり現象の奥への打込みが足らない。第一句は作爲のない

所が取るべきであるが、駄作である。第二句も平凡である。

伊豆大島（泉君）いづれもきめの細かい危げのない句である。殊に「靜かなる朝の椿路牛鳴ける」は捉ふべき處を捉へた好い句と思ふ。俳句の表現形式把握のためには愼重な態度も必要であるが、餘りお靜かな境地ばかりをねらふ嫌ひがある。動的な著しい句を望む。

木枯（青園君）適確に對象を捉へてゐるのであるが、その觀点が稍古く類型的である。それ故、句が平凡で深みのない恨みがある。その割に甘さの從はない質朴な線の太い處がよい。

熟柿（西本君）泉君と類似の傾向である。

「熟柿の影白壁に夕陽映え」は細みのある香氣高い力作である。形式的把握には一應達してゐる、今後新しい自己の眼を開いた勉强を期待する。

桔梗（高畠君）作者は安々と巧みにまとめてゐるのであるが、迫力の足りないのは如何なる理由か？　それは强ち自由律と定型律の表現の相違からでもあるまい。全体的に小技巧の作と思はれる点が多い。意慾の旺溢した作品を望む。

詩

今回は作品が多數集つて非常に嬉しかつた。四高詩壇もやつと芽をふいたやうである。此の芽を育てる意味で宛然現代四高詩歌集の觀がある。

今後に大いに期待する。世界現代詩のそれに比し稍レベルを下げたが、その意圖する所を汲まれたい。現在はもはや過去に屬す。未來こそ諸君の開拓すべきバージン・ソイルである。

四高・詩の會が出來た事を附記しておく。投稿者諸君に感謝する。

編輯後記

吾々の生活を離れて文化は無い。文化を實生活より抽象して考へることは、東洋の傳統より遠く乖離してゐる。日常性を重んじ、文化を生活的に行ふことこそ吾が日本の傳統であつた。雜誌「北辰」は全四高生徒の生活の自らなる發現であり、更に四高生徒自身の自己批判の契機となる。かくして前途に四高文化の創造が續けられる。

雜誌「北辰」を概觀して注目すべきはあらゆる部面に於て、眞摯な瑞々しい作品に滿ちてゐることである。殊に論文に於て、哲學・歷史・宗教・經濟・文學・科學の質的標準の高い作品の揃つたのは册中の白眉であつた。短歌・俳句・詩は量的豐富さは喜ばしいが、稍內容貧困であつた。次號よりの嚴しい質的向上が期待される。又小說では、短篇多數の應募があつたが、低調にして個性の乏しいものばかりであつた。但し佳作として飜譯と市川君の短篇が掲載出來たのは幸である。小說欄の充實は次號に待つべく、文藝班員の努力を切望する。

末筆ながら御多忙中のところ題字並びに卷頭言を校長先生より、紀行を熊澤先生より賜つたことを厚く御禮申上げます。合せて、犬塚教授を初め諸先生方の原稿御閲覽によせられた御援助を感謝致します。

——×——×——

雜務多忙のため論文・創作・詩の批評を載せることの出來なかつた事をお詫びする。來學期初頭「北辰」第百四十八號の批評會を開催する筈であるからその際諸君の御指導を給りたい。

兎に角、文化は未來に創造すべきであつて、受享さるべきものでない事は喋々を要しない。「北辰」は、あく迄吾々四高生徒の文化創造の雜誌であつて、第二義的な報告雜誌ではない。「北辰」が文化部發行となつたのもかゝる達觀よりなのである。而して文藝班は文章報國の理念の下に、四高文化を綜合すべく「北辰」の編輯に當つた。

此處に「北辰」紀元二千六百年記念號は生れたが、此の內容は、やがて新世代を脊負ふべき青年學徒の就中四高生徒の現實の姿の表現である。その中には混沌の內に未だ過去の世代の人々の窺ひ得ぬ眞理の萠芽・がけぶつてゐるに違ひない。精讀して發展創造の一契機とすべきである。

（澤木記）

文化部文藝班編輯委員

委員　文甲二ノ一　市川定三
同　文甲二ノ一　石灰茂
同　文乙二　澤木欣一
同　理甲二ノ二　石上晃

第百四拾九號原稿募集

一、論文・小說・詩歌俳句・隨筆
　其の他
一、一月二十日締切
　冬期休暇を利用せられ質的力作を期待す

文化部文藝班

昭和十五年十二月十五日印刷納本
昭和十五年十二月二十日發行　第百四拾八號

〔非賣品〕

第四高等學校內
編輯兼發行者　犬塚岸三
石川縣金澤市高岡町九十番地
印刷者　高橋覺吉
石川縣金澤市高岡町九十番地
印刷所　明治印刷株式會社

發行所　金澤市仙石町三十七
第四高等學校北辰報國團文化部